

だらうと存じます。是を別方面の言葉で云ふと、子はみんな孝行のもの、妻は必ず貞節あるものと認めて居たらしいのであります。だから芝居でも小説でも非常な孝行ものや貞節ものが、恰かも隣り近所に何人でも居るかの如き様子であらばれて参るのみならず、見物や讀者も亦實際にくたりでも存在してゐるうちの代表者だと云はぬ許りの顔付で、之に對して居たのであります。居たのでありますと云ふと私が元祿時代から生きてゐた様に當りますが、どうもさうに違ひないと思ひます。あんな芝居や書物を見る人は、眞面目に熱心に我を忘れて釣り込まれてゐたに違ひないでせう。それでなければ今日迄傳はる前にとくに湮滅して仕舞ふ筈であります。さうすると、ある御嬢さんは朝顔になつたり、ある細君は御園になつたり、またある若旦那は信乃や權八の氣でゐたんでせう。そりや満足でせう。自己の情操を満足させると云ふ點から云つたら満足に違ひない。自分ばかりぢやない、自分の子や女房や夫をこんなものだと考へてゐたら定めし満足に違ひない。尤もあの時代に出てくる悪黨は又非常なもので到底想像が出来ない様な悪黨が出て來ますが、是は善人を引き立てる爲なんだから、此方には誰もならうと志願するものはないから安心です。それぢや善と惡の混血兒あひまはと云ふと殆んど出て來ないんだから、至極單簡で重寶であります。かう云ふ譯で一家町内芝居へ出てくる様な善人で成り立つてゐたのであります。それぢや天下太平なものでありさうだのに、矢つ張り夫婦喧嘩も兄弟喧嘩もありました。あつたに違なからうと、

まあ思ふのです。しかも此喧嘩が彼等が完全なる善人であつたと云ふ證據になるから、不思議であります。ちとバラドックスになり過ぎますが、凡そ喧嘩のものは御互を完全の人間と認めて、さてやつてみると案外豫期に反するから起るのであります。だから喧嘩をする爲めには理想が必要であります。次に此理想と實際とは一致してゐるものだと認める事が必要であります。今日も喧嘩は毎日ありますが、何も理想的人物でないから癪に障ると云ふ様な野暮は中學生徒のうちにも、まあない様で至極便利になりました。其代り人間の相場は聊か下落致した様なもの、結局此方が住み安いかの様に存ぜられます。所が舊幕時代には、みんな理想的人物を以て目され、理想的人物を以て任じて居たのでありますから、大變窮屈で御座いましたらう。何ぞと云ふと、町人の癖になかと胸打杯を喰ひます。女房の癖に何だ無暗むくらにふくれて杯とどやされます。子供の癖に何だ親に向つて口答をして杯と遣り込められます。兎角何々の癖にと、癖が流行した世の中です。癖はにの流行はる世の中程理想の一定した世の中はないのであります。町人はかくあるべきもの、女房はかくすべきもの、子供はかく仕へべきものと、杓子定規で相場が極つて居ります。尤も是は雙方合意の上でなければ成立しない譯でありますから、町人の方でも、子供の方でも、女房の方でも、どんな理想的人物を以て豫期されても、立派に其豫期を充たす積りで居たのであります。従つて自分は天下一の孝行者で、天下一の貞女で、天下一の町人——は、ちと可笑しい

が、何しろ立派なものど心得て居たんでせう。かう己惚れておれば世話はない。大抵の事が否應なしに進行します。萬事が腹の底で済んで仕舞ひます。それで上部丈はど迄も理想通りの人物を標榜致します。ちと偽善になるやうですが、悪徳の天真爛漫よりは取り扱ひ易いから結構です。中には腹の底で済んだなとさへ氣が付かないでゐるものも澤山あつたさうです。

この有様で御維新迄進んで参りました。それから科學が泰西から飛んで参りました。今日迄約四十年立つたので、大分趣が變つて参りました。科學の訓練を経た眼で、人を見たり、自分を見たりする事が大分流行つて参りました。然し此精神が一般に行き渡つて居ない爲め、且つはあまり大切でない爲め今日迄あまり進歩して居りません。なぜ大切でないかと考へて見ると面白いのであります。自分で自分の腹の中を検査して見ると、さう自慢になる事ばかりはありやしません。自分ながら淺間しい事も澤山出て來ます。然しいくら淺間しいものが見當つた／＼と云つて觸れて歩いたつて、自分の恥になるばかりで、あまり發明家として尊敬を拂つては貰へません。だから折角發見しても黙つて居る方が得策であります。骨を折つて、探がし當て、自分一人で氣持をわるくして、さうして苦い顔をして塞いでゐるのも、あまり景氣のいゝものでもありませんから、つい遠慮が無沙汰になりがちで、吾身で吾身が分つた様な、分らない様な心持で其日／＼とぶらついて居ります。かうしておれば、いつ迄己惚れてゐたつて、變事が起らない限りは大丈夫、己

惚れつゞけに己惚れて死ねますから、折角土をかけた所を掘り返して腐つた死骸をふん／＼嗅いで見るなんて、むく犬の所作をするには及ばん仕儀になります。私も其一人であります。私の妻も其一人であります。折々はあれでも令夫人かと思ふ事もありますから、向ふでも、あれがわが郎君かと愛想をつかす事もあるんでせう。夫でも私は立派な夫の積で済まして居ますから、奥方の方でも天下の賢妻を以て自任して居られる事と存じます。斯様の己惚は存外多いもので、諸君迄私共の仲間へ引き入れるのは恐縮であります。可成勢力範圍を擴張して置く方が勝手でありますから、遠慮のない所を申しますと、滔々たる天下皆然りと申しても差支ないかも知れません。腹の奥の方では博士を宛にしてゐながら、口の先では熱烈な戀だ杯と云ふのがあります。さうかと思ふと持參金が欲しい様な氣分を打ち消して、なにあの令嬢の淑徳を慕ふのさと済まし切つてゐます。それで偽善でも何でもない、兩方共眞面目だから面白いものです。そこで我々の様な觀察力の鈍いものは、なるべく修養の功を積んで、それから、大膽な勇猛心を起して、赤裸々な所を恐れず書く事を力める必要が出て参ります。

それでは今日の文學に客觀的態度が必要ならば、客觀的態度によつて、どんな事を研究したらよからうと云ふ問題になります。私は私の氣の付いた數ヶ條を御参考の爲めに述べて、結末をつけます。

第一は性格の描寫に就いてあります。是は小説とか劇とかに必要なもので、作家が此點に於て成功すれば、過半の仕事は既に終了したものと迄思はれて居ります。そこで俗に成功した性格とはどんなものかと調べて見ると活動の二字に歸着して仕舞ひます。又どう考へても此二字以外には出られない様に思ひます。しかし、活動にも色々あるが如何なる意味の活動か一と口に云へるかと聞かれると、少し臆斷過ぎる様ですが、私は斯う答へても差支ないと考へます。普通の小説で、成功したものと稱せられてゐる性格の活動は大概矛盾のないと云ふ事と同一義に歸着する。之を他の言葉で云いますと、ある人が根本的にあるものを握つてゐて、千熊萬狀の所作に悉く此あるものを應用する。従つて所作は千熊萬狀であるが、之を奇麗に統一する事が出来る。しかも之を統一すると此あるものに落ちて仕舞ふ。猶言ひ換えると、描寫された性格が一字もしくは二三字の記號につまづいて仕舞ふ。勇氣のある人、親切な人、吝嗇な人と云つた風に簡單になる、即ち覚え易くなる。まあ、こんなものではなからうかと思ひます。つまりは、一篇の小説に一定の意味があつて、此意味を一句につまづめ得るのを愉快に思ふ様に、同じく一句につまづめ得る性格をかき終せたものが成功した様な趣が大分あります。然し此意味で成功した性格は、個人性格の全面を寫し出したものではありません。(特別の場合を除いては) 個人の全面性格のある顯著な特性を任意に抽出して、抽出した丈を始めから終迄貫ぬかして、作家にも讀者にも都合のいゝ性

格を創造したものであります。しかも自然の法則に従つて創造したのではなくつて、小説の世界に便宜を與ふる爲めに、ある程度迄自然の法則を破つて、創造したものであります。普通の場合に於て、個人の性格中のある特性が、其個人の生涯を貫ぬいて居る事は事實であります。が此特性丈で人物が出来上つて居らん事も事實であります。のみか、此特性に矛盾反對する様な形相を澤山備へて居るのが一般の事實であります。だから諺にも近侍の眼から見れば英雄も亦凡人に過ぎずと申します。極めて簡單で例にならん程の例でありますが、人事には大變冷淡な人が、健康丈には恐ろしく神経過敏に見える事があります。家族には無愛想極まつても朋友には此上なく叮嚀な男も御座います。かう云ふ點を詳しく調べて見たらば、或は矛盾のある方が自然の性格でない方が小説の性格と迄云はれはしますまいか。

そこで小説家、戯曲家のうちでも此點に注意し出して、遂に矛盾の性行をかく様になりました。さうして讀者も之を首肯する様になりました。柔順であつた妻君が、ある事情のもとに、急に夫に反抗して、今迄に夢想し得なかつた女丈夫になると云ふ様な例であります。然し是は在來の敘述を一步複雑の方面へ進めたものに過ぎません。と云ふのは、明かに矛盾した特性をことさらに並べて、對照の結果讀者の注意を此二焦點に集注するからであります。だから性格の複雑と云ふ事丈を眼中に置いて見ると、是はまだ一單調のものであります。だから飽迄も客觀的に性格の

全局面を描出しやうとすれば、今迄の小説や戯曲にあらはれたよりも遙かに種々な形相が出て来る譯であります。さうして形相が異なるに従つて、相互の間に一致がない様に見えるのは、已を得ぬ結果であります。従つて描寫が客觀的に微妙であればある程、纏まりがつかぬ性格が出来安いでせう。一言にして蔽ふ事の出来ない性格になり易い、記憶に不慣れた性格になり易いでせう。要するに大變出來のわるい、下手にかいた性格の様に見えるでせう。從來のかき方は、こゝに風邪を引いた人があるとする、其人の生涯を通じて、風邪を引いた部分丈を抜き抜いて書くのですから、分り易く明瞭になる代りには甚だ單調にして有名なる風邪引き男が創造されて仕舞ひます。本來を云ふと病氣の時と、丈夫な時と、病氣でも丈夫でもない時と三通りかいて、始めて其人の健康の全局面が、あらはれると云はなければなりません。しかし、さうすると、どうしても散漫に見えます、要領を得ない様に見えて來ます。風邪でも此通りですが、性格は是よりも遙かに複雑であります。例へばAなる性格の第一行爲をA¹とすると、A¹からして類推の出来るA²A³A⁴を順次に描出して行けば、全局面は無論出て來ない。大抵は一特質の重複に近くなりまゝす。もしA¹A²A³A⁴が因果の法則で連結されて居つて、此諸行爲の内容に密接な類似を示すときは、重複が變じて發展となります。發展ではあるがA¹が基點であつて、其A¹は全性格の一特性であるからして、A¹の發展も亦全性格の發展と見做す譯には參りません。私は此種の重複でも發展でも

文學上價値のないものと斷言するのではないのですが、其方は既に大分ある事だから、全性格の描寫と云ふ方に客觀的態度を以て少しく進んで見たら開拓の餘地が澤山あるだらうと思ひます。其代り在來の小説を讀んだ眼から見れば、散漫になります、滅裂になり易いです、又は神祕的に變じませう。然し吾人が客觀的描寫に興味を有してくると、漸々此散漫と滅裂と神祕を妙に思はない様な時機が到着しはせまいかと思はれます。言葉を換えて云ふと形式の打破をある程度迄意に留めなくなりはせまいかと考へるのです。然し一應は御斷りを致して置きます。吾々の世界は既に冒頭に於て述べた通り撰擇の世界であります。光線にしても、音響にしても、一定の振動數以上もしくは以下のものは、見る事も聞く事も出来ない有様で御座います。性格の全部と云つた所で、全部が悉く觀察され得るとは申しません。無論比較的と云ふ文字を挿入して御考を願ふより外に致し方がありません。夫から客觀的態度で時間の内容を寫して行くと（ある一物につき）此連続が因果になるには相違ありませんから、いくら散漫でも滅裂でも神祕でも因果を離れるとは申されません。只其因果が、因果の律にまとめられる程に、經驗上熟知されてゐないから、散漫で滅裂で神祕と見る迄の事でありませう。だから此種の因果の經驗を繰り返して、其中から因果の律を抽象する事が出来ると同時に、散漫は統一に歸し、神祕は明白になります。（性格の描寫に關連して研究の價あるのはムードの觀察であります。ムードの描寫は昔の小説には殆んどない

と思ひます。しかも此ムードから面白い行爲が出て、慥かに興味のある結果を生じます。ムードと性格の關係其他は今述べません。又述べられる丈に頭が整つて居りません。

性格の解剖については、心理状態の解剖であります。最も性格と關係があるのは無論であります。一言にして云ふと今日の人の心的状態は昔の人の心的状態より大分複雑になつて居りますからして、同一の行爲でも、其動機が遙かに趣を異にしてゐる譯で、そこを觀察したら、充分開拓の餘地があると申す意味で御座います。例へばこゝに一人の男があつて人殺しをする。何故人殺しをしたかと云ふに人殺しが目的ではない、ほんの方便で、人殺しをしたあとの心持ちを痛切に味はつて見たいと云ふ様な藝術家が出て來たとするならば——まだあんまり出ない様ですが——どうでせう。いくら説明したつて元祿時代の人物には分らないに極つてゐる。と云ふものは此男の人殺しに對する評價は、人殺しから生ずる自己の心裏の經驗に對する評價より遙かに相場が安いのであります。平たく云へば人殺しと云ふ事を左程わるく思つてゐない。のみならずわざと罪を犯して置いて、犯したあとの心持を痛切に味はうと云ふ様な込み入つた考へは到底大石良雄や室鳩巢などに分るものではありません。勿論今の人にも分らんかも知れませんが、今の人ならば略想像はつきますから、夫迄複雑なのに違ありません。又戀と云ふ一字でも此頃になると戀と云ふ一字では不十分な位種類が出來はしまいかと思はれます。既に沙翁のかいたものでも分

ければ幾通りにも分けられる戀が書いてありますが、近代に至ると其區別が益々微細になりはせぬかと思はれます。ゴンクールの書いたラフォースタンと云ふ小説のなかにはこんなのがあります。有名な女優があつて、此女優がある英國の貴族と慇懃を通じた儘夫（おとこ）限幾年か音信不通の姿で居りました所、貴族の方では急に親が死んで、莫大の遺産を相続する様な都合になつたので、今は結婚其他の點に就ても何人も噂を挟む事の出來ない身分でありますから、多年戀着して居た婦人を正式に迎へるのは此時と云ふので、狂ふ許りに喜んで、佛蘭西へ渡りますと、女の方も固より深い仲の事でありましたから、泣いて分れた其日の通り大事に男の事を思ひつゞけてゐた折で、無論異存のある筈は御座いません。目出度結婚致します。それ丈だと是も陳腐なのですが、是から先が山であります。情緒婚をして見ると夫の方では金に不足のない身ではあるし、女房を女優にして置くのは何となく心配ですから、もう廢業したら善からうと云ふ相談を持ち懸けます。所が細君の方はもと／＼役者が性に合つてゐる譯なんだからかどうか分りませんが、何となく廢めたくなかつたのであります。然し可愛い男の云ふ事だから、厭な心を抑へて亭主の意に従ひます。夫から二人で非常な贅澤をやります。嬉しい中で一所になつて、金を使ひたい丈使ふんだから、幸福でなければならぬ筈ですが、そこが妙なもので、細君が女優をやめてからと云ふものは何となく氣色が勝れなくなります。いくら夫が機嫌をとつても浮き立ちません。と云つて固々憎い

生の局部を描寫して、之を一句にまとめ得る様な意味を與へる事であります。落語家の所謂落ちをつけた小説の様なものになります。是は近頃大分流行致して居りますから、別段布衍する必要も御座いますまい。唯御注意丈に留めて置きます。前の例杯も此所に應用が出来ます。「御前は必竟藝術家だ。本當の戀は出来ない」是が一篇の主意の落着する所であります。但し落ちを取る目的は綜合にあるので、前の二ヶ條は解剖が主でありますから、目的の方角は反對になります。だから一寸區別して置きました。

次には、人生に於て、容易に注意を拂つて置かなかつた現象、従つて滅多にない事と云ふ意味にもなりますが、此方面にも大分新しい材料がある事と思はれます。此間友人からこんな話を聞きました。其男の國での事ではありますが、ある藝妓がある男と深い關係になつてゐたのださうで、其兩人がある時船遊びに出ました。そこいらを漕ぎ廻つた末、都合のいゝ磯へ船をもあひまして、男が舟を棄て、岸へ上りました。所が岸邊に神社か何かあると見えて、磯からすぐに崖になつて、崖のなかゝら石段が海の方へ細長くついて居ります。男は其石段を登つたんださうです。女は船のなかゝら、石段を上つて行く男の後姿を見て居たさうです。其後姿を見てゐた時、急に自分の情夫に愛想をつかして仕舞つたんだと友人は話しましたが、其原因は私にも、友人にも、本人の藝者にも無論分りません。是と類似の例をゼームスの宗教的經驗と云ふ本や、スターバツ

男ではないんだから粗略にする譯はない。眞底夫の事はいとしく思つてゐるのであります。只心が陽氣になれない丈なのですが、夫の方では最愛の細君の一撃一笑も千金より重い譯ですから、捨て置かれんと云ふので慰藉旁以太利へ旅行に出掛けます。然るに男は出先で病氣に罹ります。細君は看病に怠りは御座いせんが、定業はしかたのないものでとう／＼死んでしまひます。其死ぬ少し前に例の通り細君が看護の爲め枕邊へ寄り添ひますと、男は何時になく荒々しい調子で、手を以て細君を突き退ける許りに、押し返して、御前は必竟藝術家だ。本當の戀は出来ない女だと云ふのです。夫が結末であります。御前は必竟藝術家だ本當の戀は出来ない女だ。是が一種の戀であります。有名なルーチンの戀も普通一般の戀ではありません。ルーチン一流の戀であります。ズーデルマンの書いたフェリシタスの戀杯は尤も特色を帯びた一種の戀の様に思ひます。是が日本の昔であつて見ると、大概似たものゝ様に見えます。八重垣姫の戀も、御駒才三の戀も、御染久松の戀も、まああたり寄つたりであります。何故似たり寄つたりかと云ふと、異種類の戀はなかつたと解釋する事も出来ずし又、觀察力が鈍かつたからだと斷定する事が出来ませんが、まづ兩方と見て置ませう。がまづざつと、こんな譯でありますから、斯様に複雑になりつゝある吾々の心のうちをよく觀察したら、色々面白い描寫が出来る事だらうと思ひます。

あまり長くなりますから、あとは可成手短かに指摘して通り過ぎる位に致します。次には、人

クの宗教心理學で見た事がありますが、個人の經歷譚として聞いたのは是が始めてとあります。これはあまり突飛な例かも知れませんが、こんな經驗で文學の形になつてあらはれて居らないものが大分あるだらうから、さう云ふ研究をしたら材料は随分出て來はすまいかと思つて居ります。此外因果の關係で人の氣につかなかつた事やら、類型を脱した個性をかく方面やら色々あるだらうと思ひますが、此三四ヶ條は理論上是々に分れると云ふのでなくつて、只思ひ付いた事を列べた迄であります、どこで切つても同じ事でありませうからこれで已めて置ませう。然し今日の吾邦に比較的客觀態度の敘述が必要であると云ふ事は、向後何年つゞく事が明らかには分りません。西洋では illumination が盛に行はれた、十八世紀の反動として十九世紀の前半に浪漫的趣味の勃興を來しました。それが變化して又客觀的態度に復して參りました。二十世紀はどうなるか分りません。此二潮流が押しつ押しされつ居るうちに、つまりは兩方が一種の意味に於て一様に發達して參ります。さうして發達した兩方が交り合つて雜種の雜種と云ふ様なものが、いくらでも其間に起つて參ります。右へ行つたり左へ寄つたりするのは、つまり態度文の話で、此態度から出る敘述は決して繰り返されるものではありません。どこか變つて參ります。杜撰ながら自分の考では、世間一般の科學的精神が、情操の勢力より比較的強くなつて、平衡を失ひかけるや否や、文壇では情操文學が隆起して參りますし、又情操の勢力が科學的精神を壓迫する程に隆

起してくると、客觀文學が是非とも起つて參る譯だと考へます。文壇は此二つの勢力が互に消長して、平衡を回復し、回復するかと思ふと平衡を失して永久に發展するものでありませう。であるから同時同刻にせよ西洋の文學にあらはれた態度が、必ず日本の態度の模範になる理由は認められません。前段に申した今日吾邦に於ける客觀文學の必要とは、我邦現在の一般の教育状態からして案出した愚考に過ぎないのであります。然しながら、矢張り同一の立場から見ると、殆んど純客觀に近い態度の文學を必要と認める程情操の勢力は社會を威壓して居る様には思はれません。客觀に近い態度の文學は不必要に近い様に思はれます。維新後今日迄の趨勢を見たら、徒らに客觀にのみ重きを置く文學は不必要に近い様に思はれます。維新後今日迄の趨勢を見ますと、猛烈なる情操に始まつて四十年間次第々々に情操の降下を経験して居りますから、現時はまだ客觀に重きを置く方を至當と存じますが、向後日清戦役もしくは日露戦争の如き不規則なる情操の勃張を促がす機會なく日本の歴史が平靜に進行するときは、情操は久しからずして科學的精神の壓迫を蒙る事は明らかでありますから、情操文學は近き未來に於て必ず起るべき運命を有つて居る事と存じます。但し未來の情操文學は如何なる内容を以て、如何なる評價をなすやに至つては固より測り難いのは勿論であります、夫迄に發展した客觀描寫を利用して之を評價の方面に使ふのは争ふべからざる運命と存じます。これを結末の一句として此講演を終ります。

田山花袋君に答ふ

本月の「趣味」に田山花袋君が小生に關して斯んな事を云はれた。——「夏目漱石君はズーデルマンの『カツツエン、ステツヒ』を評して、其益、序を逐うて迫り來るが如き點をひどく感服して居られる。氏の近作『三四郎』は此筆法で往く積りだとか聞いて居る。併し云々」

小生は未だ曾て「三四郎」をズーデルマンの筆法で書くと言つた覚えなし。誰かの話し違か、花袋君の間違だらう。疎忽なものが花袋君の文を読むと、小生がズーデルマンの眞似でもしてゐるやうで聞苦しい。「三四郎」は拙作かも知れないが、摸擬踏襲の作ではない。

花袋君は六年前にカツツエン、ステツヒを翻譯せられて、翻譯の當時は非常に感服せられたが、今日から見ると、作爲の痕迹ばかりで、全篇作者の拵へものに過ぎないと貶せられた。褒貶は固より花袋君の自由である。然し今日より六年後に、小生の趣味が現今の花袋君の趣味に達すると、達せざるとも固より小生の自由である。是も疎忽ものが讀むと、花袋君と小生の嗜好が一直線の

上に於て六年の相違がある様に受取られるから、御斷りを致して置きたい。

花袋君がカツツエン、ステツヒに心酔せられた時分、同書を獨歩君に見せたら、拵らへものぢやないかと云つて通讀しなかつたと云つて、痛く獨歩君の眼識に敬服して居られる。花袋君が獨歩君に敬服せらるゝと云ふ意味を漱石が獨歩君に敬服すると云ふ意味に解釋するものはないから此點は安心である。

愚見によると、獨歩君の作物は「巡查」を除くの外悉く拵へものである。(小生の讀んだものに就て云ふ) 但しズーデルマンのカツツエン、ステツヒより下手な拵へものである。花袋君の「蒲團」も拵へものである。「生」は「蒲團」程拵へて居られない。其の代り滿谷國四郎君の「車夫の家」のやうな出來榮えである。

拵へものを苦にせらるゝよりも、生きて居るとしか思へぬ人間や、自然としか思へぬ脚色を拵へる方を苦心したら、どうだらう。拵らへた人間が生きてゐるとしか思へなくつて、拵らへた脚色が自然としか思へぬならば、拵へた作者は一種のクリエイターである。拵へた事を誇りと心得る方が當然である。たゞ下手でしかも巧妙に拵へた作物(例へばチューマのブラック、チューリツプの如きもの)は花袋君の御注意を待たずして駄目である。同時にいくら糊細工の臭味が少くても、凡ての點に於て存在を認むるに足らぬ事實や實際の人間を書くのは、同等の程度に於て駄

目である。花袋君も御同感だらうと思ふ。

小生は小説を作る男である。さうして所々で悪口を云はれる男である。自分が悪口を云はれる口惜し紛れに他人の悪口を云ふ様に取り立ては、悪口の功力がないと心得て今日迄謹慎の意を表してゐた。然し花袋君の説を拜見して一寸辯解する必要が生じた序に、端なく獨歩花袋兩君の作物に妄評を加へたのは恐縮である。

小生は日本の文藝雑誌を悉く通讀する餘裕と勇氣に乏しいものである。現に花袋君の主宰して居らるゝ「文章世界」の如きも拜見して居らん。向後花袋君及び其他の諸君の高説に對して、一御答辯を致す機会を逸するかも知れない。其時漱石は花袋君及び其他の諸君の高説に御答辯が出来かねる程感服したなと誤解する疎忽ものがあると困る。序を以て、必ずしも然らざる旨を豫じめ天下に廣告して置く。

— 四一、一一、七『國民新聞』 —

コンラツドの描きたる自然に就て

一月二十七日の讀賣新聞で日高未徹君は、余の國民記者に話した、コンラツドの小説は自然に重きを置き過ぎるの結果主客顛倒の傾があると云ふ所見を非難せられた。

日高君の説によると、コンラツドは背景として自然を用ゐたのではない、自然を人間と對等に取扱つたのである、自然の活動が人間の活動と相交渉し、相對立する場合を寫した作物である。是を主客顛倒と見るのは始めから自然は客であるべき筈との僻目から起るのである。——まあ斯ういふのが非難の要點である。

如何にも御尤な御説で、余は之に反對すると云はんよりは、寧ろ大賛成を表したい位である。先達も^{先達}ある人がコンラツドの様なものを描いて何所が面白いかと聞いたから、余は、自然の経過は人情の経過と同じ様な興味を以て讀む事の出来るものだ、普通の人情小説なら、コンラツドのは自然情小説だと答へた位だから、余は日高君よりは一步極端に走つて、自然と人間を對等に

取扱ふ境を通り越して、自然を主、人間を客と見た面白味をさへ解してゐる積りである。

現にタイフーンの如き又、舟火事（名前を忘れたり）の如きは單にタイフーンを寫し、單に舟火事を寫したものと立派な雄篇である。首尾一貫前後相待つて渾然と出来上がつてゐる。何故かと云ふと、篇中に出て来る人間の心狀、及び動作が悉くタイフーンと舟火事なる自然力を離れずに、何所迄も密接な關係を以て展化進行するから、自然と人間が打つて一丸となされて、偉大なる自然力の裏に副へ物として人間が調子よく活動するからである。

所が同じ船と海の事を書たものでも、船長が眼病で、船の操縦が出来ないのを、眼の見える振でどこ迄も押し通す様子杯になると、筋は海を離れて、船長自身の個人の身の上話に移つて仕舞ふ。だから斯う云ふ場合にいくら海が活動しても夫程役に立たない。夫よりか船長の一身上の生活の行路の方が氣にかゝる、其方を旨く取り扱つてくれる方が極力海を描寫するよりも大切であり、且讀者に難有いのである。余の見るところではコンラッドは其調子を取らない。

是ではまだ日高君は首肯されないかも知れないから尤も著しい例を挙げると、ゼ、ニガー、オプ、ゼ、ナーシツサスの様なものである。是は一人の黒奴が、ナーシツサスと云ふ船に乗り込んで航海の途中に病死する物語であるが、黒奴の船中生活を敘したものは、如何にも幼稚で、出来が悪い。然し航海の描寫としては例の通り雄健蒼勁の極を盡したものである。だから、余の

希望から云ふと、なまじひに普通の小説じみた黒奴といふ主人公の經歷はやめて、全くの航海描寫としたらば好からうと思ふのである。然らざれば入らざる風濤の描寫を割いて、主人公の身邊に起る波瀾成行をもう少し上手に手際よく敘したらば好からうと思ふ。

普通の小説の様な脚色がありながら、其方の筋は一向出来てゐないで、却て自然力の活動ばかり目醒しいので、余は之を主客顛倒と評したのである。所が短かい談話で、國民文學記者にコンラッド丈けを詳しく話す餘地がなかつたので、つひに日高君の誤解を招くに至つたのは残念である。

要するに日高君の御説は甚だ御尤もなのである。けれども余のコンラッドを非難した意味、及び此意味に於て非難すべき作物をコンラッドが書いたと云ふ事も、日高君が承認されん事を希望する。

此答辯は日高君に對してのみならず、世間の讀者のうちで、まだコンラッドを知らずして、余の説と日高君の説の矛盾丈けを見て其の調和に苦しむ人の爲めに草したのである。

明治座の所感を虚子君に問れて

○虚子に誘はれて珍らしく明治座を見に行つた。芝居といふものには全く無知無識であるから、どんな印象を受けるか自分にも丸で分らなかつた。虚子も其所が聞きたいので、わざ／＼誘つたのである。尤も幼少の頃は澤村田之助とか訥升とかいふ名を屢耳にした事を覚えてゐる。それから猿若町に芝居小屋が澤山あつたかの様に、何となく夢ながら承知してゐる。しかも、あとから聞くと訥升が最良だつたといふ話であるから驚ろく。それは大方嘘だらうと思ふ。物心がついてからは全く芝居には足を入れなかつた。然し自分の兄共は揃も揃つて芝居好で、家にあると不斷假色杯あひらを使つてゐるから、自分は此假色を通して役者を知つてゐた。夫から今日迄に團十郎をたつた一遍見た事がある許である。尤も新派劇は歸朝後三四遍見たが、決して好ぢやない。何時でも虚子に誘はれて行く丈で、行つたあとでは大いに辟易する位である。

○夫で明治座へ行つて、自分の枡へ這入つて見ると、たゞ四方八方さわ／＼して色々な色彩が眼

に映る感じが一番強かつた。尤も是は能と左程性質に於て差違はないが、正面の舞臺で女の生首を抱いたり箱へ入れたりしてゐるのに其所作には一向同情がない。萬事餘計な事をしてゐる様に思はれる。丸で西洋人が始めて日本の芝居を見たら、かうだらうと想像される位妙な心持であつた。全く魚の陸見物まなねである。

○夫から段々慣れて來たら、漸く役者の主意の存する所も略分つて來たので、幾分か彼我の胸裏に呼應する或ものを認める事が出來たが、奈何せん、彼等のやつてゐる事は、到底今日の開明に伴つた筋を演じてゐないのだから甚だ氣の毒な心持がした。

○その特色を一言で概括したら、どうなるだらうと考へると、——固より色々あり、又例の如く長々と説明したくなるが——極めて低級に屬する頭腦を有つた人類で、同時に比較的藝術心に富んだ人類が、同程度の人類の要求に應ずるために作つたものを遣つてゐるからだらうと思ふ。例を挙げると、いくらもあるが、丸橋忠彌とかいふ男が、酒に酔ひながら、濠の中へ石を抛げて、水の深淺を測る所が、如何にも大事件である如く、又如何にも豪さうな態度で、又如何にも天下の智者でなくつちや、こんな眞似は出來ないぞと云はぬ許りに勿體振つてやる。其勿體振る所を見物がわつと喝采するのである。が、常識から判断すれば誰にでも考へつく事で、誰にでも遣れる事で、遣つたつて仕様のない事である。だから勿體振り方はいくら藝術的にうまく出來たつて、

うまく出来れば出来る程可笑しくする丈である。それを心から感心して見るのは、どうしたつて、本町の生薬屋の御神さんと同程度の頭脳である。こんな謀反人なら幾百人出て来たつて、徳川の天下は今日迄つゞいてゐる筈である。松平伊豆守なんてえ男も是と同程度である。番傘を忠彌に差し懸けて見たりなんかして、丸で利口振つた十五六の少年位な頭腦しか有つてゐない。だから、是等は丸で野蠻人の藝術である。子供がまゝ事に天下を取り競をしてゐる所を書いた脚本である。世間見すの坊ちやんの浅薄愚劣なる世界觀を、さもく大人振つて表白した筋書である。こんなものを演ぜねばならぬ役者は噓かし迷惑な事だらうと思ふ。あの藝は、あれより数十倍利用の出来る藝である。

○油屋御こん杯も無暗に刀をすり更へたり、手紙を奪ひ合つたり、丸で眞面目な顔をして、いたづらをして見せると同じである。

○祐天なぞでも、あれ丈の思付があれば、もう少しハイカラに出来る譯だ。不動の御利益が疊からなんぢやない。神が出て佛が出て一向差支ないが、たかが如是我聞の一二句で、あれ程の人騒がせをやるのみならず、不動様迄騒がせるのは、開明の今日甚だ穩かならぬ事と思ふ。あれぢや不動様が安つぼくなる許りだ。不動をあらたかにしようと思つたら、もう少し深い事情を原因に置かなくつちや不可ない。其上祐天がちつとも愚鈍らしくない。いやに色氣があつて、さう

して黄色い聲を出す。のみならず無暗に泣いて愚痴ばかり並べてゐる。あの山を上る所杯は一起一仆悉く誇張と虚偽である。鬘の上から水杯を何杯浴びたつて、ちつとも同情は起らない。あれを眞面目に見てゐるのは、虚偽の因襲に囚はれた愚かな見物である。

○立ち廻りとか、だんまりとか號するものは、前後の筋に關係なき、獨立したる體操、もしくは滑稽踊として賞翫されてゐるらしい。筋の發展もしくは危機切通といふ點から見たら、如何にも常識を缺いた暢氣な行動である。若くは過長の運動である。其代り單なる體操若くは踊として見れば中々發達したものである。

○御俊傳兵衛は大層面白かつた。あれは他のものゝ様に馬鹿氣た點がない。藝術と、人情と、頭腦が、平均を保つてゐる。又渾然融合してゐる。幕の開いた時の感じもよかつた。幕の閉まる時の人物の位置態度も大變よかつた。さうして御俊も傳兵衛も綺麗であつた。只與次郎なるものが少々遣過ぎる。今一步うち場に控へればあんな脈味は出ない筈である。

○仕舞の踊は綺麗で愉快だつた。見てゐて人情も頭腦も入らない。たゞ藝術的に眼を喜ばせる單純なものであるから、そこが自分には頗る結構であつた。

○最後に一言するが、自分は午後の一時から、夜の十一時迄明治座の中で暮した。時間から云ふと大變なものである。是は日本の芝居が安過ぎるか、又は見物が慾張り過ぎる證據である。實を

云ふと自分はもつと早く済む方が便利であつた。たゞ、まだあるものを途中で出るのは勿體ないから、消極的に慾張つて仕舞迄ゐたのである。自分と同感の人も大分あるだらうと思ふ。然し見物が積極的に、此長時間に比例する程慾張るが故、役者も已を得ず働らくとすれば役者は甚だ氣の毒である。同盟してもつと見物賃を上げるが好い。牛肉でも葱でも外の諸式はもつとぐつと高くなりつゝある。

— 四二、五、一五『國民新聞』 —

虚子君へ

昨日は失敬。斯う続け様に芝居を見るのは私の生涯に於て未曾有の珍象ですが、私が、私に固有な因循極まる在來の軌道をぐれ出して、一寸でも陽氣な御交際ごうかいをするのは全く貴方の所爲ですよ。それにも飽き足らず、此上相撲へ連れて行つて、それから招魂社の能へ誘ふと云ふんだから、貴方は偉い。實際善人か悪人か分らない。

私は妙な性質で、寄席興行其他娛樂を目的とする場所へ行つて坐つてゐると、其間に一種荒涼な感じが起るんです。左右前後の綺羅が頭の中へ反映して、心理學に所謂反照聯想を起す爲かとも思ひますが、全くさうでもないらしいです。あんな場所で周囲の人の顔や様子を見てゐると、みんな浮いて見えます。男でも女でも左も得意です。其時ふと此顔と此様子から、自分の住む現在の社會が成立してゐるのだといふ考が何處からか出て來て急に不安になるのです。さうして早自分の穴へ歸りたくなるんです。

そのときは未だ好いが、次に屹度自分も人から見れば、矢つ張り浮いた顔をして、得意な調子

を振舞はしてゐるんだらうと気が付くのです。さうすると如何にも自分に對して面目なくなりま
す。其次には、自分の浮氣や得意は此場限りで、もう少しすると平生の我に歸るのだが、外の人
のは、是が常態であつて、家へ歸つても、職務に従事しても、あれで遣つてゐるんだと已惚れま
す。すると自分はどうしても此所に居るべきではないとなる。宅へ歸つて、一二時間黙坐して見
たいなんて気が起ります。

其の癖周囲の空氣には名状すべからざる派々な刺激があつて、一方からいふと前後を忘れ、自
我を没して、此派々な刺激を痛切に味ひたいのだから困ります。其意味からいふと、美々しい女
や華奢な男が、天地神明を忘れて、當面の春色に酔つて、優越な都會人種を以て任ずる様や、或
は天下をわがもの顔に得意に振舞ふのが羨ましいのです。さうかと云つて此人造世界に向つて猪
進する勇氣は無論ないです。年來の生活状態からして、私は始終山の手の竹藪の中へ招かれてゐ
る。のみならず、此竹藪や書物のなかに、丸で趣の違つた巢を食つて生きて來たのです。其方が
私の性に合ふ。それから直接に官能に訴へる人巧的な刺激を除くと、此巢の方が遙かに意義があ
る様に思はれるんだから、四邊の空氣に快よく耽溺する事が出来ないうで迷つちまいます。こんな
中腰の態度で、芝居を見物する原因は複雑の様ですが、其五割乃至七割は舞臺で演ずる劇そのも
のに歸着するのも知れません。あの劇がね、私の巢の中の世界とは丸で別物で、しかもあまり

上等でないからだらうと思ふんです。かう云ふと、役者や見物を一概に罵倒する様でわるいから、
一寸説明します。

此間帝國座の二宮君が來て、あなたの明治座の所感と云ふものを讀んだが、我々の神經は痲痺
してゐる所爲だか何だかあなたの口にする様な非難は到底持ち出す餘地がない、芝居になれたも
の、眼から見ると、筋なぞはどんなに無理だつて、妙だつて、丸で忘れて見てゐますと云ひまし
た。成程それが僕の素人である所かも知れないと答へた様なもの、私は二宮君に斯んな事を反
問しました。僕は芝居は分らないが小説は君よりも分つてゐる。其僕が小説を讀んで、第一に感
ずるのは大體の筋即ち構造である。筋なんかどうでも、局部に面白い所があれば構はないと云ふ
氣にはとても成れない。従つて僕が如何程芝居通になつた所で、全然君と同じ觀察點に立つて、
芝居を見得るかどうだか疑問であるが、其邊はどうだらう。——話是要領を得ずに濟んで仕舞つ
たが、私には矢ツ張り構造、譬へば波瀾、衝突から起る因果とか、此因果と、あの因果の關係と
か云ふものが第一番に眼につくんです。所がそれがあんまり善く出來てゐないぢやありませんか。
あるものは私の理性を愚弄する爲に作つたと思はれますね。太功記などは全くさうだ。あるもの
は平板のべつ、のつべらぼうでせう。楠なんとかいふのは、誰が見たつてのつべらぼうに違ない。
あるものに至つては、私の人情を傷けようと思つて故意に残酷に拵へさしたと思はれる位です。

きられ與三郎の——さう、尤も是は純然たる筋ぢやないが、まあ残酷な所がゆすりの原因になつてゐるでせう。

生涯の大勢は構はない其日々を面白く暮して行けば好いといふ人があるやうに、芝居も大體の構造なんか眼中に置く必要がない、局部局部を断片的に賞翫すれば可いといふ説——二宮君のやうな説ですが、まあ其の説に同意して見たらどんなものでせう。

夫でも賞翫は出来ませんが、それを賞翫するに、局部の内容を賞翫するのと、其内容を發現する爲に用ふる役者の藝を賞翫するのと、殆んど内容を離れた、内容の發現には比較的效能のない役者の藝を賞翫するのと三つある様ですね。

斯うなつても芝居の好きな人は、矢つ張り内容に重きを置いて居ない様ぢやありませんか。お富が海へ飛び込む所などは内容として、私には見るに堪へない。演り方が旨いとか下手いとか云ふ藝術上の鑑賞の餘地がない位厭です。中村不折が隣りにゐて、あるとき藝術上の批評を加へてゐたのを聞いて實に意外に思ひました。所が芝居の好きな人には私の厭だと思ふ所は一向應へない様に見えますがどうでせう。

光秀が妹から刀を受取つて一人で引込む所は、内容として不都合がない。だから藝術上の上手下手を云ふ餘地があつたのです。あすこは貴方がたも旨いと云つた。私も旨いと思ひます。たゞ

し、あすこの藝術は内容を發現する爲めの藝術でしよう。

第三の、内容とは比較的関係のない藝術になると、妙ですな。内容を賞翫して好いんだか、藝術を賞翫して好いんだか分かりません。十段目に、初菊が、あんまり聞えぬ光よし様とか何とかいふ所で品をしてゐると、私の隣の枱にゐた御婆さんが誠實に泣いてたには感心しました。あの位單純な内容で泣ける人が今の世にもあるかと思つたら難有かつた。我々もつとつと、擦れてるから始末が悪い。と云つてあすこが詰らないんぢやない。可なり面白かつた。けれども其面白味はあの初菊といふ女の胴や手が蛇の様に三味線につれて、ひな／＼するから面白かつたんで、人情の發現として泣く了簡は毛頭なかつたんです。此點に於て私と芝居通の諸君と一致してゐるかどうだか伺ひます。御婆さんに賛成なさるか、私に同意なさるかで事は極ります。忘れしました。局部内容發現の藝術で尤も旨かつたのは蝙蝠安ですな。あれは旨い。本當に出来る。ゆすりをした経験のある男が正業に就て役者になつたんでなければ、あゝは行くまいと思ひました。顔もごろつきさうな顔でせう。あれが髭を生やして狩衣を着て楠正成の家來になつてたから驚いた。

へ君子虚
次に内容と全く獨立した。と云ふより内容のない藝術がありますが、あれは私にも少々分る。鶯娘が無暗に踊つたり、それから吉原仲の町へ男性、中性、女性の三性が出て來て各、特色を發

揮する運動をやつたりするのは可いですね。運動術としては男性が一番旨いんださうですが、私
はあの女性が好きだ、好い恰好をしてゐるぢやありませんか。それに色彩が好い。

色彩は私には大變な影響を及ぼします。太功記の色彩などは甚だ不調和極まつて見えます。加
藤清正が金釦のシャツを着てゐましたが、可笑しかつたですよ。光秀のうちは長屋ですな。あ
中にあんな綺麗な着物を着た御嫁さんなんかゝゐるんだから、勿體ない。光秀は何故百姓見た様
に竹槍を製造するんですか。

木更津汐干の場の色彩はごちやく／＼して一見厭になりました。御成街道にペンキ屋の長い看板
があるから見て、御覽なさい。

楠一族の色彩は甚だよろしい。第一調和してゐる様です。正成の細君は品があつてよござんす、
あの子も好い。みんな好い色だ。

私の厭な所と、好な所を性質から區別して並べて御覽に入れました。是で私が芝居を見てゐる
時の順慶流の氣持が少し説明が出来た積りですが、まだこの外にも中々あります。それは他日御
面會の節に譲ります。不折は男性、女性、中性を見ずに歸りましたね。不折は奴的の畫が好き
なんだらうと思ひます。凡鳥君によろしく。以上。六月十二日

— 四二、六、一五一—六『國民新聞』 —

太陽雜誌募集名家投票に就て

太陽雜誌募集名家投票に就て

新聞や雑誌でよく藝人や美人の投票をやる事がある。是は餘程以前から行はれた様で、現に余
は小供の時、是等の投票の結果に支配せられて、當選者を實際夫丈の價値があるやうに思つて、
私かにえらいものだと思つてゐた時期もあつた位である。成長して見ると、多くの場合に於て此
投票なるものが、一種の運動から出来上つてゐるといふ事が分つた。是等の場合に於て、投票を
受けるもの、性質は、大抵人氣を大切にせる家業か、もしくは人氣を苦にする虚榮家である。だ
から營業上の必要もしくは心理上の満足の爲め、當選の名譽を擔ひたくなる。従つて色々な工面
をして當選されやうとする。然るに投票なるものは、勝負を決する尤も簡単な方法で、何等の内
容なき白紙の數で運命が決められるのであるからして、此際の票券は丁度紙幣の效用を帯びて來
る。さうすると被投票者は自己の眞實價で競争する必要がなくなつて來て、只表面上の數字で競
争さへすれば済む譯になるから、其競争は内容の優劣ではなくつて、金力の勝負に歸着して仕舞

ふ。誰も金を出して白紙を買ひたがるものはないけれども、投票の結果が、直接に自家の生活に影響を及ぼすか、或は本能的とも見られべき弱點に至大な關係を及ぼす以上は、——又其性質が金力に換算せられる事を許す以上は——彼等は已を得ず、或は喜んで買収の策を回らすのが當然である。従つて現今投票などを募集する新聞雑誌は其主意の何たるに係はらず、此口實のもとに財幣を吸収するものと一概に見做されて仕舞ふ。中には眞面目なのがあるに相違ないけれども、其手段が右の如き特長を有してゐるのだから、此手段即其主義を代表するものと認定されるのは已を得ない。しかも新聞雑誌が一種の營業である以上は、ある場合にはかゝる方針を取るのも（營業としては）正當である。

すると金で投票を買ふのも尤もな事で、金で投票を賣り付けるのも尤もである。實際問題として考へると、——生活問題虚榮問題もしくは營業問題として考へると、是程尤もな事はない。但し徳義問題から云へば、雙方共不尤である。雙方共に信用がないからである。他を馬鹿にしてゐるからである。詐欺を働らいてゐるからである。

そこで此投票の手段やら、此投票の結果やらを、どつちの問題として見るのが好からうと云ふ事になる。つまり見方は二つあるけれども實行する際には、どつちか片付けてかゝらなければ、動きが取れないんだから、此両面ある見方の一方に眼をつぶつて、一方丈で推して行くのは事實

の發展が證明してゐる。従つて事實として發展させる前に、どつちの心持で取り掛るべきだらうと云ふのである。かう云ふと道學者から叱られるかも知れないが、徳義と云ふものは一般の生活状態に安んずる幸福を與へるのが目的であるからして、生活其物が根本的に杜絶せらるる場合には到底顧慮する事は出来ないものである。日露戦争のとき雙方が徳義問題で戦争を始めたなら小銃一つすら放す事が六づかしい譯である。従つてある事件を徳義的に取り捌く爲には、しか取り捌く丈の餘裕がなければならぬ。生活状態がそれ程壓迫を受けて居らんと假定しなければならぬ。もし生活に相當のユトリがあるにも係はらず、どこ迄も實利問題で押し通したら、押し通す方が強つく張りである。若し明日の命も危ういといふ場合に、版行で押した様に徳義問題を逼つたら、逼まられたものは可哀相である。嘘を吐いても、詐欺をしても、徳義の眼は塞いでやるべきものである。

日本の現在の状態は、一般生活にユトリがないので、色々の問題を、徳義の方面から解釋しない人の多く出て来るのは御互に悲むべき現象であるが、是も前の様に考へて見ると、單に悲しむべき現象にとどまつて、あなたがち強つく張計りが寄り合つて國家を建設してゐると斷言する必要もないだらう。たゞ御互の運が悪くて、せち辛い世に生れたと諦めざるより仕方がない。

だから太陽雑誌の投票も、一般投票と見做され易いのは已を得ない。よし見做されても今日日

本の状態に於て、太陽雜誌たるものは毫も恥づる所はない譯である。當選の諸公も其通り。金力で萬、二萬の點數を得たと思はれても一向差支ないと思ふ。

たゞ「太陽」投票の一般と異なる所は、博文館の信用が比較的堅固なものと、當選される人が、未來の總理大臣とか、未來の外務大臣とか云ふ、金を使つて投票される程の必要のない資格者である事である。たゞ文藝家及び未來の大關君杯の投票に至ると、一般藝人の投票と紛れ易い。といふものは、我々文藝家は、取りも直さず、高等藝人である。一方から見れば人氣家業である。だから生活の必要上から云つても當選を利益とすべきである。のみならず、文藝家は皆虛榮心で活動してゐるもの計りである。(文藝家諸君のうちで、もし抗議を申し込まれる方があれば、申し込まれた方丈は取り除く) 其點から見ても當選は満足の至である。だから普通の原則に従つて、此部の投票には金力の競争が始まるべきが至當である。所が文藝家は申し合せた様に貧乏である。漱石が一萬圓で家を作ると聞いて驚ろく様な連中ばかりである。だから手の出し様がない。太陽を一萬部買ふには二三千圓の金が入る。そんな金があれば原稿を書かずに當分寝て暮らせる譯である。其上博文館の投票が全然自己の未來を支配するに足る程有力とも思へない。のみならず我々文藝家は普通の藝人より、より以上の教育を受けてゐる。此教育のうちには、前申した物を徳義問題として觀る眼を含んでゐる。是等の原因が合併して、文藝家は金力の競争は出来な

つた、又遣らなかつたらう。博文館の坪谷君が來て、此事丈を特に證明された所を見ると、少なくとも金力競争の痕迹はなかつたものと認めて差支ない。

さうすると、此投票の結果は公平なものでなくてはならぬと云ふ結論に到着するかも知れない。所が自分は平生から投票に就て一種の主義を抱いてゐる。五月初め「太陽」の寄贈を受けた時、自分は自分の考を認めてこれを「朝日新聞」に掲載した。文句は左の通りである。

二三日前太陽雜誌第五月號の寄贈を受けた。見ると、同志上にかねて募集しつゝあつた「名家投票」の結果が發表になつてゐる。さうして、そのうちの文藝家といふ名の下に、余の姓名が見えた。余は今日迄太陽雜誌の讀者でなかつた爲め、残念ながら此投票募集の主意を知ることが出来ないが、一般投票と云ふものに對しては常に善くないことだと云ふ考へを抱いてゐる。それで我朝日紙上を借りて、一應余の意見を述べる。

天下に投票の種類も多からうし、又其主意も澤山あらうが、如何なる場合でも、其結果は優劣の相場を定める事に歸着して仕舞ふ。然るに文明人は決して自己を以て、他よりも小なり若くは下等なりと肯ふ程に英雄崇拜の情性を帯びて居らぬものである。萬一他を以て己れの上に置くときは、必ず己れの自由意志によつて、相當の根據を、強ひられざるわが一隻眼に求める外はない。然るに投票なるものは、己れの相場を、勝手次第に、無遠慮に、毫も自

家意志の存在を認める事なしに他人が極めて仕舞ふ、多数の暴君が同盟したと同じ事である。是を公平と云ふのは、他を自分よりえらいと認めた場合か、然らずんばたゞ投票するものゝ言草で、投票されるものは、自分の主意の少しも貫徹しない點から見ても、尤も不公平な運動（ある場合には）と號して差支ない。議會の投票杯も公平だから遣ると思ふのは間違である。あゝしなければ決着が付かないから仕方なしに不公平な事を敢てしてゐるのである。従つて今日開明の世に於て、人々自意識を有して、己れを評價し得る自由を興へられつゝある以上は、成るべく此自由を奪はない様にするのが正當である。投票は多数の聲を借りて間接に此自由に壓迫を加へる手段になり易い。だから己を得ぬ場合の外は遣らん方が好からうと思ふ。余は少年の頃よく、西郷隆盛と楠正成とどつちが偉らからうの、ワシントンとナポレオンとどつちが優れてゐるだらうのと云ふ質問を發して、年寄を困らせた事がある。今考へて見ると優劣なんか到底分りやしない。文藝界に於ても其通りである。余は「太陽」の投票結果によると中村不折君より上に居る。其中村不折君は幸田延子さんより上に居る。さうして三人共皆門違である。此三人が寄つて御互の價値は斯う極つたさうですが、果してさうでせうかと相談したつて纏まる譯のものぢやない。幸ひに余は點數が多いから、是が公平だと主張するかも知れないが、中村君がどうして黙つてゐるものか。つまるところは、余の名譽は、幾分

か中村君の名譽を削つて來て、さうして自分の上に食付けた傾きがあるから、——しかも何等の理由もないのに削つて來たんだから、中村君は承知しない譯である。幸田さんも同じ事だらうと思ふ。

同じ當選者の内に島村抱月君がゐる。是は略同商賣だから優劣が付け安いと考へる人があつても知れない。それが大間違である。全體人に對して誰と誰とは何方がえらい杯と聞くのは必ず、其道に暗い素人である。素人は眞暗だから、何でも自分に覺え安い様に無理無體に物の地位關係を知りたがるの結果として、かゝる簡單極まるゝば口の返答を得て満足するのである。つまりは自分は到底知る權利のない問題に首を出して、知つたか振りをしたがるので、要するにどつちがえらいのかと活版で極めて貰はなくては不安心なのである。

同じ文藝でも多趣多様である。文藝上の作物も亦多趣多様である。團子を串で貫いた様に容易く上下順序が付けられる譯のものではない。苟くも筆を執つて文壇に衣食する以上は、余の如きものでも、相當の自信と抱負のあるのは勿論である。その自信あり抱負ある點に於ては敢て何人にも譲らぬ丈の覺悟は己惚にもせよ有してゐる。けれども、（西洋の大家は暫らく云はずとして）現代日本の諸作家たるもの、何れも同様同程度の覺悟はある筈である。のみならず余は實際是等の諸君の如何なる作物に接しても、到底余の及ぶ能はざる點を認め得な

い事は少い、して見ると我々は畢竟平地の上に散点すべき人間である。將棋の駒の様に積みかさねらるべきものでは無からう。人の肩の上に乗るのは無禮である。且危険である。人の足をわが肩の上に載せるのは難儀である。かつ腹が立つ。何方にしても等級階段をつけられて一直線に並ぶべき商賣とは思へない。相撲は別物である。あれは相手があつて勝負を付ければ立ち行かない家業だから仕方がない。文藝家の作品は單獨な作品として立派に通用する。もし比較する必要があれば其道の人が出て相互の複雑な特長を明かにすれば夫で済む。文藝の批評家は相撲の行司の様に勝負を名乗る必要は毫もない。

余は太陽雜誌の讀者ではないが、太陽雜誌及び記者に對して決して悪意を抱蔵するものではない。太陽雜誌及記者が四ヶ月の日子を費して、廣く私なき投票を募られたのみならず、十數名の當選者へ金盃贈與の計畫さへ立てられたのは種々の方面から見て賞讃に價する美舉とは認めるけれども、以上の理由で、遺憾ながら、余の平生の主義と反するから、折角の光榮を擔ひながら、その紀念とも見るべき贈品を受ける事が出来ないのを残念に思ふのである。余は、余若くは余の作品に對する同情の紀念として、今日迄贈與の物品を受た事は屢ある。是等の人は皆當初より余一人を眼中に置いて眞直に余を目がけたのである。従つて彼等贈與の品は甲より乙を優れりとし、若くは丙を丁の上に置く御褒美の意味を毫も含まざる好意の發

現であつた。又衰已貶他の痕迹なくして、只余が好きである。余の作物が好きであるからして呉たもの許りである。だからして余は快よく貰ふ事が出来たのである。

太陽雜誌の寄贈を受た後、余は此意見を發表する事の、或は穩當ならざるかを疑つた。又同雜誌に對して禮を缺きはせぬかとも懸念した。けれども是は余の眞直な考へである。さうして其眞直な考へを公にするのが此際一般の爲にも自分の爲にも善いと信じた。夫で思ひ切つて、これを朝日の紙上に載せる事にした、萬一此數言が太陽雜誌の所信及び所期に反するのみならず、同雜誌の折角な計畫に寸毫の煩ひを及ぼすならば余は謹んで同雜誌に對して謝罪する覺悟である。

自分の所論新紙掲載の翌日、坪谷さんが雨を冒して來訪されて、あなたの考は昨日新聞で見たが、此方の計畫もある事だから、金盃丈は受けたらどうだらう。もし人が何とか聞いたら坪谷が來て無理に押し付けて行つたと答へれば差支なからうとの親切な勧誘であつた。其時自分は坪谷さんに自分の突飛な行動を散々詫びて、「金盃丈は不可ませんよ。あんな事を書いて、投票には反對だが、金盃の方はもらふと云ふ事になると、私の主意が立たないから」と御氣の毒だつたけれども、とう／＼謝絶した。それでも坪谷さんが首を傾げてゐられるので、「どうでせう。夏目漱石といふ變人がゐて、たつた獨り頑固を云つて、金盃を貰はなかつたといふ紀念に、私の分丈を博

文館へ保存して置いて下すつたら」といふ様な妙な説迄持ち出したが、坪谷さんは矢つ張り納得されない。自分一人が金盃を受けない爲めに、折角の計畫に狂ひが出来る事だから、自分は坪谷さんに對して、甚だ濟まない氣がした。がもと／＼自分の主義から出た事が、「太陽」に對しても、坪谷さんに對しても、其他の同誌記者諸君に對しても、別段惡感情を抱いてゐる譯でも何でもないのだから、では、いつそ大びらに投票反對の意見を、「太陽」の次號に載せて、當選者に關する議論、傳記、等の中へ加へたら宜からうと云ふ事に相談が極つた。此篇はさういふ因縁で金盃を貰はない罰として書いたのである。寫眞も其時坪谷さんに約束をしたものである。

——四二、六、一五『太陽』——

「額の男」を讀む

「それから」を脱稿したから取あへず前約を履行しやうと思つて「額の男」を讀んだ。讀んで仕舞つて愈批評をかく段になると忽ち胃に打撃を受けた。さうして二三日の間は殆ど人と口を利く元氣もない程の苦痛に囚へられた。漸く床の上起き直つて、小机を蒲團の傍まで引張つて來て胃の膨滿を抑へながら、原稿紙に向かつた時は、もう世の中が秋の色を帯びてゐた。時機を失して著者に對しては甚だ濟まないと思つたが、書かないよりは増しだらうと己惚れて所感を記す事にした。

「額の男」の著者が普通の小説家を以て任ずる人でない事は云ふまでもない。従つて尋常の小説を書く積りで、「額の男」を書いたのでない事文は誰の目にも明かである。こゝ迄は此の書を一寸二三頁でも引剝がしたものはすぐ氣がつく。けれども其れ以上の問題になると中々分らない、「額の男」を通讀して其の批評を書くつもり之余にも述作上にはあらはれたる如是閑とは如何なる

人で、如何なる意味で此の書を著はして、又何が故にかゝる調子の變つたものを公にして、又何が故に斯う云ふ變り方を選んだものであるか甚だ不明瞭である。それ所ではない。此書の普通の小説と變つてゐる所はどこが特色だらうと思つて、一寸人に説明したくても容易に判然たる即答が浮んで來ない位である。

して見ると、此の書が普通の小説と、どういふ風に違つてゐるといふ箇所を擧げる丈でも既に一角の批評である。決して無益な事とは思はれない。それを極粗末ながら一言で述べて見たい。普通の小説に於て興味の中心となるものは篇中人物の關係甲が如何にして乙に移り行くかを讀者に指示する所にある。此の關係甲が移らんとして移り得ぬ場合や、又は乙に行くべくして却て丙に行く場合や、又は甲から動いて再び甲に戻る場合は皆此の「脱字」甲が乙に移るには昔風の運命といふものが手傳ふかも知れない、又今の人が唱へる神祕的な要素が働くかも知れない、或は偶然な外界の事情に制せられるかも知れない、若しくは篇中人物の主義の有無、教育の高低、地位の上下と其の意志の強弱とによつて制せられるかも知れない。

此れ等の要素が入り亂れて、人物がどう動くかといふ有様を、篤と納得させる様に書き卸して行く所に、讀者の興味が集中して來るのである。

して見ると普通の小説では、移ると云ふ事が主眼になる。如何に旨く移る、如何に自然に移る、如何に讀者を啓發する様に移る、如何に讀者を驚かす様に移る、如何に讀者の頭を屈伏させる様に必然に移る、——是等が此の興味を圍繞する諸條件である。

所が「額の男」を見ると此の移るといふ事が殆どない。篇中人物の關係は始めから終り迄略同様である。よし多少の變化があつても、書中に書いてある諸條件から因果律で推し轉がされて移つたものではない。頁以外から抛げ込まれた外發的の因數で移つて居る。だから「額の男」の興味は、普通の小説のその如く、篇中人物の關係甲が乙に移る所に存すとは云はれない。

では「額の男」の興味は何處にあるか、余の見るところでは、全く篇中人物の意見其のものゝ興味である。篇中人物の意見と云ふ意味は、まあ斯うである。——普通の小説の中で第一流の作と稱せられるものゝうちでも篇中人物の抱いてゐる意見丈拾つて讀むと極めて詰らないものがある。それはその筈で、随分下等社會の勞働者や、山の中の無教育ものが雄篇大作の主人公にならんとは限らぬからである。必竟は以上述べた理由で、普通の小説の面白味は篇中人物の意見で左迄に支配されないからそんな事は第二義第三義に落ちて仕舞ふのである。だから若し昔風の婆さんや姐さん、もしくは裏店の神さん、もしくは黒人上りの女房杯を捕へるとすると、其の會話の内容は自然貧弱でなければならぬ。唯其の貧弱な會話が、前後相俟つて始めて人間として有意義な一種の響を傳へるからそれで凡てが償はれるのである。

もし其の断片的の意見（會話にあらはれたる）を拾つて其の價値を穿鑿したら實に馬鹿氣たものになつて仕舞ふ。

所が「額の男」に出て来る會話——しかも此會話は常に人物の意見を代表する以外に何事をも進行させてゐないが此の會話は會話としてそれ丈に色彩がある。無論意見としての色彩だから他の色彩と混同してはならんが、あんなに社會上、人事上、學問上に於て意見を持つた人が寄り合つて、さうして始めから仕舞迄意見の交換を遣つて居る小説はあるまい。さうして其意見が悉く奇抜なひねくれたもの許りである。眼新しい耳新しいもの許りである。「額の男」の興味は全く此連續した一調子變つた意見から出る刺激だと云はなければならぬ。

余は此の連續不斷の意見を逐一に讀みながら、深く如是閑君の才氣の煥發縱横なるに感服した一人である。他の作家をして片言隻句すら容易に纏めしむる餘裕を與へぬ先に如是閑君は滔々として常人の思も寄らぬ事を、五頁でも六頁でも繋げて行く、實に驚くべき才力である。

然し一言如是閑君に忠告したい。あの意見は、世の中を傍觀する、頭腦的な遊藝に似た所がある。キツトは無論あり餘る程あるが、惜いかな真正の意味に於ての眞理、摯實なる觀察としての概括とはどうも受けとり悪い。

いくら社會上人事上重大な問題に涉つても、派出で華奢な感が先へ立つてならない。無論さう

云ふ場所も場面も必要には相違なからうが「額の男」はあまりに其の色彩で蹂躪されて居る。

だから讀者の方では、難有い教訓を得て啓發されたと思ふよりも、やあ又面白く地口たな才子だなと感ずる。又警句を吐いて人を驚かさうとして居るものと考へる。

尤も此警句の中には決して安つばいもの許はない。且君の學問の範圍、知識の領域に至つては我々老生をして眞に感服せしむる丈の素養は十分認められるが如何にせん一面から話すと以上の弊を帯びてゐる様な氣がするから已むを得ない。

もう一つ申したいのは、——普通の小説でも篇中の人物が中々意見家である場合がある。其の意見家の場合が單に意見として興味を惹く場合は如是閑君の場合と同一であるが、其の時は此の意見なるものは單に裝飾的道具に使用されてゐる。だから小説の本義とは殆ど没交渉である。最前述べた、小説の興味を中心に影響してくる様な意見になると、單なる意見では濟まなくなる。其の人物の意見が篇中人物の關係を動かして來なくてはならなくなる。言葉を換へていふと、意見が人物の頭の奥へ飛び込んで其處で、一仕事してかさなければ效目がなくなつてくる。斯うなつた時に、平面で敘述された意見が漸く立方體に變化して奥行のある様な心持があるのである。余は如是閑君の篇中の人物の取りぐに面白い意見を面白いと思つたから讀んだにも拘らず其意見は遂に仕舞迄平面でのべつに平たい感じがした。それは全く此の原因だらうと思ふ。然し既

に普通の小説でない、と断りながら、普通の小説の資格を以て再び「額の男」に向ふのは我ながら矛盾である。たゞ是は如是閑君の御参考に申す迄である。

以上は「額の男」を読んだ時の感じを後から考へて理窟を附したものである。斯う明らさまに理窟を附けて見ると、如是閑君に濟まない様な失禮な箇條も出て來たが仕方がない。我々批評家は好い加減な事を云つて作家に媚びるよりも、自分の思ひ通りを、作家の前に披瀝して、潔く罪を作家に得た方が自分に對しても作家に對しても義務ある所爲と考へる。

夫れから余も批評もやるが創作もやる。此の「額の男」の批評中で移して余自身の小説の上に持つて來て非難しても構はないものもあるかも知れない。如是閑君も其の邊は御容赦あつて、一體御前の小説は何うだ抔と遣り込められざらん事を希望する。

——四二、九、五『大阪朝日新聞』——

「夢の如し」を讀む

四方太君の「夢の如し」はホト、ギスに出た時分に一應は通讀して面白いと思つた。殊に其初の方を面白いと思つたが、其後纏めて一卷の書物にするといふ話を聞いて、書物にして通讀したら其興味が或は削減せられはしまいかと、餘所ながら心配した。是は何故といふ説明よりも、寧ろ其企てを聞いた時、はたと感じた事なのだから、其通りを今正直に白狀するのである。それも只の白狀なら四方太君に取つて却て迷惑かも知れないが、此白狀の裏には、想像の掛念が實際の鑑賞の爲に見事に打ち消されたといふ、朋友としては愉快な事實を含んでゐるのだから、殊更に夫を公けにするのである。

實は「夢の如し」が本になつて出たら、批評をしようと云ふ約束であつた。處が約束で本がまだ出來上らない先に旅行をして仕舞つた。比較的長い旅行であつたので、「夢の如し」の評も時機が後れたらうから、どんなものかと思つて歸つて來た。すると留守中に溜つた西洋の雑誌やら

書物やら、手紙やらが氣を腐らす程積もつてゐて、何時是等に對する義務を果す事が出来るだらうと、竊かに自分の課程を自分から狂はした無頓着を後悔し始めた。小冊子「夢の如し」は實に此書冊堆積の間に潜んでゐて、人の注意を受ける迄は、余自身にも何處にあるか氣が付かなかつたのである。

余は此非廣告的な冊子を二三日前漸く手にするの閑を得た。さうして、近來にない一種の趣を把持しつゝ、長い夜を燈火に親しみ盡す事を得た。心意雜亂の際はからずも「夢の如し」に逢着して、此境地に住する事を得たのは余の深く四方太君に感謝する所である。

「夢の如し」の好い所を一言にして云ふのは少々六づかしいが、強ひて云へと云はれれば、故意とらしい所が丸でないと答へたい。普通の文學者の回想録とか追憶記といふものは、みんな、己は文學者だぞといふ覺悟で書きに掛る。即ち普通の人間ぢやない、文學者と申す普通の人間以上の種類に屬するものであるといふ自覺で筆を執つてゐる。さうして其自覺がいやに真ごとに付け廻る。何處を讀んでもどうだ文學者らしからうと云ふ顔が出て来る。其顔が御白粉をつけたり、隈をとつたり、甚だ氣障である。従つて泣かないでも好い所に涙を零す。性慾問題を引張り出さないでも關はないのに、何だとか蚊んだとか流行の文字を使ひたがる。そんなに景色に憧憬しない方が結構だのに一人で憧憬したがつてゐる。甚だしきに至るとツルゲネーフと云ふ字を使はな

ければ文章にならないと思つてゐる。或は技巧を避ける爲と力んでゐる。さうして西洋人から衣服を借りて來て、是が本來の面目だと云つてゐる。人のものを借りて來て自分のものらしくするのは、是亦悉く技巧の力であると云ふ事には全く氣が付かない。

我は普通の人間以上の文學者であると自覺して書いたものは、甚だ厭味なものである。(此自覺を離れて、實際普通以外の人が普通以外の事を書くのは仕方がない)。四方太君の「夢の如し」は毫も此厭味を帯びてゐない。たゞ昔しの幼少の時の事が其通り、街はず、慢らず、ぶらず、がらす、平々淡淡々と書いてある。だから其空氣が如何にも質實で、單純で、可憐で結構である。其點に於ては、恐らく四方太君の人間以上に枯れたものだらう。

「夢の如し」の中にある事實其物は、余の如く東京に生れたものには非常に興味がある。又四方太君に類似の境遇を経過したものにも、愉快なる過去の思ひ出であらう。是等の材料の趣味ある事に就て、もう少し論じたいがあまり長くなるから、これで止めにする。只「夢の如し」とはよく付けた題であると申して置きたい。

余は嘗て四方太君の文字を評して白紙文學だと罵倒した事がある。今では此罵倒を逆まにして賞讃の辭として「夢の如し」の一篇に呈したい。余の如き色氣の多いものは、ことに白紙文學の價値を認めなければならぬ。四方太君は「長靴」といふ短篇と、それから其續篇を書いた。其

續篇を朝鮮の汽車の中で讀んで大いに失望した。其失望の反動として「夢の如し」が猶更旨い様に思はれる。

— 四二・一一・九『國民新聞』 —

日英博覽會の美術品

上野に行つて日英博覽會に出る美術品を見たが、其點數の少ない事は驚く程であつた。あの位の物を大きな建物のうちにちよんぼり陳べて、是が東洋美術を代表したものだと思ふ事は到底出来ない。事務官の話では、此外に六十點程大阪方面からの出品が加はつた上に、文部省の買上用品を六點丈打込で、始めて送り出すのださうであるが、よし夫丈増した所で總體の量に於て大した變化のある様にも思へない。當日陳列室を無雜作に通り越して、何だかあつかなかつたと感じたものは、恐らく自分一人ではあるまい。陳列室は僅に二つしかなかつた。さうして其一つは個人の客間程に狭いものであつた。

自分は斯な事に不案内な人間だから、實際の事情は能く知らないが、たゞ此陳列室を通り抜けた丈では、今回の博覽會が美術の方面に重きを置いて計畫されてゐなかつた様にも思はれる。それが或は真相かも知れない。然しいくら大袈裟に美術の出品を奨励したつて、矢張り物足りない

様な顔をして陳列室を出るのが、我々の運命ぢや無からうかと考へ付いたら、大分元氣が沮喪した。成程獎勵やら勸誘やらの結果一昨日自分の見た十倍もしくは百倍の美術品を海外の博覽會に送り出す方針は、時日さへあれば容易に立て得られるだらう。けれども其十倍なり百倍なりの陳列品が並んだ所を眼中に想像して見ると、徒らに參觀の際根氣を疲らす丈で、存外變化に乏しい重複を示されるのが、我邦美術界の今日らしい。

本當の事を云ふと、一昨日見た丈で、今日の日本に産出し得る美術品の九割以上はすつかり網羅してゐるのである。しかも各部門にわたつての代表的出品は、多少の例外はあるにしても、まあ精華を萃めたものと云つても宜しい。それが何故あんなに物足りなかつたと云ふと、全く美術の性質に因ると云ふの外はない。

日本の美術は殆んど、手に取つて撫摩すべきものであつて、一定の距離に立つて鑑賞すべきものでない。吾々の着物が既にさうである。四疊半の座敷で差向ひの相手に賞めらるべく三越を煩はすの外殆んど何の取柄もないと云つて宜しい。日光の廟舎が既にさうである。局部々々を吟味すると御念の入つた精巧を盡してゐる。然しあれ丈の殿堂を望むに適當な距離に遠退いて見ると、折角の局部の苦心は犬死をして仕舞ふ。一昨日陳列された美術品の多くは、吳服物や日光の御宮と同じく、好んで椽の下で力持をしてゐる。狩野芳崖の観音様を一生懸命に刺繍にしたつて、觀

音様を見やうとすれば刺繍の手際は眼に入らない位離れなくつちやならない。無縁七寶で鮮やかに鴨の色を染め出したつて、額にして下から見ると以上は、絹に畫いたものと何處が違つてゐる。大きな銀瓶に寒山拾得を彫り付けた手際の冴えてゐるのは、たゞ筆力を一層困難な刀力に移したといふ迄で、それ以外に何等の特色のないのみか、花瓶の見頃な所に立ち留つてゐれば、寒山も拾得もてんで顔さへ明瞭には分らない。

全部と局部と比例を失した勞力の損はまづ何うでも構はないとして、大抵の出品は皆手先の器用からのみ出来上つてゐる。勿論それが日本人の長所だから結構には相違ないが、あまり器用過ぎるから、針の先で指が出来てゐるかの如き細かな仕事ばかり爲終せてゐる。従つて精緻では有らうけれども、あの西洋の大きな客間の隅へでも置かうものなら、蟲眼鏡を掛けてゐない以上、誰も氣が付かずに済んで仕舞ふ。今の世に用もない鍔を拵へて、それに小さい不動様なんか喰つ付けてゐる。丸で玩具である。西洋人が鍔を珍重するのは昔の遺物として、其當時相應の理由があつて出来上つたものうちに、一種の手際は認めて、喜ぶのである。巻貫入だつてさうである。僅か五六寸四方のうちに、あんな七面倒な惡戯をして幾日も潰すには當るまい。

要するに頭に一種の精神があつて、其精神が手を働かすのでなくつて、手の筋肉の使用法を織細に吞込んだのが日本の美術家である。彼等は頭を使ふぢやない、指の方が修練の結果器械

的にうまく動いてくれるのである。如何にも器用だとは思ふ。然し向ふの頭が此方の頭に感應する事は少い。だから手に取て能くほちくつて見ても物足りないのである。まして適当な距離から大きく観察するに於てをやである。況や英吉利へ持つて行つて廣大な建物の隅にちよんぼり並べらるゝに於てをやである。

自分は日本の美術に就いて専門家の口にする様な巧拙は分らない。自分の云ふ所は、技藝の巧拙如何に拘はらず存在する、日本美術に殆んど固有とも云ふべき特色に關してである。勿論自分の非難に相當しない物品はいくらでも出て來るだらう。現に陳列品のうちにも随分あつた。自分は敢て是等の佳作に對して敬意を表するに躊躇するものではない。

—四二、一三、一六—

東洋美術圖譜

偉大なる過去を背景に持つてゐる國民は勢ひのある親分を控へた個人と同じ事で、何かに付けて心丈夫である。あるときは此自覺の爲に驕慢の念を起して、當面の務を怠つたり未來の計を忘れて、落ち付いてゐる割に意氣地が無くなる恐れはあるが、成上りものゝ一生懸命に奮闘する時の様に、齷齪とこせつく必要なく鷹揚自若と衆人環視の裡に立つて世に處する事の出来るのは全く祖先が骨を折つて置いてくれた結果と云はなければならぬ。

余は日本人として、神武天皇以來の日本人が、如何なる事業をわが歴史上に發展せるかの大問題を、過去に控へて生息するものである。固より余一人の仕事は、余一人の仕事に違ひないのだから、余一人の意志で成就もし破壊もする積ではあるが、余の過去、——もつと大きく云へば、わが祖先が余の生れぬ前に残して行つて呉れた過去が、余の仕事の幾分かを既に余の生れた時に限定して仕舞つた様な心持がする。自分は自分の爲る事に就て飽迄も責任を負ふ料簡ではあるが、

西洋の物數奇がしきりに日本の美術を云々する。然し是は千人のうちの一で、飽迄も物數奇の説だと心得て聞かなければならない。大體の上から云ふと、さう云ふ物數奇も矢張り西洋の方が日本より偉いと思つてゐるのだらう。余も残念ながら左様考へる。もし日本に文學なり美術なりが出来ると思つてゐるのだらう。が、過去に於て日本人が既に是丈の仕事をして置いてくれたといふ自覺は、未來の發展に少からぬ感化を興へるに違ひない。だから余は喜んで東洋美術圖譜

自分をして此責任を負はしむるものは自己以外には遠い背景が控へてゐるからだらうと思ふ。

さう考へながら、新しい眼で日本の過去を振り返つて見ると、少し心細い様な所がある。一國の歴史は人間の歴史で、人間の歴史はあらゆる能力の活動を含んでゐるのだから政治に軍事に宗教に經濟に各方面にわたつて一望したら何う云ふ頼母しい回顧が出来ないとも限るまいが、とくに余に密接の關係ある部門、即ち文學史で云ふと、殆んど過去から得るインスピレーションの乏しきに苦しむと云ふ有様である。人は源氏物語や近松や西鶴を擧げて吾等の過去を飾るに足る天才の發揮と見認めるかも知れないが、余には到底そんな已惚は起せない。

余が現在の頭を支配し余が將來の仕事に影響するものは残念ながら、わが祖先のもたらした過去でなくつて、却て異人種の海の方から持つて来てくれた思想である。一日余は余の書齋に坐つて、四方に竝べてある書棚を見渡して、其中に詰まつてゐる金文字の名前が悉く西洋語であるのに氣が付いて驚いた事がある。今迄は此五彩の眩ゆるうちに身を置いて、少しは得意であつたが、氣が付いて見ると、是等は皆異國産の思想を青く綴ちたり赤く綴ちたりしたものの、みである。單に所有と云ふ點から云へば聊か富といふ念も起るが、それは親の遺産を受け繼いだ富ではなくつて、他人の家へ養子に行つて、知らぬものから得た財産である。自分に利用するのは養子の權利かも知れないが、こんなものの御蔭を蒙るのは一人前の男としては氣が利かな過ぎると思ふと、

有り餘る本を四方に積みながら非常に意氣地のない心持がした。

東洋美術圖譜は余にかう云ふ料簡の起つた當時に出版されたものである。是は友人瀧君が京都大學で本邦美術史の講演を依託された際、聴衆に説明の必要があつて、建築、彫刻、繪畫の三門にわたつて、古來から保存された實物を寫眞にしたものであるから、一枚々々に觀て行くと、此方面に於て、わが日本人が如何なる過去を吾々の爲に拵へて置いて呉れたかと善く分る。余の如き財力の乏しいものには參考として甚だ重寶な出版である。文學に於て悲觀した余は此圖譜を得たために多少心細い氣分を取り直した。圖譜中にある建築彫刻繪畫ともに、あるものは公平に評したら下らないだらうと思ふ。あるものは源氏物語や近松や西鶴以下かも知れない。然し其優れたものになると決して文學程度のものとは云へない。われ／＼日本の祖先がわれ／＼の背景として作つて呉れたと云つて恥づかしくないものが大分ある。

西洋の物數奇がしきりに日本の美術を云々する。然し是は千人のうちの一で、飽迄も物數奇の説だと心得て聞かなければならない。大體の上から云ふと、さう云ふ物數奇も矢張り西洋の方が日本より偉いと思つてゐるのだらう。余も残念ながら左様考へる。もし日本に文學なり美術なりが出来ると思つてゐるのだらう。が、過去に於て日本人が既に是丈の仕事をして置いてくれたといふ自覺は、未來の發展に少からぬ感化を興へるに違ひない。だから余は喜んで東洋美術圖譜

を讀者に紹介する。このうちから東洋にのみあつて、西洋の美術には見出し得べからざる特長を
觀得する事が出来るならば、たとひ其特長が全體にわたらざる一種の風致にせよ、觀得し得た丈
それだけ其人の過去を偉大ならしむる譯である。従つて其人の將來を其丈インスパイヤーする譯
である。

— 四三、一、五 —

客觀描寫と印象描寫

是は近頃の小説家のよく用ひたがる言葉であるから無論小説の描寫即ち書き方に關した術語に
違ないが、無暗に用ひる割合に使用方が頗る茫漠としてゐるので、了解に苦しまされるものが大
分多い。中には客觀描寫と印象描寫を兩刀の如く心得て同時に振り廻す事が出来る様に説いてゐ
るものも有る様だが、是は恰も金貨本位と銀貨本位を同時に採用すると一般で、甚だしき亂暴で
ある。わが文藝欄の讀者の多數はとうから氣が付いてゐるだらうとは思ふが、世間には批評家の
好い加減な出鱈目術語に迷はされて困るものも少くなさうだから一寸辯じたい。

元來純客觀な描寫と稱するものは嚴密に云ふと小説の上で行はれべき筈のものでないが、それ
は兎に角俗に客觀的な事柄と云ふのは、我々の頭の中に映る現象のうちで、甲にも乙にも丙にも
共通の點丈を引き抽いて、便宜名づけた約束に過ぎない。云ひ直すと、主觀のうち一般に共通
な部分が即ち客觀なのである。自分の頭の中に花が赤く映る事實は勿論主觀である、(自分の頭の

中に起る現象で他人の頭の中に起る現象でないから、けれども此赤と云ふ事實に就て、十人が十人、百人が百人悉く一致した時には、甲なる自分と乙なる他人を離れて、赤い花が獨立して存在するものと見做す事が出来る。即ち漱石の頭に映る花は赤いと斷る必要がなくなつて、唯花が赤いと云へば済むから、それを客觀の價値が生じたと稱するのである。所が印象描寫々々々と頻りに振廻されてゐる印象と云ふ字は、全く反對の性質を帯びたものである。印象とあるからには必ず誰の印象と附加しなくては意味が完全しない言葉である。もと印象と云ふ語はイムプレッションの譯であつて、印象と二字並べて使ふ以上は、何人も此裏面に原語のイムプレッションを繰返さないものはない位に明瞭な譯字である。試みに西洋人の此字を使ふ場合を調べて見るが好い。必ず私のイムプレッションとか、あの人のイムプレッションとか、ある格段な人の特別に所有した印象と斷つてない事はない。(ない場合は印象と他の同種類の言葉、例へば感覺とか情操とかに對立させた時に限る。丁度だれの父と云はねば父と云ふ言葉の意味は完全しないけれども子に對したり伯父に對したりして用ひる時は單に父と云ひ放しにする様なものである。)

既に甲の印象と斷らなくつても通用しない字ならば、甲の印象であつて、必ずしも乙の印象ぢやないと限定したと同然である。従つて印象的事實と云ふものは十人が十人、百人が百人に共通であるとは限らない。否十人十色と云ふ位に違ふべき筋のものである。自分の頭に映る花が赤

いと迄は誰も一致するが、此赤い花から受ける心持はめい／＼違つてゐるかも知れないからである。

だから客觀描寫の徳は一般に通ずる點にあつて、印象描寫の趣は作家の特有な點に存するのである。無論一篇の小説を作るうちに兩描寫を兼用する事は出来るが、主張として是を併立させる事は性質上不可能である。一行の描寫を見て、是が客觀的描寫で且印象的描寫だ杯と云ふのは恰も是が君主獨裁で同時に民衆同決だと騒ぐ様なもので、頭のある人の口にするを憚るべき云ひ分である。

其上嚴密に論じると、前にも言つた通り、純客觀の敘述なるものは科學以外には殆んどあり得べからざる事である。もし客觀的描寫を主張して極端迄行くとすると、彼は頭を下げたとは云へるが、彼は感謝したとは書けない譯になる。感謝の積りで頭を下げたのだから、人を茶化する積りで頭を下げたかは、向ふの心理状態をこちらで好い加減に想像したに過ぎないからである。だれが見ても頭を下げさへすれば感謝の精神が現れたんだと斷定する程、吾人は此客觀的現象の裏面に固定した心理状態を附着してゐない。それはドンが鳴つても必ずしも午飯だと極めない様なものである。是と同じく只笑つたとは書けるが苦笑したとか冷笑したとかは決して書いてならん事になる。苦笑とか冷笑とか云ふや否や吾人は先方の心理を揣摩する事になつて半ば客觀的現象を

離れるからである。

小説の批評や議論が盛になるのは文藝界に住する一人として余の尤も喜ぶ所である。けれども自分の使用する用語の意味をもよく考へずに、無暗に頭の確でない青年を吹きに掛るのは、はたから見ても青年に氣の毒である。一般の讀者には餘り狭過ぎる題目とは思つたが、以上の理由で數言を費した。

—四三、二、一—

草平氏の論文に就て

草平氏の論文に就て

三月九日の本欄に出した草平氏の自然主義者の用意と云ふ論文の中に、余の「創作家の態度」と云ふ論文を引いて、「頗る明快で異論を挟む餘地のないもの」と斷ぜられたのは、感謝の至りであるが、其次に「凡て主義又は説と云ふものは、それが科學の基礎の上に置かれてゐる間は大抵異論がない」と概論せられる所が一寸分り悪かつた。事實問題として考へても科學的に基礎を有してゐると目せられてゐる主義や説が始終論争の點になる事はいくらでもある。かのダーキニズムだつて、異論を挟む餘地がなかつたら今日の様に發展する譯がない。然し是はまだ可いが、其次の所へ行つて、草平氏は主義も説も「哲學の上へ移されてこそ、始めて議論を生ずるものである」と附加されたのは余に取つて愈難解である。一體草平氏は科學と哲學をどう區別してゐるのか、余は此一句を讀みながら切に承はりたくなつた。範圍の差か、取扱法の差か、もつと根本的なあるものゝ差か、如何なる新因數が加はつて、科學的に異議なしと認らるゝものゝ、急に哲

學の上に移されると異議が生ずるのであるか。

その哲學の上迄持つて行かない所が、余の持論だと草平氏はわざ／＼斷つて居らるゝが、既に草平氏の科學哲學の區別が判然しない以上、余自身は氏の説を肯定する譯にも、否定する譯にも行きかねる。従つて哲學の方面へ入らないのは余の持説でも何でもなくなる。

余は余の人格を支配する意見、もしくは余の人格全體を支配するに至らざる程の意見を、(單なる意見として)發表する爲に、理智を重する余の精神に適ふ様な表現法を用ひて、世に問ふ考へはあるが、それが科學的と哲學的なるを論ずるの暇は今日迄未だ嘗て有しなかつた。又其意見に理情両面のいづれかに涉つて、陥缺ありとすれば、余の意見そのものゝ空疎なるか、放漫なるかに基因するものと信じて、これを科學哲學の區別から生ずるとは未だ嘗て思ひ至らなかつた。

然しもし哲學と云ふ字をメタフィジツクの意味に解釋して、カント其他の唱道した一派の學問を指すならば、草平氏の所謂そこ迄行かぬのが漱石の持説であると云ふ文句は、當に妥當である。余は余に關し、社會に關し、人間に關して、未だ嘗て彼等一派の純正哲學者の云々する絶對とか、無限とかいふ意義を使用する必要を認めない。況や自然主義を論ずるに於てをやである。草平氏の胸に響くと感服せられる安倍能成氏の自然主義論と雖も、そんなメタフィジカルな點は少しも認められない様である。して見ると草平氏の胸に響くといふ哲學的な議論とは如何なる意

味に於て哲學的なるか愈承知したくなる。氏の所謂哲學とは、或は哲學にあらずして宗教(宗教學にあらず)に近いものではないか。

余は余の境遇上職業上比較的世間の人の眼に留まる様にしば／＼筆を執つてゐる。従つて余の意見、主張、其他に關して誤解を招く事は何遍でもある。然しさう一々辯解する程の必要も認めないから、大抵はそれなりにしてある。然し朝日文藝欄は余の擔任だから、其紙上で草平氏が、余の持説は斯うであるの、何のと論ぜられると、氏と余の關係上、余は余の擔任する欄内に於て、余に關する誤解を默認したと一般になつて、後日意見を發表する時の邪魔になるから此際一言して置きたいと思ふのである。

余は文藝欄の擔任記者として、欄内に掲載する文字には大抵眼を通してゐるが、草平氏の原稿が後れた爲通讀の機會を得ずして、すぐ直接に編輯へ廻されたため、つい斯云ふ事を公けにいふ様になつた。それでなければ以上の諸項に就て一々氏と押問答をして裏面で埒を明ける筈であつた。

長塚節氏の小説「土」

258

一方に斯んな考へがあつた。――

好い所を世間から認められた諸作家の特色を胸に藏して、其標準で新しい作物に向ふと、まだ其作物を讀まないうちに、早く既に型に墮在してゐる。従つてわが評論は誠實でも、わが態度は獨立でも、又わが言説の内容は妥當でも、始めから此方に定まつた尺度を持つてゐて、其尺度で測つてならないもの迄も律したがる弊が出る。其結果は働きのない死んだ批評に陥つて仕舞ふ事がよくある。

夫よりか、今日迄文壇に認められなかつた、若くは顧みられなかつた、新しい特殊な趣味を、ある作物のうちに發見して、それを天下に紹介する方が評家に取つて痛快な場合が多い。又其特殊な趣味が容易に多數に肯はれない所を、決然身を挺して唱道する所が、評家會心の點らしい。文壇はこれがために、新領土を手に入れたと同じ譯になるからである。

一方に又斯んな事實があつた。――

近頃文藝の雑誌がしきりに殖える。毎月活版に組まれる創作の數も餘程の數に上つて來た。評論の筆を執るものが、一一それを熟讀する機會を失つた。余の如き自家の職業上、文藝の諸雜誌に一應眼を通すべき義務を感じてゐてさへ、多忙のため果さざる月が多い。

漸く手の隙いた頃を見計つて、讀み落した諸家の短篇物を読んで行くうちに、無名の人の筆に成つたもので、名聲のある大家の作と比べて遜色のないもの、或はある意味から云つて、却てそれよりも優れてゐると思はれるものが間々出て來た。さうして當時の評論を調べて見ると、是等の作物が全く問題になつて居ない。青木健作氏の「蛇」杯は好例である。

型に入つた批評家のために閑却され、多忙のため不公平を甘んずる批評家のために閑却されては、作家（ことに新進作家）は氣の毒である。時と場合の許す限りさういふ弊は矯正したい。「朝日」に長塚節氏の「土」を掲げるのも幾分か此主意である。

二三年前節氏の佐渡記行を讀んで感服した事がある。記行文であつたけれども普通の小説よりも面白いと思つた。氏はまだ若い人である。しかも若い人に似合はず落ち付き拂つて、行くべき路を行つて、少しも時好を追はない。是はわざと流行に反對したの何のといふ六づかしい意味ではなくて、氏には本來藝術的な一片の性情があつて、氏はたゞ其性情に従ふの外、他を顧みる暇

259

を有たないのである。余は其態度を床しく思つた。

尤も今度載せる「土」の出来榮は、今から先を見越した様な豫言が出来程進行してゐない。最初余から交渉した時、節氏は自分の責任の重いのを氣遣つて長い間返事を寄こさなかつた。夫から漸く遣つて見様といふ挨拶が來た。夫から四十枚程原稿が來た。豫告は此原稿と、氏の書信によつて、草平氏が書いた。今の所余は「土」の一篇がうまく成功する事を氏のために、讀者のために、且新聞のために祈るのみである。

有名な英國の碩學ミルは若い時、同じく若いテニソンをロンドン、リボジトリ紙上に紹介して、猶其次號にブラウニングを紹介しやうとした。主筆から彼の批評は既に前號に載せたといふ返書を得て調べて見ると、頁の最後の一行にたゞ「ポーリン是は謔言なり」とあつた。同雜誌の編輯者が一行餘つた處へ埋草に入れたものである。ブラウニングは後年人に語つて、あの批評のために自分が世間に知られる機會が二十年後れたと云つた。

余が新しい作家を紹介するのは、ミルを以て自ら任ずると云ふより、かゝる無責任な評論家の手から、望みのある人を救はうとする老婆心である。

文藝とヒロイツク

自然主義といふ言葉とヒロイツクと云ふ文字は仙臺平の袴と唐棧の前掛の様に懸け離れたものである。従つて自然主義を口にする人はヒロイツクを描かない。實際そんな形容のつく行爲は二十世紀には無い筈だと頭から極てかゝつてゐる。尤もである。

けれども實際世の中にある又は少いと云ふ事實と、馬鹿げてゐる、滑稽であると云ふ事實とは違ふべき筈である。吾々の見渡した世間にさう眼につく程ごろ／＼してゐない物のうちには、常人さへ唾棄して顧みなくなつた（従つて存在の權利を失つた）のも澤山あるだらうが、貴重なため容易に手に入りかねるのも随分あるべき譯である。ヒロイツクは後者に屬すべきものと思ふ。

自然派の人が滅多にないからと云ふ理由でヒロイツクを描かないのは當を得てゐる。然し滅多にないからと云ふ言辭のもとにヒロイツクを輕蔑するのは論理の昏亂である。此派の人々は現實を描くと云ふ。さうして現實曝露の悲哀を感ずるといふ。客觀の真相に着して主觀の苦悶を覺ゆ

るといふ。一々賛成である。けれども此の苦悶は意の如くならざる事相に即し、思ひの儘に行かぬ現象の推移に即し、もしくは斯くあれかし、斯くありたしとの希望を容れぬ自然の器械的なる進行に即して起る矛盾扞格の意に外ならぬ。云ひ換れば客觀の世界が主觀の世界と一致をかくが爲である。現實が吾れに伴はざるの恨みである。又云ひ換ればわが理想がわが頭の中に孤立して、世態とあまりに没交渉なるがためである。冷冽なる自然がわが知識と情操と意志を侮蔑して勝手に横着に非人間的に社會を動かして行くからである。

自然主義者の所謂主觀の苦悶を斯く解釋するとき、理想の二字を彼等の主觀中より取去る事は困難とならねばならぬ。廣義に於ける理想を抱かざるものが、自己又は他人の經過した現實を顧みて、之を悲しむの必要もなければ之に悶ゆるの理由もない筈である。

一たび此論斷を肯つたとき、彼等は彼等の主觀のうちに、又彼等の理想のうちに、彼等の平素排斥しつゝあるが如く見ゆる諸々の善、諸々の美、又もろくの壯と烈との存在を肯はねばならぬ。従つてヒロイックは彼等の主張せんと欲して、現實に見出しがたきが爲めに、これを描くを憚り、もしくは之を描くを恐るゝ一種の行爲と云はねばならぬ。

彼等にしてもし現實中に此行爲を見出し得たるとき、彼等の憚りも彼等の恐れも一掃にして拭ひ去るべきである。況や彼等の輕蔑をや虚偽呼はりをやである。余は近時潜航艇中に死せる佐

久間艇長の遺書を読んで、此ヒロイックなる文字の、我等と時を同くする日本の軍人によつて、器械的の社會の中に赫として一時に燃焼せられたるを喜ぶものである。自然派の諸君子に、此文字の、今日の日本に於て猶眞個の生命あるを事實の上に於て證據立て得たるを賀するものである。彼等の腦中よりヒロイックを描く事の憚りと恐れとを取り去つて、隨意に此方面に手を着けしむるの保證と安心とを與へ得たるものである。

往時英國の潜航艇に同様不幸の事あつた時、艇員は争つて死を免れんとするの一念から、一所にかたまつて水明りの洩れる窓の下に折り重なつたまゝ死んでゐたといふ。本能の如何に義務心より強いかを證明するに足るべき有力な出来事である。本能の權威のみを説かんとする自然派の小説家はこゝに好個の材料を見出すであらう。さうして或る手腕家によつて、此一事實から傑出した文學を作り上げる事が出来るだらう。けれども現實は是丈である。其他は嘘であると主張する自然派の作家は、一方に於て佐久間艇長と其部下の死と、艇長の遺書を見る必要がある。さうして重荷を擔ふて遠きに行く獸類と選ぶ所なき現代的の人間にも、亦此種不可思議の行爲があると云ふ事を知る必要がある。自然派の作物は狭い文壇の中にさへ通用すれば差支ないと云ふ自殺的態度を取らぬ限りは、彼等と雖も亦自然派のみに專領されてゐない廣い世界を知らなければならぬ。

病院生活をして約一ヶ月になる。人から佐久間艇長の遺書の濡れたのを其儘寫眞版にしたのを貰つて、床の上で其名文を読み返して見て、「文藝とヒロイツク」と云ふ一篇が書きたくなつた。

— 四三・七・一九 —

艇長の遺書と中佐の詩

昨日は佐久間艇長の遺書を評して名文と云つた。艇長の遺書と前後して新聞紙上にあらはれた廣瀬中佐の詩が、此遺書に比して甚だ月並なのは前者の記憶のまだ鮮かなる吾人の腦裏に一種痛ましい對照を印した。

露骨に云へば中佐の詩は拙悪と云はんより寧ろ陳套を極めたものである。吾々が十六七のとき文天祥の正氣の歌などにかぶれて、ひそかに慷慨家列傳に編入してもらひたい希望で作つたものと同程度の出来栄である。文字の素養がなくとも誠實な感情を有してゐる以上は（又如何に高等な翫賞家でも此誠實な感情を離れて翫賞の出来ないのは無論であるが）誰でも中佐があんな詩を作らずに黙つて閉塞船で死んで呉れたならと思ふだらう。

まづいと云ふ點から見れば雙方ともに下手いに違ない。けれども佐久間大尉のは已を得ずして拙く出来たのである。呼吸が苦しくなる。部屋が暗くなる。鼓膜が破れさうになる。一行書くす

ら容易ではない。あれ丈文字を連らねるのは超凡の努力を要する譯である。従つて書かなくては濟まない、遺さなくては悪いと思ふ事以外には一畫と雖も漫りに手を動かす餘地がない。平安な時あらゆる人に絶えず附け纏はる自己廣告の街氣は殆ど意識に上る權威を失つてゐる。従つて艇長の聲は最も苦しき聲である。又最も拙な聲である。いくら苦しくても拙でも云はねば濟まぬ聲だから、最も娑婆氣を離れた邪氣のない事である。殆んど自然と一致した私の少い聲である。そこに吾人は艇長の動機に、人間としての極度の誠實心を吹き込んで、其一言一句を眞の影の如く讀みながら、今の世にわが欺かれざるを難有く思ふのである。さうして其文の拙なれば拙なる丈眞の反射として意を安んずるのである。

其上艇長の書いた事には嘘を吐く必要のない事實が多い。艇が何度の角度で沈んだ、ガソリンが室内に充ちた、チェインが切れた、電燈が消えた。此等の現象に自己廣告は平時と雖ども無益である。従つて彼は艇長としての報告を作らんがために、凡ての苦悶を忍んだので、他によく思はれるがために、徒らな言句を連ねたのでないと云ふ結論に歸着する。又其報告が實際當局者の参考になつた効果から見ても、彼は自分のために書き残したのでなくて他の爲に苦痛に堪へたと云ふ證據さへ立つ。

廣瀬中佐の詩に至つては毫も以上の條件を具へてゐない。已を得ずして拙な詩を作つたと云ふ痕跡はなくつて、已を得るにも拘はらず俗な句を並べたといふ疑ひがある。艇長は自分が書かねばならぬ事を書き残した。又自分でなければ書けない事を書き残した。中佐の詩に至つては作らないでも濟むのに作つたものである。作らないでも濟む時に詩を作る唯一の辯護は、詩を職業とするからか、又は他人に眞似の出来ない詩を作り得るからかの場合に限る。(其外徒然であつたり、氣が向いたりして作る場合は無論あるだらうが) 中佐は詩を残す必要のない軍人である。しかも其詩は誰にでも作れる個性のないものである。のみならず彼の様な詩を作るものに限つて決して壯烈の舉動を敢てし得ない。即ち單なる自己廣告のために作る人が多さうに思はれるのである。其内容が如何にも偉さうだからである。又偉がつてゐるからである。幸ひにして中佐はある詩に歌つたと事實の上に於て矛盾しない最後を遂げた。さうして銅像迄建てられた。吾々は中佐の死を勇ましく思ふ。けれども同時にあの詩を俗悪で陳腐で生きた個人の面影がないと思ふ。あんな詩によつて中佐を代表するのが氣の毒だと思ふ。

道義的情操に關する言辭(詩歌感想を含む)は其言辭を實現し得たるとき始めて他をして其誠實を肯はしむるのが常である。余に至つては、更に懷疑の方向に一步を進めて、其言辭を實現し得たる時にすら、猶且其誠實を残りなく認むる能はざるを悲しむものである。微かなる陥缺は言辭詩歌の奥に潜むか、又はそれを實現する行爲の根に絡んでゐるか何方かであらう。余は中佐の

敢てせる旅順閉塞の行爲に一點虚偽の疑ひを挟むを好まぬものである。だから好んで罪を中佐の詩に嫁するのである。

—四三、七、二〇—

鑑賞の統一と獨立

アーサー、バルフォアの書いた「批評と美」と云ふ講演を読んで見た。バルフォアが本職外に斯う云ふ講演をした事が余の好奇心を釣つたので、わざ／＼注文してそれを取り寄せたのである。

講演は短いもので僅五十頁に盡きてゐる。しかし彼自身が小序に於て斷つた如く、文字の使用方も議論の遣り口も寧ろ通俗に近いものである。其上彼の到着した結論は遂に消極的であつた。けれども其消極的な點が余の感興を動かした。

往年余が英國に留學して、文學といふ茫漠たるものを研究してゐる際に、作物の評価上、大に彼此の差に迷つて困却した事がある。例へば向うの人が悉く許して傑作と見做してゐるものが、此方には左程に思はれなかつたり、或ひは微妙の音楽があるとして強ひられる詩歌に、何物をも迎へ入れる耳がなかつたり、そんな矛盾が毎日の様にあるので、不愉快な日ばかり重ねてゐた。

仕舞に自家の味はふべきものに、他人の味覺を標準とするは顛倒である、文藝の甄賞は善かれ悪かれ自分の持つてゐる舌でやるべき仕事である、いくら信用して然るべき男がゐるにしても、此道ばかりは代理を頼む譯に行かないものだと思つた。

それから自分の立場を正當にするために、「趣味の差違」と云ふ題目の下にあらゆる類例を集めにかゝつた。類例の範圍は文學美術習慣道德其他苟も趣味の附着し得る限りあらゆる方面に涉つて取捨する所なく、集め得る丈のものを集めて、しかる後に概括的に論斷を下す積であつた。無論出立點が國民により、時代により、流行により、年齢により、個人の性情と教育によつて好尚に差違のある事を根底から證據立てたいといふ希望であつたのだから、たとひ思ひ通に計畫は成就しなかつたにしても、結論の方は例を集める前既に半分は出來上つてゐたと云つても差支はない。當時余の反抗心は所謂權威ある傳流的な批評、若くは他の定めたる藝術的範疇に因つて、雷同を強ひらるゝ屈辱を避けんがために起つたのであるから、今パルフォア一によつて拈出せられたる（美の標準は客觀的に定めにくい、嚴密に云へば人々別々であるといふ）頗る常套な結論を讀んでも、當時予の親しく經過した不安やら、此不安に次いで起つた決斷やらを憶ひ起さしめる點に於て余は頗る興味を感じるのである。

同時に余は現在の自己を顧みて、ひそかに當年の余と比較するの機會を、パルフォア一によつ

てサジェストされた様な心持がする。余は近來若い人々と接觸して、近代の作物又は現今の日本で出版になる創作に就いて批判的の意見を交換する事が多い。中には運よく一致する事がある。たまには首尾よく先方で余の評價を容れてくれる事がある。けれども左様容易く埒のあかない時が往々ある。さうして雙方とも下らないで分れて仕舞ふ。そんな時に余はどうしても余に反對する若い人の評價が間違つてゐて、自分の方が正しい氣がしてならぬ。或場合にはあれの云ふ事は飛んでもない誤謬だと確信する事もある。新聞雜誌に出る月々の創作に對する批評などに關してはことに此感が深い。余は此等の評壇を擔任する専門家に對して惡意を抱くがためにことさらに自白するのではないが、稀にはよくあんな事が云へたものだと思ふ事さへあつた。

此心持の底には彼より我の方が、評價に於て優つてゐるといふ自信がある。彼も正しかるべき筈であるし、我も間違つて居らぬと公平に主張するよりも、彼は自家の見地を棄て、我に従ふのが當然だといふ斷定がある。少くともさう云ふ希望がある。それ所ではない、彼にして我ほどの鑑賞力があつたなら必ず我に一致するだらうにと云ふ已惚がある。一言にして蔽へば、作物の評價には統一がありたきものである。又統一があるべき筈であるといふ氣に充ちてゐる。然らざれば文壇は滅茶々々と云ふ感がある。紛糾支離の結果どうなるだらうといふ恐れが潜んでゐる。昔は他の權威に堪へぬ結果、自己の舌で冷暖を味はねばならぬと主張して、人は人、我は我の

極差別觀を立てようとした余が、夫で正鵠を得たものと思ひ過ごした今日迄も立脚地を立て直す必要も見認めないのに、自身はいつか冥々のうちに自分一個の批判を大なる權威として他の鑑賞力の上に被らさうと冀つてゐた。しかも夫は正しい事と信じてゐた。

バルフォアの講義を讀んで、今昔の自分を同時に對照するの機會を得た時、余は此自家頭上の矛盾を一度に意識した。意識しながらも何方か一方に片付けなければなるまいと云ふ理由を發見するに苦しんでゐるのは不思議である。各自の舌は他の奪ひがたき獨立した感覺を各自に鳴らす自由を有つてゐるに相違ない。けれども各自は遂に各自勝手に終るべきものであらうか。己れの文藝が己れだけの文藝で遂に天下のものとなり得ぬであらうか。それでは情ない、心細い。散り散りばら／＼である。何とかして各自の舌の底に一味の連絡をつけたい。さうして少しでも統一の感を得て落ち付きたい。消極的の結論に到着したバルフォアには此積極的な希望も暗示もないのであらうか。余は此暗示を今確的に客觀的に指摘する程頭の燒點が整はないのを憾みとする。さうして此矛盾を理路を辿つて調和する力のないのを残念に思ふ。けれども一方に於て個人の趣味の獨立を説く余は、近來一方に於てどうしても此統一感を驅逐する事が出来なくなつたのである。

イズムの功過

大抵のイズムとか主義とかいふものは無數の事實を几帳面な男が束にして頭の抽出へ入れ易い様に拵へてくれたものである。一總めにきちりと片付けてゐる代りには、出すのが臆劫になつたり、解くのに手数がかゝつたりするので、いざと云ふ場合には間に合はない事が多い。大抵のイズムは此點に於て、實生活上の行爲を直接に支配するために作られたる指南車といふよりは、吾人の知識欲を充たすための統一函である。文章ではなくつて字引である。

同時に多くのイズムは、零碎の類例が、比較的緻密な頭腦に濾過されて凝結した時に取る一種の形である。形と云はんよりは寧ろ輪廓である。中味の無いものである。中味を棄て、輪廓文を疊み込むのは、天保錢を脊負ふ代りに紙幣を懐にすると同じく小さな人間として輕便だからである。

此意味に於てイズムは會社の決算報告に比較すべきものである。更に生徒の學年成績に匹敵す

べきものである。僅一行の數字の裏面に、僅か二位の得點の背景に殆ど有の儘には繰返しがたき、多くの時と事と人間と、其人間の努力と悲喜と成敗とが潜んでゐる。

従つてイズムは既に經過せる事實を土臺として成立するものである。過去を總束するものである。經驗の歴史を簡略にするものである。興へられたる事實の輪廓である。型である。此型を以て未來に臨むのは、天の展開する未來の内容を、人の頭で拵へた器に盛終せやうと、あらかじめ待ち設けると一般である。器械的な自然界の現象のうち、尤も單調な重複を厭はざるものには、すぐ此型を應用して實生活の便宜を計る事が出来るかも知れない。科學者の研究が未來に反射するといふのはこの爲である。然し人間精神上の生活に於て、吾人がもしイズムに支配されんとするとき、吾人は直に興へられたる輪廓の爲に生存するの苦痛を感じるものである。單に興へられたる輪廓の方便として生存するのは、形骸の爲に器械の用をなすと一般だからである。其時わが精神の發展が自個天然の法則に遵つて、自己に眞實なる輪廓を、自らと自らに付與し得ざる屈辱を憤る事さへある。

精神が此屈辱を感じる時、吾人はこれを過去の輪廓が將に崩れんとする前兆と見る。未來に引き延ばしがたきものを引き延ばして無理に或は盲目的に利用せんとしたる罪過と見る。

過去は是等のイズムに因つて支配せられたるが故に、是からも亦此イズムに支配せられざるべ

からずと臆斷して、一短期の過程より得たる輪廓を胸に藏して、凡てを斷ぜんとするものは、升を抱いて高さを計り、かねて長さを量らんとするが如き暴舉である。

自然主義なるものが起つて既に五六年になる。これを口にする人は皆それ／＼の根據あつての事と思ふ。わが知る限りに於ては、又わが了解し得たる限りに於ては（了解し得ざる論議は暫く措いて）必ずしも非難すべき點ばかりはない。けれども自然主義も亦一つのイズムである。人生上藝術上、ともに一種の因果によつて、西洋に發展した歴史の斷面を、輪廓にして舶載した品物である。吾人が此輪廓の中味を充物するために生きて居るのでない事は明かである。吾人の活力發展の内容が、自然に此輪廓を描いた時、始めて自然主義に意義が生ずるのである。

一般の世間は自然主義を嫌つてゐる。自然主義者は之を永久の眞理の如くに云ひなして吾人生活の全面に涉つて強ひんとしつゝある。自然主義者にして今少し手強く、又今少し根氣よく猛進したなら、自ら覆るの未來を早めつゝある事に氣がつくだらう。人生の全局面を蔽ふ大輪廓を描いて、未來を其中に追ひ込まうとするよりも、茫漠たる輪廓中の一小片を堅固に把持して、其處に自然主義の恆久を認識してもらう方が彼等のために得策ではなからうかと思ふ。

好悪と優劣

上

作物の評價に好悪の辯を用ひる限り、作物そのものは是非の煩から脱却してゐる。といふ意味は、好悪とは遂に評家の頭にのみ存する印象で、云はゞ作物から反射した光線の影が、彼の胸に宿つた主觀的の感じに過ぎないからである。之に反して、もし翫賞の上に優劣の文字を使用すると、前とは趣が大分違つてくる。既に優劣といふ以上は、評家の受取つた個人的の感じに満足しないで、其感じを自己以外の讀者にも通用するものと見做すか、又は通用せしめんとする一種の努力である。他の方面から説明すると、優劣と云ふ言葉は、既に評家の頭を離れて作其物に附着した區別である。優劣の二字で批判された作物は、其批評を自家の屬性の如くに脊負つて歩かなければならない。客觀的にさう云ふ資格を評家から附與されたと云つてもよし、もつと鮮明に述べてと、在來客觀的に作中に存在してゐたさう云ふ資格を、評家によつて今發見されたといふ事

にもなる。

だから只自分は甲の作が乙の作より好きだとか嫌ひだとか云つてゐるうちは、評家として作物に對する責任は甚だ軽いのである。即ち其裏面には、常に人は異見もあらうが自分は斯う思ふと云ふ條件が附帶してある。謙遜の美德に富んだ人、もしくは作家に敬意を表する人が、好んで此態度に出るのは、この爲である。(今の評壇に此種の人は甚だ少い)

之に反して優劣を斷言する人は、自分の評價は單に自分にのみ正當なのではない、他の人にも是非通用しなければならぬといふ假定から出立してゐる。云はゞ權威ある批評である。甲は乙よりも優つてゐる或は劣つてゐるとは、即ち評者一家の好悪ではない、作そのものが既に優つてゐる、劣つてゐると云ふ意味なのだから、天下一般に通用しなくてはならない頗る強いもので、殆んど他に反對を許さぬ性質を帯びてゐる。従つて其責任は甚だ重くなければならぬ。是非共客觀的に論證して、此作は斯う云ふ長所特色、もしくは、斯う云ふ短所陥缺があるから、優つてゐる、もしくは劣つてゐると、自分の頭に受けた好悪を、更に作そのものゝ上に放射して、誰にも見える作中の事相に本づいて、それを材料として架説しなければならぬ。しかも云ふ所はコンキンシングでなければならぬ。然らざれば既に自家出立當時の假定を、蔑如せる矛盾に陥るからである。(今の評家の多くが、態度から云ふと作物の優劣を論ずる如くに見せて、其實は

劣優と悪好

單に好惡の評を繰返すのは、たゞに作家を侮辱するのみならず、かねて天下を瞞着せんとするものである。)。

優劣の論議は一個の好惡を擴大して、これを出来る丈普遍的ならしめんとするの努力である。自己の好惡を直下ちかひに他に感染せしむるの方法なき故に、已を得ず一先づ之を客觀的に翻譯して、それを納得する他人に、自己同様の好惡を把握せしむる方便である。二重に手間のかゝる廻りくどい方法ではあるが、翫賞の上に於ては各翫賞家の間に以心傳心の法を缺く人間の所作として、手ぬるくとも仕方がないのである。

下

此間接手段(自分の主觀を一返客觀に翻譯して、其翻譯の力で、又もとの主觀に似たあるものを人の頭に起させる手段)に於て、自他の感情に交通の途をつける中間の連鎖が至要の使命を帯びるのは當然である。比喩的に云へば、此導線はわが電流を彼に送るに堪へる程丈夫でなければならぬ、又デリケートでなければならぬ。平たく説破すれば、兩者の中間に横たはる客觀的架設は有力で明瞭で秩序があつて、聞く人に納得の出来るやうなものでなければならぬ。即ち普遍的の傾向を有する點に於て相當の實力を具へてゐなければならぬ。

けれども吾人が作物の優劣を論ずるとき、自家の好惡を擴大して更にこれを他人の好惡となさんと試みるとき、其試みの成敗は一にかゝつて此中間の架設にあるが如く考へるのは、それが唯一の方便だからである。よく／＼自分の心理状態を反省して見ると、自分の本氣に重きを置いてゐる所のものは、依然として矢張り當初の主觀即ち好惡にある。此好惡の念が鮮かに隈どられて、強烈に燃焼するとき、これを傳ふる導體も亦必ず有力であり、コンギンシングであらねばならぬとの感が潜んでゐる。主觀を翻譯する客觀的架設の價值こそ却て懸つて此主觀の強弱にあるかの信念がある。好惡の取捨赫灼として眼を射る如く明かなるときはこれを布衍する第二義の説明も亦それに相應する權威を以て上下に徹底し得ざるべからずとの自信に支配される。即ち直覺が強ければ強い程それを代表する議論も堅牢であるとの念が深い。だから客觀の辯説が作の優劣を決するとは云ひながら、其實は既に一個の好惡が早く既に其優劣を決してゐるのである。好惡が優劣に變化せねばやまぬ程、(自己が多數に傳染せねばやまぬ程)主觀が強ければこそ、客觀的の導線も自然に流出するのである。

個人の主觀が個人的の制限に甘んぜずして、これを普通ならしめんとするの活動を試みるのは、取も直さず、趣味に統一がなくてはならぬとの努力に外ならぬのである。自分の好惡は同時に甲の好惡であり、乙の好惡であり、並せて丙丁の好惡であり得べし、もしくは然あらざるべからずと

の念力であつて、此念力を果す方法が即ち誰にでも通用する客觀的論辯の形になつて發現するのである。

「鑑賞の統一と獨立」中に述べた統一と獨立との關係は、實を云ふと斯う云ふものであつたのである。従つて此統一といふ字面の裏には、必ずしも俗に所謂藝術上のカノン（法規）を含んでゐない。藝術上のカノンは希臘のアリストートル以後幾多の哲學者と批評家によつて建立せられ又破壊された。昔より今日に至る迄、永久不變の價值を有するカノンは未だ曾て一つもないと云つて差支ない。其理由を説明するのは、先に述べた「イズムの功過」中にある議論を繰返す丈だから、重説しない。ケヤードと云ふ學者は、天才は自ら法規を制定するの權利を有すと云つてゐる。余の言葉に従へば、自己の生命は自己に適當なる輪廓を自然に構造するが故に、一代前の輪廓を何時の間にか脱却すると云ふ事である。だから此處に辯じて來た統一と古來から幾度も唱道されたカノンと同様式のものとする、一方に統一を説き一方にイズムを排する、余は明らかに矛盾を冒した譯になる。だから其處を明かにして置きたい。

余の云つた趣味の統一とは、多種多様の作物の個々を鑑賞する場合に甲乙が其評價に於て一致する事を指して多く云つたのである。苟くも或程度迄此統一を許さぬ以上は、文藝界に在つて同じ空氣を吸ひながら、同じ飯を食ひながら、同じ文明と社會に住みながら、友人と他人とに論な

く、人は皆石片の如く何等精神的に交渉なく只ごろ／＼してゐるといふ不合理な結論に到着しなければならぬ。さうすれば文藝の成立に必要な相互の同情といふ本義を滅して仕舞ふと云ひたいのである。好悪を以て満足の出來ぬ程主觀が強烈に働くとき、これを客觀化して優劣とし、其處に趣味の統一を要求して始めて落ち付くのは單に自我を吹聴する許でない、わが主觀に對する同情を天下に求むる自然の聲であると提唱したのである。

博士問題とマードック先生と余

上

余が博士に推薦されたと云ふ報知が新聞紙上で世間へ傳へられたとき、余を知る人のうちの或者は特に書を寄せて余の榮選を祝した。余が博士を辭退した手紙が同じく新聞紙上で發表されたときも亦余は故舊新知もしくは未知の或ものからわざわざ賛成同情の意義に富んだ書状を幾通も受取つた。伊豫にゐる一舊友は余が學位を授與されたと云ふ通信を讀んで賀狀を書かうと思つてゐた所に、辭退の報知を聞いて今度は辭退の方を目出度思つたさうである。貰つても辭しても何方にしても賀すべき事だといふのが此友の感想であるとか云つて來た。さうかと思ふと惡戯好の社友は、余が辭退したのを承知の上で、故さらに余を厭がらせる爲に、夏目文學博士殿と上書をした手紙を寄こした。此手紙の内容は御退院を祝すと云ふ丈なんだから一行で用が足りてゐる。従つて夏目文學博士殿と宛名を書く方が本文よりも少し手数が掛つた譯である。

然し凡て是等の手紙は受取る前から豫期してゐなかつたと同時に、受取つても夫程意外とも感じなかつたもの許である。たゞ舊師マードック先生から同じく此事件に就て突然封書が届いた時丈は全く驚ろかされた。

マードック先生とは二十年前に分れたぎり顔を合せた事もなければ信書の往復をした事もない。全くの疎遠で今日迄打ち過ぎたのである。けれども其當時は毎週五六時間必ず先生の教場へ出て英語や歴史の授業を受けた許でなく、時々私宅迄押し懸けて行つて話を聞いた位親しかつたのである。

先生はもと母國の大學で希臘語の教授をして居られた。それがあつた事情のため斷然英國を後にして單身日本へ來る氣になられたので、余等の教授を受ける頃は、まだ日本化しない純然たる蘇國語スコットランドを使つて講義やら説明やら談話やらを見境なく遣られた。それが爲め同級生は悉く辟易の體で、たゞ烟に捲かれるのを生徒の分と心得てゐた。先生も夫で平氣の様に見えた。大方どうせこんな下らない事を教へてゐるんだから、生徒なんかに分つても分らなくつても構はないと云ふ氣だつたのだらう。けれども先生の性質が如何にも淡泊で丁寧で、立派な英國風の紳士と極端なボヘミアニズムを合併した様な特殊の人格を具へてゐるのに敬服して教授上の苦情を云ふものは一人もなかつた。

先生の白襦衣ホワイシヤを着た所は滅多に見る事が出来なかつた。大抵は鼠色のフラネルに風呂敷の切れ端の様な襟飾ホワイを結んで済まして居られた。しかも其風呂敷に似た襟飾が時々胸着ホワイの胸から抜け出して風にひら／＼するのを見受けた事があつた。高等學校の教授が黒いガウンを着出したのは其頃からの事であるが、先生も當時は例の鼠色のフラネルの上へ縞子か何かのガウンを法衣ホワイの様に羽織ホワイてゐられた。ガウンの袖口には黄色い平打の紐が、ぐるりと縫ひ廻してあつた。是は裝飾の爲とも見られるし、又は袖口を括る用意とも受取れた。たゞし先生には全く兩様の意義を失つた紐に過ぎなかつた。先生が教場で興に乗じて自分の面白いと思ふ問題を講じ出すと、殆んどガウンも鼠の襦衣ホワイも忘れて仕舞ふ。果はわが居る所が教場であると云ふ事さへ忘れるらしかつた。斯んな時には大股で教壇を下りて余等の前へ髯だらけの顔を持つてくる。もし余等の前に缺席者でもあつて、一脚の机が空いてゐれば、必ず其上へ腰を掛ける。さうして例のガウンの袖口に着いてゐる黄色い紐を引張つて、一尺程の長さを拵らへて置いて、それでびしやり／＼と机の上を蔽ホワイいたものである。

當時余はほんの小供であつたから、先生の學殖とか造詣とかを批判する力は丸でなかつた。第一先生の使ふ言葉からが余自身の英語とは頗る縁の遠いものであつた。それでも余は他の同級生よりも比較的熱心な英語の研究者であつたから、分らないながらも出来得る限りの耳と頭を整理

して先生の前へ出た。時には先生の家迄も出掛けた。先生の家は先生のフラネルの襦衣ホワイと先生の帽子——先生はくしやく／＼になつた中折帽に自分勝手に變な鉢巻ホワイを巻き付けて被つてゐた事があつた。——凡て是等先生の服裝に調和する程に、先生の生活は單純なものであるらしかつた。

中

其頃の余は西洋の禮式と云ふものを殆んど心得なかつたから、訪問時間などと云ふ觀念を少しも挟ホワイさむ氣兼ねしに、時ならず先生を襲ふ不作法を敢てして憚ホワイからなかつた。ある日朝早く行くと、先生は丁度朝食ホワイを認めてゐる最中であつた。家が狭いためか、又は余を別室に導く手數ホワイを省いた爲か、先生は余を自分の食卓の前に坐らして、君はもう飯を食つたかと聞かれた。先生は其時卵のフライを食つてゐた。成程西洋人と云ふものは斯んなものを朝食ふのかと思つて、余はひたすら食事の進行を眺めてゐた。實は今考へると其時迄卵のフライと云ふものを味はつた事が無い様な氣がする。卵のフライと云ふ言葉も夫からずつと後に覺えた様に思はれる。

先生はやがて肉刀ホワイと肉匙ホワイを中途で置いた。さうして椅子を立ち上がつて、書棚の中から黒い表紙の小形の本を出して、そのうちの或頁を朗々と讀み始めた。しばらくすると、本を伏せて何うだと聞かれた。正直の所余には一言も解らなかつたから、一體夫は英語ですかと聞いた。すると

片に、十種程の書目を認めて余に與へられた。余は時を移さずその内の或物を讀んだ。即座に手に入らなかつたものは、機會を求めて得る度にこれを讀んだ。どうしても眼に觸れなかつたものは、倫敦へ行つたとき買つて讀んだ。先生の書いて呉れた紙片が、余の袂に落ちてから、約十年の後に余は始めて先生の擧げた凡てを讀む事が出来たのである。先生はあの紙片にそれ程の重きを置いて居なかつたのだらう。凡てを讀んでから又十年も経つた今日から見れば、それ程先生の紙片に重きを置いた余の方でも可笑しい氣がする。

外國から歸つた當時、先生の消息を人傳に聞いて、先生は今鹿兒島の高等學校に相變らず英語を教へて居ると云ふ事が分つた。鹿兒島から人が出てくる度に余はマードックさんは何うしたと尋ねない事はなかつた。けれども音信は其後二人の間に全く絶えてゐたのである。たゞ余が先生に就いて得た最後の報知は、先生がとうとう學校を已めて仕舞つて、市外の高臺に居をトしつゝ、果樹の栽培に餘念がないらしいと云ふ事であつた。先生は「日本に於る英國の隱者」と云ふやうな高尚な生活を送つてゐるらしく思はれた。博士問題に關して突然余の手に届いた一封の書翰は、實に此隱者が二十餘年來の無音を破る價ありと信じて、とくに余のために認めて呉れたものと見える。

先生は天來の滑稽を不用意に感得した様に憚りなく笑ひ出した。さうして是は希臘の詩だと答へられた。英國の表現に、珍紛漢の事を、それは希臘語さと云ふのがある。希臘語は彼地でも其位六づかしい物にしてあるのだらう。高等學校生徒の余などに解る筈は無論ない。それを何故先生が讀んで聞かせたのかと云ふと、詳しい理由は今思ひ出せないが、何でも希臘の文學を推稱した揚句の事ではなかつたかと思ふ。兎に角先生はさう云ふ性質の人なのである。

先生の作つた「日本に於るドン、ジュアンの孫」と云ふ長詩も慥か聞かされた様に思ふ。けれども其うちの或行にアラス、アラツク、と云ふ感投詞が二つ續いてゐたと記憶する丈で、あとは丸で忘れて仕舞つた。

ペインの論理學を讀めと云つて先生が貸して呉れた事もあつた。余はそれを通讀する積りで宅へ持つて歸つたが、何分課業其他が忙がしいので段々延び／＼になつて、何時迄立つても目的を果し得なかつた。程經て先生が、久しい前君に貸したペインの本は僕の先生の著作だから保存して置きたいから、もし讀んで仕舞つたなら返して呉れと云はれた。其本は大分丹念に使用したものと見えて裏表とも表紙が千切れてゐた。それを借りたときにも返した時にも、先生は哲學の方の素養もあるのかと考へて、小供心に羨ましかつた。

あるとき何んな英語の本を讀んだら宜からうと云ふ余の間に應じて、先生は早速手近にある紙

手紙には日常の談話と異ならない程度の平易な英語で、眞率に余の學位辭退を喜ぶ旨が書いてあつた。其内に、今回の事は君がモラル、バツクポーンを有してゐる證據になるから目出度と云ふ句が見えた。モラル、バツクポーンと云ふ何でもない英語を翻譯すると、徳義的脊髓と云ふ新奇でかつ趣のある字面が出来る。余の行爲が此有用な新熟語に價するか何うかは、先生の見識に任せて置く積である。(余自身は夫程新しい脊髓がなくても、不便宜なしに誰にでも出来る所作だと思ふけれども)

先生は又グラツドストーンやカーライルやスペンサーの名を引用して、君の御仲間も大分あると云はれた。是には恐縮した。余が博士を辭する時に、是等前人の先例は、毫も余が腦裏に閃めなかつたからである。——余が決斷を促がす動機の一部をも形づくらなかつたからである。尤も先生が是等知名の人の名を擧げたのは、辭任の必ずしも非禮でないといふ實證を余に紹介された迄で、是等知名の人を余に比較する爲でなかつたのは無論である。

先生云ふ、——吾等が流俗以上に傑出しやうと力めるのは、人として當然である。けれども吾等は社會に對する榮譽の貢獻によつてのみ傑出すべきである。傑出を要求するの最上權利は、凡

ての時に於て、吾等の人物如何と吾等の仕事如何によつてのみ決せらるべきである。

先生の此主義を實行してゐる事は、先生の日常生活を別にしても、其著作日本歴史に於て明かに窺ふ事が出来る。自白すれば余はまだ此標準的述作スタンダード・ワークを読んで居ないのである。夫にも拘はらず、先生が十年の歳月と、十年の精力と、同じく十年の忍耐を傾け盡して、悉くこれを此一書の中に注ぎ込んだ過去の苦心談は、先生の愛弟子山縣五十雄君から精しく聞いて知つてゐる。先生は稿を起すに當つて、殆んどあらゆる國語で出版された日本に關する凡ての記事を讀破したといふ事である。山縣君は第一其語學の力に驚ろいてゐた。和蘭語でも何でも自由に讀むと云つて呆れた様な顔をして余に語つた。述作の際非常に頭を使ふ結果として、仕舞には天を仰いで昏倒多時に互る事があるので、奥さんが大變心配したと云ふ話も聞いた。夫許ではない、先生は單に此著作を完成する爲に、日本語と漢字の研究迄積まれたのである。山縣君は先生の技倆を疑つて、六づかしい漢字を先生に書かして見たら、旨くはないが、劃丈は間違なく立派に書いたと云つて感心してゐた。此等の準備からなる先生の日本歴史は、悉く材料を第一の源から拾ひ集めて大成したもので、儲からない保證があると同時に、學者の良心に對して毫も疚ましからぬ徳義的な著作であるのは云ふ迄もない。

「余は人間に能ふ限りの公平と無私とを念じて、榮譽ある君の國の歴史を今に猶述作しつゝ、あ

先生は約の如く横濱總領事を通じてケリーエンドウオルシから自著の日本歴史を余に送るべく取り計はれたと見えて、約七百頁の重い書物が其後日ならずして余の手に落ちた。たゞし夫は第一巻であつた。さうして巻末に明治四十三年五月発行と書いてあるので、余は始めて此書に對する出版順序に關しての余の誤解を覺つた。

先生は吾邦歴史のうちで、葡萄牙人が十六世紀に始めて日本を發見して以來織田、豊臣、徳川三氏を経て島原の内亂に至る迄の間、所謂西歐交通の初期とも稱して然るべき時期を擇んで、其部分文を先年出版されたのである。だから順序から云ふと、第二巻が最初に公けにされた譯になる。さうして去年五月発行とある新刊の方は、却つて第一巻に相當する上代以後の歴史であつた。最後の巻、即ち十七世紀の中頃から維新の變に至る迄の沿革は、今猶述作中にかゝる未成品に過

る。従つて余の著書は一部人士の不満を招くかも知れない。けれども夫は已を得ない。ジョンモレーの云つた通り何人にもあれ誠實を妨ぐるものは、人類進歩の活力を妨ぐると一般であつて、其真正なる日本の進歩は余の心を深くかつ眞面目に動かす題目に外ならぬからである。」

余は先生の人となりと先生の目的とを信じて、茲に先生の手紙の一節を有の儘に譯出した。先生は新刊第三巻の冒頭にある緒論をとくに思慮ある日本人に見て貰ひたいと云はれる。先生から同書の寄贈を受ける日それを一讀して満足な批評を書き得るならば、さうして先生の著書を天下に紹介する事が出來得るならば余の幸である。先生の意は、學位を辭退した人間としての夏目なにかしに自分の著述を讀んで貰つて、同じく博士を辭退した人間としての夏目なにかしに、その著述を天下に紹介して貰ひたいと云ふ所にあるのだらうと思ふからである。

マードック先生の日本歴史

上

ぎなかつた。其去年の第一巻と是から出る第三巻目は、先生一個の企てでなく、日本の亞細亞協會が引き受けて刊行するのだと云ふ事が分つた。従つて先生の讀んで呉れと云つた新刊の緒論は、第三巻にあるのではなくて、矢張り第一巻の第一篇の事だと知れた。夫で先づ寄贈された大冊子の冒頭にある緒言文を取り敢ず通覽した。

維新の革命と同時に生れた余から見ると、明治の歴史は即ち余の歴史である。余自身の歴史が天然自然に何の苦もなく今日迄發展して來たと同様に、明治の歴史も亦尋常正當に四十何年を重ねて今日迄進んで來たとしか思はれない。自分が世間から受ける待遇や、一般から蒙る評價には、案外な點も或はあると云はれるかも知れないが、自分が如何にして斯んな人間に出來上つたかといふ徑路や因果や變化に就ては、善惡に拘はらず不思議を挟む餘地がちつとも無い。たゞ斯の如く生れ、斯の如く成長し、斯の如き社會の感化を受けて、斯の如き人間に片付いた迄と自覺する丈で、其自覺以上に何等の驚ろくべき點がないから、従つて何等の好奇心も起らない、従つて何等の研究心も生じない。かゝる理の當然一片の判斷が自己を支配する如くに、同じく當り前さと云ふ觀念が、矢張り自己の生息する明治の歴史にも付け纏つてゐる。海軍が進歩した、陸軍が強大になつた、工業が發達した、學問が隆盛になつたとは思ふが、それを認めると等しく、しかあるべき筈だと考へる丈で、未だ嘗て「如何にして」とか「何故に」とか不審を打つた試しがない。

必竟吾等是一種の潮流の中に生息してゐるので、其潮流に押し流されてゐる自覺はありながら、斯う流されるのが本當だと、筋肉も神経も脳髓も、凡てが矛盾なく一致して、承知するから、妙だとか變だとかいふ疑の起る餘地が天で起らないのである。丁度葉裏に隠れる虫が、鳥の眼を晦ます爲めに青くなると一般で、虫自身はたとひ青くならうとも赤くならうとも、そんな事に頓着すべき所がない。かう變色するのが當り前だと心得てゐるのは無論である。たゞ不思議がるのは當の虫ではなくて、虫の研究者である、動物學者である。

マードツク先生の吾等日本人に對する態度は恰も動物學者が突然青く變化した虫に對すると同様の驚嘆である。維新前は殆んど歐洲の十四世紀頃のカルチユアーにしか達しなかつた國民が、急に過去五十年間に於て、二十世紀の西洋と比較すべき程度に發展したのを不思議がるのである。僅か五隻のペリー艦隊の前に爲す術を知らなかつた吾等が、日本海の時でトラファルガー以來の勝利を得たのに心を躍らすのである。

下

先生は此驚嘆の念より出立して、好奇心に移り、夫から又研究心に落ち付いて、此大部の著作を公けにするに至つたらしい。だから日本歴史全部のうちで尤も先生の心を刺戟したものは、日

吾等はたゞ二つの眼を有つてゐる。さうして其二つの眼は二つながら、晝夜ともに前を望んでゐる。さうして足の眼に及ばざるを恨みとして、あせり焦慮にあせつ焦慮で、汗を流したり呼吸を切らしたり

本人がどうして西洋と接觸し始めて、又其影響がどう働いて、黒船着後に至つて全局面の劇變を引き起したかと云ふ點にあつたものと見える。それを一通り調べてもまだ足らぬ所があるので、矢張り上代から漕ぎ出して、順次に根氣よく人文發展の流を下つて來ないと、此突如たる勃興の眞髓が納得出來ないと云ふ意味から、次に上代以後足利氏に至る迄を第一巻として發表されたものと思はれる。さうは斷つてないけれども、緒論を讀むと其邊の消息が多少窺はれる様な氣もする。

従つて緒論に現はれた先生は、出來得る限りの範圍に於て、吾等が最近五十年間の約變に對する説明を、簡條がきの如くに與へて居られる。其内には一寸吾等の思ひ設けぬ解釋さへある。西洋人が豫期せざる日本の文明に驚ろくのは、彼等が開化といふ觀念を誤まり傳へて、耶蘇教的カルチュアーと同意義のものでなければ、開化なる語を冠すべきものでないと自信してゐたからである。と云ふが如きは其一例である。西洋の開化と耶蘇教的カルチュアーと密切の關係のある事は誰でも知つてゐるが、耶蘇教的カルチュアーでなければ開化と云へないとは、普通の日本人に何うしても考へ得られない點である。けれども夫が西洋人一般の判斷だと、先生から注意されて見ると、成程と首肯せざるを得ない。斯う云ふ意味に於て、先生の著述は日本を外國に紹介する上に非常な利益がある許でなく、研究心に富んだ外國人が、吾等自身を如何に觀察してゐるかを知ら

る便宜も亦甚だ少なくないのである。

西洋の雜誌を見ると、日本に關した著述の廣告は、一週に一二冊は屹度出てゐる。近頃では是等の書籍を蒐集した丈でも優に相應の圖書館は一杯になるだらうと思はれる位である。けれども眞の觀察と、眞の努力と、眞の同情と、眞の研究から成つたものは極めて乏しいと斷言しても差支はあるまい。余は此乏しいものゝ一として、先生の歴史を吾等日本人に紹介する機會を得たのを愉快に思ふ。

歴史は過去を振返つた時始めて生れるものである。悲しいかな今の吾等は刻々に押し流されて、瞬時も一所に徘徊して、吾等が歩んで來た道を顧みる暇を有たない。吾等の過去は存在せざる過去の如くに、未來の爲に蹂躪せられつゝある。吾等は歴史を有せざる成り上りものゝ如くに、ただ前へ前へと押されて行く。財力、腦力、體力、道徳力、の非常に懸け隔たつた國民が、鼻と鼻とを突き合せた時、低い方は急に自己の過去を失つて仕舞ふ。過去などは何うでもよい、只此高いものと同程度にならなければ、わが現在の存在をも失ふに至るべしとの恐ろしさが彼等を眞向に壓迫するからである。

する。恐るべき神経衰弱はベストよりも劇しき病毒を社會に植付けつつある。夜番の爲に正宗の名刀と南蠻鐵の具足とを買ふべく餘儀なくせられたる家族は、澤庵の尻尾を嚙つて日夜齟齬するにも拘はらず、夜番の方では頻りに刀と具足の不足を訴へてゐる。吾等は渾身の氣力を擧げて、吾等が過去を破壊しつゝ、斃れる迄前進するのである。しかも吾等が斃れる時、吾等の烟突が西洋の烟突の如く盛んな烟りを吐き、吾等の汽車が西洋の汽車の如く廣い鐵軌を走り、吾等の資本が公債となつて西洋に流用せられ、吾等の研究と發明と精神事業が畏敬を以て西洋に迎へらるゝや否やは、どう己惚れても大いなる疑問である。マードック先生が吾等の現在に驚嘆して吾等の過去を研究されると同時に、吾等は吾等の現在から刻々に追ひ捲られて、吾等の未來を斯の如く悲觀してゐる。余は吾等の過去に對する先生の著書を紹介するの序を以て、吾等の運命に關しての未來觀をも一言先生に告げて置きたいと思ふ。

——四四、三、一六一—七——

博士問題の成行

二月二十一日に學位を辭退してから、二ヶ月近くの今日に至る迄、當局者と余とは何等の交渉もなく打過ぎた。所が四月十一日に至つて、余は圖らずも上田萬年、芳賀矢一二博士から好意的の訪問を受けた。二博士が余の意見を當局に傳へたる結果として、同日午後、余は又福原専門學務局長の來訪を受けた。局長は余に文部省の意志を告げ、余は又局長に余の所見を繰返して、相互の見解の相互に異なるを遺憾とする旨を述べ合つて別れた。

翌十二日に至つて、福原局長は文部省の意志を公けにするため、余に左の書翰を送つた。實は二ヶ月前に、余が局長に差出した辭退の申し出に對する返事なのである。

「復啓二月二十一日付を以て學位授與の儀御辭退相成度趣御申出相成候處已に發令済につき今更御辭退の途も無之候間御了知相成度大臣の命により別紙學位記御返付旁此段申進候敬具」

余も亦余の所見を公けにするため、翌十三日付を以て、下に掲ぐる書面を福原局長に致した。

「拜啓學位辭退の儀は既に發令後の申出にかゝる故、小生の希望通り取計らひかぬる旨の御返書を領し、再應の御答を致します。」

「小生は學位授與の御通知に接したる故に、辭退の儀を申し出たのであります。夫より以前に辭退する必要もなく、又辭退する能力もないものと御考へにならん事を希望致します。」

「學位令の解釋上、學位は辭退し得べしとの判斷を下すべき餘地あるにも拘はらず、毫も小生の意志を眼中に置く事なく、一圖に辭退し得ずと定められたる文部大臣に對し小生は不快の念を抱くものなる事を茲に言明致します。」

「文部大臣が文部大臣の意見として、小生を學位あるものと御認めになるのは已を得ぬ事とするも、小生は學位令の解釋上、小生の意思に逆つて、御受をする義務を有せざる事を茲に言明致します。」

「最後に小生は目下我邦に於る學問文藝の兩界に通ずる趨勢に鑒みて、現今の博士制度の功少くして弊多き事を信する一人なる事を茲に言明致します。」

「右大臣に御傳へを願ひます。學位記は再應御手許迄御返付致します。敬具」

要するに文部大臣は授與を取り消さぬと云ひ、余は辭退を取り消さぬと云ふ丈である。世間が余の辭退を認むるか、又は文部大臣の授與を認むるかは、世間の常識と、世間が學位令に向つて

施す解釋に依つて極まるのである。たゞし余は文部省の如何と、世間の如何とに拘らず、余自身を余の思ひ通に認むるの自由を有して居る。

余が進んで文部省に取消を求めざる限り、又文部省が余に意志の屈從を強ひざる限りは、此問題此より以上に纏まる筈がない。従つて落ち付かざる所に落ち着いて、歲月を此儘に流れて行くかも知れない。解決の出來ぬ様に解釋された一種の事件として統一家、徹底家の心を惱ます例となるかも知れない。

博士制度は學問獎勵の具として、政府から見れば有効に違ひない。けれども一國の學者を擧げて悉く博士たらんがために學問をすると云ふ様な氣風を養成したり、又は左様思はれる程にも極端な傾向を帯びて、學者が行動するのは、國家から見ても弊害の多いのは知れてゐる。余は博士制度を破壊しなければならんと迄は考へない。然し博士でなければ學者でない様に、世間を思はせる程博士に價値を賦與したならば、學問は少數の博士の專有物となつて、僅かな學者的貴族が、學權を掌握し盡すに至ると共に、選に洩れたる他は全く一般から閑却されるの結果として、厭ふべき弊害の續出せん事を余は切に憂ふるものである。余は此意味に於て佛蘭西にアカデミーのある事すらも快よく思つて居らぬ。

従つて余の博士を辭退したのは徹頭徹尾主義の問題である。此事件の成行を公けにすると共に、

余は此一句丈を最後に付け加へて置く。

— 四四、四、一五 —

文藝委員は何をするか

上

政府が官選文藝委員の名を發表するの日は近きにありと傳へられてゐる。何人が進んで其囑に應ずるかは余の知る限りでない。余はたゞ文壇のために一言して諸君子の一考を煩はしたいと思ふ丈である。

政府はある意味に於て國家を代表してゐる。少くとも國家を代表するかの如き顔をして萬事を振舞ふに足る位の権力家である。今政府の新設せんとする文藝院は、此點に於てまさしく國家的機關である。従つて文藝院の内容を構成する委員等は、普通文士の格を離れて、突然國家を代表すべき文藝家とならなければならない。しかも自家に固有なる作物と評論と見識との齎した價值によつて、國家を代表するのではない。實行上の権力に於て自己より遙に偉大なる政府と云ふものを背景に控へた御蔭で、忽ち魚が龍となるのである。自ら任ずる文藝家及び文學者諸君に取つ

ては、定めて大いなる苦痛であらうと思はれる。

諸君がもし、國家のためだから、此苦痛を甘んじて遣ると云はれるなら、まことに敬服である。其代り何處が國家の爲だか、明かに諸君の立脚地を吾等に誨へられる義務が出て来るだらうと考へる。

政府が國家的事業の一端として、保護奨励を文藝の上に與へんとするのは、文明の當局者として固より當然の考へである。けれども一文藝院を設けて優に其目的が達せられるやうに思ふならば、恰も果樹の栽培者が、肝心の土壤を問題外に閑却しながら、自分の氣に入つた枝丈に袋を被せて大事を懸ける小刀細工と一般である。文藝の發達は、その發達の對象として、文藝を歓迎し得る程度の社會の存在を假定しなければならぬのは無論の事で、其程度の社會を造り出す事が、即ち文藝を保護奨励しようとする政府の第一目的でなければならぬ事も亦知れ切つた話である。さうして夫は根の深い國民教育の結果として、始めて一般世間の表面に浮遊して来るより外に途のないものである。既に根本が此處で極まりさへすれば、他の設備は殆んど裝飾に過ぎない。

(其弊害を勘定に入れない時ですら)。余は政府が文藝保護の最急政策として、何故にまづ學校教育の遠き源から手を下さなかつたかを怪むのである。夫程大仕掛の手續を厭ふ位なら、序に文藝院を建てる手續をも厭つた方が經濟であると考へる。國家を代表するかの觀を裝ふ文藝委員なるものは、其性質上直接社會に向つて、以上の様な大勢力を振舞かねる團體だからである。

もし文藝院がより多く卑近なる目的を以て、文藝の產出家に對して、個々別々の便宜を、其作物上の評價に應じて、零細にかつ隨時に與へようとするならば、余は其效果の比較的少きに反して、其弊害の思つたよりも大いなる事を斷言するに憚らぬものである。

我々は自ら相應に鑑賞力のある文士と自任して、常住他の作物に對して、自己の正當と信ずる評價を公けにして憚らないのみか、藝術上に於て相互發展進歩の餘地は是より外にないと迄考へてゐる。けれども我々の批判は飽迄も我々一家の批判である。もし夫が一家の批判を超越する場合には、批判其物の性質として普遍ならざるべからざる權威を内に具へてゐるが爲で、云はゞ相手と熟議の結果から得た自然の勢力に過ぎない。我々の背後にはたゞ他より優秀なる鑑賞力と、他より超越せる判斷力があるのみで、單に是が爲にわが言辭にそれ相應の權威を生するのである。

此權威を最後最上の權威であれかしと冀ふのは、我々の欲望であつて、一般に通ずる事實ではない。之を事實にして呉れるものは、相手と公平なる三者である。苟くも二者の許諾を得ざるものは、どこ迄も一家の批判に過ぎない。夫が當然である。然るに一家の批判を以て任すべき文藝家もしくは文學家が、國家を代表する政府の威信の下に、突如として國家を代表する文藝家と化するの結果として、天下をして彼等の批判こそ最終最上の權威あるものとの誤解を抱かしむるの

は、其起因する所が文藝其物と何等の交渉なき政府の威力に本づくだけに、猶更の悪影響を一般社会——ことに文藝に志ざす青年——に與ふるものである。是を文藝の墮落と云ふのは通じる。保護と云ふに至つては其意味を知るに苦しまざるを得ない。

中

一家の批判を、一家として最後最上の批判と信するのには、何人も喙を容れやうがない。けれども夫をして比較的普遍ならしめんがため、——夫を世間に通用する事實と變化せしめんがために、文藝の鑑賞に縁もゆかりもない政府の力を藉りるのは卑怯の振舞である。自己の所信を客観化して公衆にしか認めしむべき根據を有せざる時に於てすら、彼等は自由に天下を欺くの權利をあらかじめ占有するからである。

弊害は是許りではない。既に文藝委員が政府の威力を背景に置いて、個人的ならざるべからざる文藝上の批判を國家的に膨張して、自己の勢力を張るの具となすならば、政府は又文藝委員を文藝に關する最終の審判者の如く見立て、此機關を通して、尤も不愉快なる方法によつて、健全なる文藝の發達を計るとの漠然たる美名の下に、行政上に都合よき作物のみを奨励して、其他を壓迫するは見易き道理である。公平なる文藝の鑑賞家は自己の所謂健全と政府の所謂健全と一

致せざる多くの場合に於て、文藝院の設立を迷惑に思ふだらう。

是等の弊害を別にしても、文藝院の建設は依然として文藝の發達上效力がある、即ちある種類の好い作物は出るに違ないと主張する人があるかも知れない。余はさう云ふ人に向つて、たとひ日本に文藝院がなくつても好い作物は出るのだと云ひたい。嘗て文部省の展覽會の審査員の某氏に會つた時、日本の繪畫も近頃は大分上手になりましたと云つたら、其人は文部省の展覽會が出來てから大變好くなりましたと答へた。日本の繪畫の年々進歩するのは争ふべからざる事實ではあるが、其原因を某氏のやうに一概に文部省の展覽會に歸するのは間違つてゐる様に思はれる。果して日本の畫家があゝ位の刺激に挑撥されて人工的に向上したとすれば、彼等は文部省の御蔭で腕が上がると同時に、同じく文部省の御蔭で頭が下がつたので、一方から云ふと氣の毒な程不見識な集合體だと評しなければならぬ。

余が某氏の言に疑を挟むのは、自分に最も密接の關係のある文壇の近狀に徴して、決して左様ではあるまいとの自信があるからである。政府は今日迄わが文藝に對して何等の保護を與へてゐない。寧ろ干渉のみを事とした形迹がある。それにも拘はらず、わが文學は過去數年の間に著しい發展をした。余の見る所を以てすると、現今毎月刊行の文學雜誌に載る幾多の小説の大部分は、英國のキンゾー杯に續々現れてくる愚劣な小説よりも、何の位藝術的に書き流されてゐるか

分らない。既に此數年の間に斯程進歩の機運が熟するとしたなら、突然それを阻害する事情の起らない限りは、文藝院杯と云ふ不自然な機關の助けを藉りて無理に温室へ入れなくても、野生の儘で放つて置けば、此先順當に發展する丈である。我々文士から云つても、好い加減な選り好みをされた上に、生中なまなかもやし扱ひにされるのは難有いものではない。

現代の文士が述作の上に於て要求する所のものは、國家を代表する文藝委員諸君の注意や批判や評價だと思ふのは、政府の己惚である。それ等は皆各自おのづかに有つてゐる筈である。疑はしいときは、個人としての先輩や朋友やら、信用のある外國人の著はした書物やらに聽いて、自分の考へを纏めれば澤山である。現代の文士が述作の上に於て最も要求する所のものは夫等ではない。金である。比較的容易なる生活である。彼等は見苦しい程金に困つてゐる。所謂文壇の不振とは、文壇に提供せられたる作物の不振ではない。作物を買つてやる財囊の不振である。文士から云へば米糧の不振である。新設されべき文藝院が果して此不振の救済を急務として適當の仕事遣り出すならば、よし永久の必要はなしとした所で、刻下の困難を救ふ一時の方便上、文壇に縁の深い我々は折れ合つて無理にも賛成の意を表したいが、何うして夫を仕終しやうせるかの實行問題になると、余には全然見込が立たないのである。

下

近時のわが文壇は殆んど小説の文壇である。脚本と批評は之に次ぐべき重要な因數ファクターに相違ないが、分量から云つても、一般の注意を惹く點から云つても、遂に小説には及ばない。其小説に就て、斯道に關係ある我々の見逃し能はざる特殊の現象が毎月刊行の雑誌の上に著るしく現れて來た。それは全體の小説が藝術的作品として、或る水平に達しつゝあると云ふ事實である。又其水平が年々に高くなりつゝあると云ふ事實である。此二つの事實を左右の翼として、論理的に一段の交渉を前方に進めるならば、我々は局外者に向つて興趣ある一種の結論を提供する事が出来る。其結論とは斯うである。

わが小説界は偉大なる一二の天才を有する代りに、優劣のしかく懸隔せざる多數の天才(もしくはは人才)の集合努力によつて進歩しつゝある。

この傾向を首肯ひつゝ、文藝委員のすると云ふ選抜賞與の實際問題に向ふならば、公平にして眞に文界の前途を思ふものは、誰しも其事業に伴ふ危険と困難とを感すべき筈である。左迄優劣の階段を設くる必要な作品に對して、國家的代表者の權威と自信とを以て、敢て上下の等級を天下に宣告して憚らざるさへあるに、文明の趨勢と教化の均霑とより來る集合團體の努力を無視

して、全部に與ふべき筈の報酬を、強ひて個人の頭上に落さんとするは、殆んど惡意ある取捨と一般の行爲だからである。

好悪は人々の隨意である。好悪より生ずる物品金錢の贈與も亦人々の隨意である。英國の王家が月桂詩人の稱號をスキンパーンに與へないで、オースチンに年々二三百磅の恩給を贈るのは、單に王家が此詩人に對する好悪の表現と見れば夫迄である。けれども國家の與ふべき報酬は、一錢一厘たりとも好悪によつて支配さるべきではない。必ず優劣によつて決せらるべきである。しかも其優劣が判然と公衆の眼に映らなければならぬ。此必要條件を具備しない國家的保護と獎勵とは無きに優ると寛假するよりも、寧ろ有に劣る（若し左様いふ言葉が意味をなすならば）と非難する方が當然である。

作物の現状と文士の窮狀とは既に上説の如くであつて、茲に保護の爲に使用すべき金が若干でもあるとすれば、それを分配すべき比較的無難な方法はたゞ一つある丈である。余は毎月刊行の雑誌に掲載される凡ての小説とは云はない積であるが、其大部分、即ち或る水平以上に達したる作物に對しては此保護金なり獎勵金なりを平等に割り宛て、當分原稿料の不足を補ふ様にしたなら可からうと思ふ。固より各人に割り宛てれば僅かなものに違ないけれども、一つの短篇に就て、三十圓乃至五十圓位な賞與を受ける事が出來たなら、賞與に伴ふ名譽杯は何うでも可いとして、

實際の生活上に多少の便宜はある事と信ぜられるからである。斯うすれば雑誌の編輯者とか購買者とかには丸で影響を及ぼさずに、たゞ雑誌を飾る作家丈が寛容く利益のある事だから、一雑誌に載る小説の數が無暗に殖える氣遣はない。尤も自分で書いて自分で雑誌を出す道樂な文士は多少増かも知れないが、それは實施の上になつて見なければ分らない。

余は以上の如く根本に於て文藝院の設置に反對を唱ふるものであるが、もし保護金の使用法に就て、幸ひにも文藝委員が此公平なる手段を講ずるならば、其局部に對しては大に贊成の意を表するに吝かならざる積である。其他の企畫に就ても悉く非難する必要は無論認めない。けれども大體の筋から云つて、凡て是等は政府から獨立した文藝組合又は作家團と云ふ様な組織の下に案出され、又其組織の下に行政者と協商されべきである。惜いかな今の日本の文藝家は、時間から云つても、金錢から云つても、又精神から云つても、同類保存の途を講ずる餘裕さへ持ち得ぬ程に貧弱なる孤立者又はイゴイストの寄合である。自己の劃したる檻内に咆哮して、互に噛み合ふ術は心得て居る。一步でも檻外に向つて社會的に同類全體の地位を高めやうとは考へてゐない。互を輕蔑した文字を恬として六號活字に並立てたり拵して、故さらに自分等が社會から輕蔑される様な地盤を固めつゝ澄まし返つてゐる有様である。日本の文藝家が作家俱樂部と云ふ程の單純な組織すらも構成し得ない卑力な徒である事を思へば、政府の計畫した文藝院の優に成立する

のも無理はないかも知れぬ。

— 四四、五、一八一—

田中王堂氏の「書齋より街頭へ」

日本語としては珍しい書名である。書齋より街頭へ打つて出るの意だと王堂氏自身が註釋を施してゐる。學者の見識を書齋に蓄へて、志士の功名を街頭に樹てようとするのが、氏の希望ださうである。賛成である。

たゞ氏の説く所の三分の二は、人事現象の空間的辯明に過ぎないのは如何なるものであらう。たとへば政府とは斯う、個人とは斯う、理想とは斯う、道德とは斯う、と一々彼等に割り宛てられた社會上又は心理上の役目を、一場内に陳列して、相互の關係やら、其物の特色やらを鄭重に指摘する丈に止まつてゐる。従つて讀者の是等の講釋より得る知識は辨別上の知識である。大いなる概念である。人間活力の種々なる表現に就ての長い定義である。尤も此方面に於て、氏の眼界は中々に廣いのみならず、氏の分類には立派な見識が一貫してゐるには相違ないが、夫は氏が書齋の人として尤も得意な方面を發揮した丈で、實行の人、街頭へ打つて出た志士としての價値

とは何等の交渉もない。單に書齋の研究を以て世に問ふと云はずして別に社會的使命を帯ぶる著述と宣言する以上は、單なる學識を標榜する丈では濟むまい。其學識が必然社會的に齎らし得る實際上の効果を豫想するに足る要素を胚胎して居なくてはなるまい。必ずや純粹の理學でなくて理學の應用である工學を孕むべき筈であらう。理想とか、道徳とか、知覺とか、概念とか云ふものを空間的に排列して順序を整へた丈では不可いまい。此整つた隊伍を勇ましく繰出して、實世間に一戦ひたをしなければなるまい。王堂氏の陣立は成程立派であるが、たゞ兵隊が規律正しく並んでゐる丈で、それが別段の働きもせず、徒らに奇麗にして且無用なる長物とのみ見える場合が多い様に見受けられるのは甚だ残念である。空間的に排列された計りで、時間的に動かない兵隊が裝飾に過ぎないのは云ふ迄もあるまい。

王堂氏の論文の過半は辯難攻撃の聲で充滿してゐる。辯難攻撃は他の立場を否定するのを根本の能事とするものだから、美しく成功した時ですら、其効果は消極的に過ぎない。惜しいかな王堂氏は十字街頭に立つて汝等斯くすべし、斯くせざるべからずと積極的に呼號し得る底の特殊なる何物をも把持して居らぬやに見受けられる。王堂氏はわれ生活の定義を下して剴切なり、道徳の動力ダイナミクスを論じて肯綮を得たり、理想を説いて自然派の蒙を啓けり、是等は皆われに積極的の或物ある證據にあらずやと詰問されるかも知れない。御尤もである。余と雖も王堂氏が積極的の見

解に富んで居られる事は疑はない。しかも其見解の豪邁にして精緻なる事を優に認むるものである。たゞ積極的の見解を山程積み重ねても、吾々の現代生活中に原動力を與ふる積極的の方針とも活作用とも變ずる術のないのを悲しむのである。氏の論文の間口の非常に廣大なのに驚いて、這入つて見ると、存外奥行が詰つてゐる感じがしたり、又は全くの吹き抜けで何處で建物が盡きてゐるのか分らない氣持がするのは、要するに是が爲だらうと思ふ。氏が余の「文藝の哲學的基礎」を評せらるゝに百六十六頁を費されたるは、余の深く光榮とする所で、氏の學界に貢獻せんとする意氣も目醒しきものではあるが、うんと踏まへられた余に、何うもうんと踏まへられた様な氣が起らないのが缺點である。氏の論鋒は、恰も區役所の戸籍掛りが、出産届に對して、出産の事實を不問に付しながら、たゞ其書式の法に叶はない事丈をくどく長く主張して、いつ迄も届書を受取らない様な觀がある。

けれども今の見すばらしき批評界に在つて、是程時間と努力と精神と學問と見識を惜まずに、堂々と觀兵の偉典を擧げ得るものはたゞ一の王堂學人あるのみであらう。表へ仁丹を買ひに出る準備として、先づ鐵の草鞋を誂へるのは、一寸異様ではあるが、外の人はそんな用意をする金も時もないからの苦がりから、只着のみ着の儘で飛んで出るのだと思へば、王堂學人の方が遙に餘裕のある大人學者である。随つて王堂學人は随分自尊卑他の言語を極端まで使用されるけれども、

丁度大名が町人を呼び捨にすると同じ事で、時として滑稽に響くかも知れないが、少しも陋劣の調を傳へない。余は余の敬愛する王堂學人のために特に此美點を指摘して、此書を世間に薦むるものである。王堂學人の武器を以て、王堂學人の著述を學究的に批評する事が、わが文藝欄の性質上出来悪かつたのは返すく遺憾であるが、夫は已を得ないのだからさう御承知を願ひたい。

——四四、五、二三——

坪内博士とハムレット

上

一週日にわたる「ハムレット」の公演は文壇最近の出来事として藝術に關係ある多數のもの、興味を惹き起した新らしい色彩である。余も招待を受けて、觀に行つた。一寸した差支のため、後れて席に着いたのみならず早く席を立つたから、全部の連続した光景が、眼にも耳にも展開的に收まらなかつたのは遺憾であるけれども、長い巻物の中間文は慥かに鮮明に切り抜いて宅へ持つて歸つた。其印象の中には坪内博士にも登場の諸君にも面と向つては云ひ悪い所が大分あるので、少なくとも公演中とは差控えてゐた。今これを公けにするのは、博士の熱心と諸君の努力に對する余の敬意に、誠實なる内容を與へんとする心苦しき試みに過ぎない。

根本的に云ふと、「ハムレット」は英國で出来たもの、三百年も昔に成つたもの、無韻ではあるが一行五疊の律から割り出した所謂blank verseで書き綴られたもの——既に外面的にも是程

の特色を具へてゐる以上は、今日の日本に生れた我々の此劇に對する態度が、鑑賞的であるべきか、はた批評的であるべきかは讀まぬ前から略極まるべき筈である。と云ふ意味は、「ハムレット」と我々が必ずびたりと一致すべきものとの迷信に近い信念を以て讀み始めるよりは、寧ろ我々は我々として何處迄「ハムレット」に引つ張つて行かれ得るだらうかと云ふ批判的態度で、研究に取り掛らなければなるまいと論定したのである。

これを事實に訴へれば、余の意味は更に一倍の光度を高め得るかも知れない。あの一週間の公演の間に來た何千かの觀客に向つて、自分が舞臺の裡に吸收せられる程我を忘れて面白く見物して來たかと聞いたなら、左様と斷言し得るものは恐らく一人もなからうと思ふ。夫程劇と彼等の間には興味の間隔があつたのだと余は憚りなく信じてゐる。

それでは其間隔を説明しろと坪内博士が云はれるなら、余は英國が劇と我等の間に挟まつてゐると答へたい。三百年の月日が挟まつてゐると答へたい。使ひ慣れない詩的な言葉がのべつに挟まつてゐるとも答へたい。要するに沙翁と云ふ一人の男が間へ立つて、凡て鑑賞の邪魔をしてゐるのだと憚なく云ひ切りたい。我等と劇の間に寸分の隙間なく、二つがびたりと合ふならば、其劇に英國だの、三百年の昔だの、詩的な言葉だのと云ふ面倒な形容詞は要らぬ筈である。「ハムレット」はたゞの「ハムレット」で充分通用しなければならぬ筈である。

坪内博士の譯は忠實の模範とも評すべき鄭重なものと思つた。あれだけの骨折は實際翻譯で苦しんだ經驗のあるものでなければ、殆んど想像するさへ困難である。余は此點に於て深く博士の勞力に推服する。けれども、博士が沙翁に對して餘りに忠實ならんと試みられたがため、遂に我等觀客に對して不忠實になられたのを深く遺憾に思ふのである。我等の心理上又習慣上要求する言語は一つも採用の榮を得ずして、片言隻句の末に至るまで、悉く沙翁の云ふが儘に無理な日本語を製造された結果として、此矛盾に陥たのは如何にも氣の毒に堪へない。沙翁劇は其劇の根本性質として、日本語の翻譯を許さぬものである。其翻譯を敢てするのは、これを敢てすると同時に、我等日本人を見棄たも同様である。翻譯は差支ないが、其翻譯を演じて、我等日本人に藝術上の満足を與へやうとするならば、葡萄酒を正宗と交換したから甘黨でも飲めない事はなからうと主張すると等しき不條理を犯すことになる。博士はたゞ忠實なる沙翁の翻譯者として任ずる代りに、公演を斷念するか、又は公演を遂行するために、不忠實なる沙翁の翻案者となるか、二つのうち一つを選ぶべきであつた。

下

沙翁の作物が自然の鏡に映る明かなる影の如くに無理のないものと、一概に西洋人のいふ通

が、趣味の程度に於て稚^ちないのだと云はれるかも知れない。余は特に其所を辯じて置きたいのである。

余の経験に訴へると、沙翁の建立したと云ふ詩國は、歐洲の評家が一致する如くに、しかく普遍な性質を帯びてゐるものではない。我等が相應にこれを味はひ得るのは、年來修養の結果として、順應の境地を意識的に把握した半ば有意の鑑賞である。縁の遠い所になると依然として我等と沙翁との間には何等の血も脈も共通に搏つてはゐない。其上我等は字面に徬徨して、其内部に潜在する情味を掬しながら徐々と進行するものである。單なる俳句の如きですら詩と名のつく以上は廣告を讀み流す勢で進行しては頭も情緒も字義に伴ふ餘裕を見出し得ないのは經驗の教へる所である。況して本來から己れを異境の土に移しての鑑賞に、日常談話の速力は、汽車で箱根を馳け抜けるよりも無理な見物である。今の普通教育を受けた英人にすら沙翁の言葉は舞臺の文句としては餘りに詩的で、殆んど意義を構成してゐない所が多い。もし此不足を補ふにアクセントの特別な組織から生ずる朗詠吟誦の調子に伴つて起る快感を以てしなかつたら、彼等は殆んど長時間の席に堪へないだらうと思ふ。沙翁は詩人である、詩人の言葉は常識以上の天地を馳け回つてゐる、と許した以上、之を口にすることも亦常識以上の調子で観客を釣り込む魔力と覺悟とを具へなければならぬ。要するに沙翁劇のセリフは能とか謡とかの様な別格の音調によつて初め

りを眞^{まこと}に受けて、自己の味覺をわざと客位に置いては、我々の不見識になるばかりか、現に御互の損である。沙翁を寫實の泰斗の様に云ひ觸らすのは眞^{まこと}でもあるが又大いなる嘘でもあると余は主張したい位に思つてゐる。成程喜怒哀樂の因果的に流露する段落關係には普通の趣を具へてゐるかも知れないが、其喜怒哀樂の中に盛られる表現には寄り付けない程に不自然で且突飛なものがある。今日の日本人は無論、今日の英國人も無論、當時エリザベス朝の人間と雖も決してこんな思想を意志疏通の道具として用ひはしなかつたらうと考へられる。

此不自然で突飛な、我々とは尤も人間的交渉の少ない思想が、即ち沙翁の詩想なので、平凡と常套を脱した普通以上の別世界に行はるべき巧みなる表現なのだと云ふ事實に氣が付くならば、所謂沙翁劇なるものは、普遍なる脚色の波瀾から観客に刺戟を興へる外に、一種獨特の詩國を建立して、其詩國の市民でなければ到底これを享樂する權利を有して居らぬと規定された六づかしい條件付の芝居であると云ふ事が解るだらう。

従つて日常の人間としても猶且つ鑑賞の餘地ある脚色にのみ追伴して、同時に一方の條件を充たす事を忘れたもの、又は充たすに意なきものには、一種云ふべからざる不徹底な齒痒さと、片付ける事の出来ない矛盾の苦痛を興へざるを得ない。我等は全く之が爲に惱まされたのである。けれども坪内博士と登場の諸君は、夫程詩的な表現を恣にする沙翁に跟いて來得ない我等の方

て、興味を支持されべきであると極めて懸らなければならぬ。こゝに注意を拂はないで、「晴嵐梢を吹き拂つて」と云ふ様な言葉を、「おい一寸来てくれ」と云ふ日常の調子で遣つては、雙方共崩れに終る丈である。

西洋でも沙翁劇は今猶屢演ぜられる。其都度評家の苦情は、今の役者が詩を理解しないで、普通の散文と選ぶ所なく口から出任せに遣つて退けるから、折角の美くしいものを臺なしに打ち壊して仕舞ふと云ふにある。既に音律の整つた原詩に對してすら斯う云ふ非難がある。坪内博士の「ハムレット」は寫實を遠かる埋合せとして沙翁の興へたる詩美を、單に聲調の上に於てすら再演する事が出来なかつたため、我々は高雅な幻境に誘はれる心持に幾分でもなり得ず、又普通の人間を舞臺の上に見る様な切實な面白味を味はひ得なかつたのである。

——四四、六、五一六——

學者と名譽

木村項の發見者木村博士の名は驚くべき速力を以て旬日を出ないうちに日本全國に廣がつた。博士の功績を表彰した學士會院と其表彰を飽迄緊張して報道する事を忘れなかつた都下の各新聞は、久し振りにと云はんよりは寧ろ初めて、純粹の科學者に對して、政客、軍人、及び實業家に譲らぬ注意を一般社會から要求した。學問のためにも賀すべき事で、博士の爲にも喜ばしき事に違ない。

けれども今より一ヶ月前に、此木村博士が何處に何をしてゐるかを知つてゐたものは、全國を通じて僅か百人を出ぬ位であつたらう。博士が忽然と著名になつたのは、今迄丸で人の眼に觸れないで経過した科學界といふ暗黒な人世の象面に、一點急に輝やく場所が出来たと同じ事である。其所が明るくなつたのは仕合せである。然し其所が明るくなつたのは不都合である。

一般の社會はつい二三週間前迄博士の存在に就て全く神經を使はなかつた。一般の社會は今日

と雖科學といふ世界の存在に就ては殆んど不關心に打ち過ぎつゝある。彼等から見て闇に等しい科學界が、一樣の程度で彼等の眼に暗く映る間は、彼等が根柢ある人生の活力の或物に對して公平に無感覺であつたと非難される丈で済むが、苟しくも此暗い中の一點が木村項の名で輝やき渡る以上、又他が依然として暗がりに靜まり返る以上、彼等が今迄所有してゐた公平の無感覺は、俄然として不公平な感覺と變性しなければならぬ。是迄はたゞ無知で済んでゐたのである。それが急に不徳義に轉換するのである。問題は單に智愚を昇さかする理性一遍の塔を乗り越えて、道義の圏内に落ち込んで來るのである。

木村項だけが炳として俗人の眸を燒くに至つた變化につれて、木村項の周圍にある暗黒面は依然として、木村項の知られざる前と同じ様に人から其存在を忘れられるならば、日本の科學は木村博士一人の科學で、他の物理學者、數學者、化學者、乃至動植物學者に至つては、單位をすら充たす事の出來ない出來損なひでなければならぬ。貧弱なる日本ではあるが、余には是程迄に愚圖が揃つて科學を研究してゐると思へない。其方面の知識に疎い寡聞なる余の頭にさへ、此斷見を否定すべき材料は充分あると思ふ。

社會は今迄科學界をたゞ漫然と暗く眺めてゐた。さうして其科學界を組織する學者の研究と發見とに對しては、其比較的價值所どころか、全く自家の着衣喫飯と交渉のない徒事いたづらごとの如く見做して來た。

さうして學士會院の表彰に驚ろいて、急に木村氏をえらく吹聴し始めた。吹聴の程度が木村氏の偉たさと比例するとしても、木村氏と他の學者とを合せて、一樣に坑中に葬り去つた一ヶ月前の無知なる公平は、全然破れて仕舞つた譯になる。一旦木村博士を賞揚するならば、木村博士の功績に應じて、他の學者も亦適當の名譽を荷ふのが正當であるのに、他の學者は木村博士の表彰前と同じ暗黒な平面に取り殘されて、たゞ一の木村博士のみが、今日迄學者間に維持せられた比較的位地を飛び離れて、衆目の前に獨り偉大に見える様になつたのは少なくとも道義的の不公平を敢てして、一般の社會に妙な誤解を與ふる好意的な惡結果である。

社會はたゞ新聞紙の記事を信じてゐる。新聞紙はたゞ學士會院の所置を信じてゐる。學士會院は固より己れを信じてゐるのだらう。余と雖ども木村項の名譽ある發見たるを疑ふものではない。けれども學士會院が其發見者に比較的の位置を與へる工夫を講じないで、徒らに表彰の儀式を祭典の如く見せしむるため被賞者に絶對の優越權を與へるかの如き舉に出でたのは、思慮の周密と辨別の細緻を標榜する學者の所置としては、余の提供にかゝる不公平の非難を甘んじて受ける資格があると思ふ。

學士會院が榮譽ある多數の學者中より今年はまづ木村氏丈を選んで、他は年々順次に表彰すると云ふ意を當初から持つてゐるのだと辯解するならば、木村氏を表彰すると同時に、其主意が一

般に知れ渡るやうに取り計ふのが學者の用意と云ふものであらう。木村氏が五百圓の賞金と直径三寸大の賞牌に相當するのに、他の學者はたゞの一錢の賞金にも直径一分の賞牌にも値せぬやうに俗衆に思はせるのは、木村氏の功績を表するがために、他の學者に屈辱を與へたと同じ事に歸着する。

——四四、七、一四——

道樂と職業

——明治四十四年八月明石に於て述——

唯今は牧君の滿洲問題——滿洲の過去と滿洲の未來といふやうな問題に就いて、大變條理の明かな、さうして秩序のよい演説がありました。そこで牧君の披露に依ると、其のあとへ出る私は一段と面白い話をするといふやうになつて居るが、なか／＼牧君のやうに旨く出来ませぬ。殊に秩序が無からうと思ふ。唯今本社の人が明日の新聞に出すんだから、講演の梗概を二十行ばかりにつゞめて書けといふ注文でしたが、それは書けないと言つて斷つた位です。それぢやア饒舌らないかといふと、現に斯うやつて饒舌りつゝある。饒舌る事はあるのですが、秩序とか何とか云ふ事が、ハツキリ句切りが附いて頭に疊み込んでありませぬから、或は前後したり、混雜したり、いろ／＼お聴きにくい所があるだらうと思ひます。殊にあなた方の頭も大分勞れておいでせうから、先づ成るべく短かく申さうと思ふ。

私の申すのは少しもむづかしいことではありません。滿洲とか安南とかいふ對外問題とは違つ

て極やさしい「道樂と職業」といふ至極簡單なみだしです。内容も従つて簡單なものであります。まあそれを一寸僅かばかり御話をしやうと思ふ。

元來こんな所へ来て講演をしやうなどは全く思ひもよらぬことでありましたが、「是非出て来い」と斯ういふ譯で、それでは何か問題を考へなければならぬから其問題を考へる時間を與へて呉れと言ひましたら、社の方では宜しいと云つて相應の日子を與へて呉れました。ですから考へて来ないといふことも言へず、出て来ないといふことも無論言へず、それでとう／＼此所へ現はれる事になりました。けれども明石といふ所は、海水浴をやる土地とは知つて居ましたが、演説をやる所とは、昨夜到着するまでも知りませんでした。どうしてあゝいふ所で講演會を開く積りか、一寸其の意を得るに苦しんだ位であります。ところが来て見ると非常に大きな建物があつて、彼處で講演をやるのだと人から教へられて始めて尤もだと思ひました。成程あれ程の建物を造れば其中で講演をする人を何處からか呼ばなければ所謂寶の特腐れになる許でありませう。従つて西日がカン／＼照つて暑くはあるが、折角の建物に對しても、あなた方は来て見る必要があり、又我々は講演をする義務があるとしても言はうか、まアあるものとして此壇上に立つた譯である。

そこで「道樂と職業」といふ題。道樂と云ひますと、悪い意味に取るとお酒を飲んだり、又は何か花柳社會へ入つたりする、俗に道樂息子と云ひますね、あゝいふ息子のする仕業、それを形容して道樂といふ。けれども私の此處で云ふ道樂は、そんな狭い意味で使ふのではない、もう少し廣く應用の利く道樂である。善い意味、善い意味の道樂といふ字が使へるか使へないか、それは知りませぬが、段々話して行く中うちに分るだらうと思ふ。若し使へなかつたら悪い意味にすればそれで宜いのであります。

道樂と職業、一方に道樂といふ字を置いて、一方に職業といふ字を置いたのは、丁度東と西といふやうなもので、南北或は水火、つまり道樂と職業が相闘ふ所を話さうと、斯ういふ譯である。即ち道樂と職業といふものは、どういふやうに關係して、どういふやうに食ひ違つて居るかといふことを先づ話して——尤も其の道樂も職業も、既に御承知のあなた方にさういふ事を言ふ必要もなし、私も強ひてやりたくはないが、併し前申した様な譯でわざ／＼出て来たものだから、そこはあなた方に既に御分りになつて居る程度以上に、一步でももう少し明かに分らせることが、私の力で出来れば夫で私の役目は済んだものと内々高を括つてゐるのであります。

夫で我々は一口によく職業と云ひますが、私此の間も人に話したのですが、日本に今職業が何種類あつて、それが昔に比べてどの位の數に殖えて居るかといふことを知つて居る人は、恐らく無いだらうと思ふ。現今の世の中では職業の數は煩雜になつて居る。私は曾て大學に職業學とい

ふ講座を設けてはどうかといふことを考へた事がある。建議しやませぬが、唯考へたことがあるのです。何故だといふと、多くの學生が大學を出る。最高等の教育の府を出る。勿論天下の秀才が出るものと假定しまして、さうして其の秀才が出てから何をして居るかといふと、何か糊口の口がないか何か生活の手蔓はないかと朝から晩迄捜して歩いて居る。天下の秀才を何かないか何かないかと血眼にさせて遊ばせて置くのは不經濟の話で、一日遊ばせて置けば一日の損である。二日遊ばせて置けば二日の損である。殊に昨今の様に米價の高い時は尙更の損である。一日も早く職業を興へれば、父兄も安心するし當人も安心する。國家社會も夫丈利益を受ける。それで四方八方良いことだらけになるのであるけれども、其秀才が夢中に奔走して、汗をダラ／＼垂らしながら捜して居るにも拘はらず、所謂職業といふものが餘り無い様です。餘り所かなか／＼無い。今言ふ通り天下に職業の種類が何百種何千種あるか分らない位分布配列されてゐるに拘らず、何處へでも融通が利くべき筈の秀才が懸命に馳け廻つてゐるにも拘らず、自分の生命を託すべき職業がなか／＼無い。三箇月も四箇月も遊んで居る人があるので是は氣の毒だと思ふと、豈計らんや既に一年も二年もボンヤリして下宿に入つて爲すこともなく暮して居るものがある。現に私の知つてゐる者のうちで、一年以上も下宿に立て籠つて、未だに下宿料を一文も拂はないで茫然としてゐる男がある。尤も下宿の方でも信用して居るから貸して置越し、當人もどうかなるだらう

と思つて安心はして居るらしいが國家の經濟からいふと随分馬鹿氣た話であります。私も多少知つて居る間柄だから氣の毒に思つて、職業は無いか職業は無いか位人に尋ねて見るが、何處にもさう云ふ口が轉がつてゐないので残念ながらまだ其儘になつてゐます。けれども今言ふ通り職業の種類が何百通りもあるのだから、理窟から云へば何處かへ打付かつて然るべき筈だと思ふのです。丁度嫁を貰ふやうなもので自分の嫁は何處かにあるに極つてゐるし、又向ふでも捜して居るのは明らか話ですが、つい旨く行かないと何時迄も結婚が後れて仕舞ふ。それと同じでいくら秀才でも職業に打付かなければ仕様がなないのでせう。だから大學に職業學といふ講座があつて、職業は學理的にどういふやうに發展するものである。又どういふ時世にはどんな職業が自然の進化の原則として出て来るものである。と一々明細に説明してやつて、例へば東京市の地圖が牛込區とか小石川區とか何區とかハッキリ分つてるやうに、職業の分化發展の意味も區域も盛衰も一目の下に瞭然會得出来るやうな仕掛にして、さうして自分の好きな所へ飛び込ましたら洵に便利ぢやないかと思ふ。まあ是は空想です。實際やつて見ないから分らぬが、恐らく出來ますまい。出來たら宜からうと思ふ丈です。非常に經濟なことにはなるでせう。

斯んな考を起す程に私は今の日本に職業が非常に澤山あるし、又其職業が混亂錯雜してゐる様に思ふのです。現に此の間も往來を通つたら妙な商賣がありました。それは家とか土藏とかを引

來たのださうです。鼠のいたづらもので人間のいたづらものではないといふのでやつと安心した位のものである。そんな妙な商賣は近頃頓と無くなりましたが、締括つた總體の高から云へば、どうも今日の方が職業といふものは餘程多いだらうと思ふ。單に職業に變化があるばかりでなく、細くなつて居る。現に唐物屋といふものは此間迄何でも賣つて居た。襟とか襟飾りとか或はズボン下、靴足袋、傘、靴、大抵なものがありません。身體へ附ける一切の舶來品を賣つて居たと云つても差支ない。所が近頃になるとそれが變つてシャツ屋はシャツ屋の専門が出来る、傘屋は傘屋、靴屋は靴屋とちやんと分れて仕舞ました。靴足袋屋……是はまだ専門は出来ないやうだが、今に出来るだらうと思ひます。現に日本の足袋屋は専門になつてゐます。十文のを呉れと云へば十文のを呉れる、十一文のを呉れろと云へば十一文のを呉れる。私が演説を頼まれて即席に引受けないのは、足袋屋みたいに一寸出来合ひがないからです。どうか十文の講演をやつて呉れ、彼處は十一文甲高の講演でなければ困る杯と注文される。其の位に私が演説の専門家になつて居れば譯はありませんが私の御手際は夫程専門的に發達してゐない。素人が義理に東京から態々明石邊までやつて來るといふ位の話でありますから、なか／＼さう旨くはいきませぬ。足袋屋は借置いて食物屋の方でもチャンとした専門家があります。例へば牛肉も鳥の肉も食はせる所があるかと思ふと、牛肉ばかりの家があるし、又鳥の肉でなければ食はせないといふ家もある。或はそれ

きずつて行くといふ商賣なんだから私は驚いたのであります。此の公會堂を此の儘他の場所へ持つて行くといふ商賣です。いくら東京に市區改正が激しく行はれたつて、さう毎年建てたばかりの家の位置を動かさなければならぬといふやうに變化して居やアしない。現に私の家などは建つた時から今日まで市區改正に掛らずに居る。餘程邊鄙な所にあるのだからでせう。けれども縦令繁華な所に居たつて、さう始終家を引ツ張ツてツて貰はなければならぬといふ人はない。然るにそれを専門に商賣にして居る者があるから、東京は廣いと思つたのです。馬琴の小説には耳の垢取り長官とか云ふ人がゐますが、他の耳垢を取る事を職業にでもしてゐたのでせうか。西洋には爪を綺麗に掃除したり恰好をよくするといふ商賣があります。近頃日本でも美顔術といつて顔の垢を吸出して見たり、クリームを塗抹して見たりいろ／＼の化粧をしてくれる専門家が出て來ましたが、あゝいふ商賣は恐らく昔はないのでせう。今日のやうに職業が芋の蔓見たやうに夫から夫へと延びて行つていろ／＼種類が殖えなければ、美顔術などといふ細かな商賣は存在が出来なからうと思ふ。尤も昔は却つて今にない商賣がありました。私の幼少の時は「柳の蟲や赤蛙」など、云つて賣りに來た。何にしたものか今はたゞ賣聲丈覺えてゐます。それから「いたづらものは居ないかな」と云つて、旗を擔いで往來を歩いて來たのもありました。子供の時分ですから其の聲を聞くと、ホラ來たと云つて逃げたものである。よく／＼聞いて見ると鼠取りの藥を賣りに

が一段細かくなつて家鴨あひだりより外に食はせない店もある。しまひには鳥の爪だけ食はせる所とか牛

の肝臓だけ料理する家が出来るかも知れない。分れて行けば何處まで行くか分りません。こんな
に劇しい世間だから仕舞ひには大變なことになるだらうと思ふ。兎に角職業は開化が進むにつれ
て非常に多くなつて居ることが驚くばかり眼につくやうです。所が是は當り前のことで學問の研
究の上から世の中の變化とでも云ひませうか、漠然たる社會の傾向とでも云ひませうか、必然の
勢さういふ様に割れて細かになつて來るのであります。是は何も私の發明した事實でも何でもな
い、昔から人の言つて居ることでありませう。昔の職業といふものは大まかで、何でも含んで居る。
丁度田舎の呉服屋みたいに、反物を賣つて居るかと思ふと傘を賣つて居つたり油も賣るといふ、
何屋だか分らぬ萬事一切を賣る家といふやうなものであつたのが、段々専門的に傾いていろ／＼
に分れる末は殆ど想像が附かない所迄細かに延びて行くのが一般の有様と云つて差支ないでせう。
所で此事實をすつと想像に訴へて遠い過去に溯つたらどうなるでせう。或は想像でも測れない
かも知れないけれども、此事實の中うちに含まれてゐる論理の力で後ろの方へ逆行したらどんなもの
でせう。今言ふ通り昔は商賣といふものの數が少なかつた。職業の數が少なかつて、世間の人も
其僅かな商賣を以て満足して居つたといふ譯なのだから、或は傘を買ひに行つても傘がない、衣
物ものを買ひに行つても衣物ものがないといふ時代がないとも限らない。私は曾て熊本に居りましたが、

或る時灰吹を買ひに行つたことがある。所が灰吹はないと云ふ。熊本中何處を尋ねても無いかと
云つたら無いだらうと云ふ。ちや熊本では煙草を喫まないか痰を吐かないかといふと現に煙草を
喫んで居る。それでは灰吹はどうするんだと聞くと、裏の藪へ行つて竹を伐つて來て拵しらへるんだ
と教へて呉れました。裏の藪から伐つて來て、青竹の灰吹で間に合はして置けば宜いと思つてゐ
る所では灰吹は賣れない譯である。従つて賣つてゐる筈がないのである。さういふ風に自分で人
の厄介にならずに裏の藪へ行つて竹を伐つて灰吹を造る如く、人のお世話にならないで自分の身
の圍まりを成るべく多く足す、又足さなければならぬ時代があつたものでせう。諸其事實を極端
まで辿つて行くと、一切萬事自分の生活に關した事は衣食住とも如何なる方面にせよ人のお蔭を
被らないで、自分丈で用を辨じて居つた時期があり得るといふ推測になる。人間がたつた一人で
世の中に存在して居るといふことは、殆ど想像も出来ないかも知れないし、又其處まで論理を頼
りに推詰めて考へる必要もない話ですが、其處まで行かないと一寸講話にならないから、まあさ
うして置くのです。即ち誰のお世話にもならないで人間が存在してゐたといふ時代を思ひ浮べて
見る。例へば私が此の着物を自分で織つて、此の襟を自分で拵へて、總て自分だけで用を辨じて、
何も人のお世話にならないといふ時期があつたとする。又有つたとしても宜いでせう。さういふ
時期が何時かあつたらどうするといふ意味ではないが、まああると假定して御覽なさい。さうし

分に不足した所を人から自分に仕向けて貰つて相互の平均を保ちつゝ生活を持続するといふ事に歸着する譯であります。それを極むがましい形式に現はすといふと、自分の爲にする事は即ち人の爲にすることだと云ふ哲理をほめかした様な文句になる。是でもまだ一寸分らないなら、それをもつと數學的に言ひ現はしますと、己の爲にする仕事の分量は人の爲にする仕事の分量と同じであるといふ方程式が立つのであります。人の爲にする分量即ち己の爲にする分量であるから、人の爲にする分量が少なければ少ない程自分の爲にはならない結果を生ずるのは自然の理であります。之に反して人の爲になる仕事を餘計すればする程、それだけ己の爲になるのも亦明かな因縁であります。此關係を最も簡単に且明瞭に現はして居るのは金ですな。つまり私が月給を拾五圓なら拾五圓取ると、拾五圓方人の爲に盡して居るといふ譯で取りも直さず其拾五圓が私の人に對して爲し得る仕事の分量を示す符丁になつて居ます。拾五圓方人に對する勞力を費す、さうして拾五圓現金で入れれば即ち其拾五圓は己の爲になる拾五圓に過ぎない。同じ譯で人の爲に千圓の働きが出来れば、己の爲にも千圓使ふことが出来るのだから誠に結構なことで、諸君も成るべく精出して人の爲にお働きになればなる程、自分にも益々贅澤の出来る餘裕を御作りになると變りはないから、成る可く人の爲に働く分別をなさるが宜しからうと思ふ。

尤も自分の爲になると云つても爲になり方は色々ある。第一其の中から税杯を拂はなければな

たらさういふ時期こそ本當の獨立獨行といふ言葉の適當に使へる時期ぢやないでせうか。人から月給を貰ふ心配もなければ朝起きて人にお早うと言はなければ機嫌が悪いといふ苦勞もない。生活寸毫も人の厄介にならずに暮して行くのだから平氣なものである。人に些とも迷惑を掛けないうし、又人に聊かの恩義も受けなくて済むのだから、是れ程都合の好いことはない。さういふ人が本當の意味で獨立した人間と謂はなければならぬでせう。實際我々は時勢の必要上さうは行かない様なものゝ腹の中では人の世話にならないでどこ迄も一本立で遣つて行きたいと思つてゐるのだから詰りはこんな太古の人を一面には理想として生きてゐるのである。けれども事實已むを得ない、仕方がないから先づ衣物を着る時には呉服屋の厄介になり、お茶を拵へる時には豆腐屋の厄介になる。米も自分で搗くよりも人の搗いたのを買ふといふことになる。其の代りに自分は自分で米を搗き自分で着物を織ると同程度の或る専門的事を人に向つてしつゝあるといふ譯になる。私は未だ曾て衣物を織つたこともなければ、靴足袋を縫つたこともないけれども、自ら縫はぬ靴足袋、或は自ら織らぬ衣物の代りに、新聞へ下らぬ事を書くとか、或は斯ういふ所へ出て來てお話をするとかして埋合せを付けて居るのであります。私ばかりぢやない、誰でもさうです。すると此の一步専門的になるといふのは外の意味でも何でもなく、即ち自分の力に餘りある所、即ち人よりも自分が一段と拙んでゝ居る點に向つて人よりも仕事を一倍して、其の一倍の報酬に自

らない。税を出して人に月給をやつたり、巡査を雇つて置いたり、或は國務大臣を馬車に乗せてやつたりする。尤も一人ぢやア是丈の事は出来ませぬ、我々大勢で金を出してやるのですが、畢竟するにあの税杯も矢張自分の爲に出すのです。國務大臣が馬車や自動車に乗つて怪しからんと言つたつて夫は野暮の云ふ事です。我々が税を出して乗らして置いてやるので國務大臣の爲ぢやない、つまり己の爲だと思へば間違はない。だから時々自動車ぐらゐ借りに行つても宜からうと思ふ。税は其位にして此外己の爲にするものは衣食住と他の贅澤費になります。それを合算すると、つまり銀行の帳簿の様に収入と支出と平均します。即ち人の爲にする仕事の分量は取りも直さず己の爲にする仕事の分量といふ方程式がちやんと數字の上に現はれて参ります。尤も吝で蓄めて居る奴があるかも知れないが、是は例外である。例外であるが蓄めて居ればそれだけの勞力といふものを後へ繰越すのだから、矢張り同じ理窟になります。よく彼奴は遊んで居て憎らしいとか又はごろ／＼してゐて羨ましいとか金持の評判をする様ですが、抑も人間は遊んで居て食へる譯のものではない。遊んで居るやうに見えるのは懐にある金が働いて呉れて居るからのもので、其の金といふものは人の爲にする事なしにたゞ遊んで居て出来たものではない。親父が額に汗を出した記念だとか或は婆さんの臍繰だとか中には因縁付きの悪い金もありませうけれども、兎に角何等か人の爲にした符徴、人の爲にしてやつた其の報酬といふものが、つまり自分の金になつ

て、さうして自分は其のお蔭でもつて懐手をして遊んで居られるといふ譯でせう。職業の性質といふものはまあざつと斯んなものです。

そこでネ、人の爲にするといふ意味を間違へてはいけませんよ。人を教育するとか導くとか精神的に又道義的に働きかけて其人の爲になるといふ事だと解釋されると一寸困るのです。人の爲にといふのは、人の言ふが儘にとか、欲するが儘にといふ所謂卑俗の意味で、もつと手短かに述べれば人の御機嫌を取ればと云ふ位の事に過ぎんのです。人にお世辭を使へばと云ひ變へても差支ない位のものです。だから御覽なさい。世の中には徳義的に觀察すると随分怪しからぬと思ふやうな職業がありませう。しかも其の怪しからぬと思ふやうな職業を渡世にしてゐる奴は我々よりは餘程えらい生活をして居るのがあります。然し一面から云へば怪しからぬにせよ、道德問題として見れば不埒にもせよ、事實の上から云へば最も人の爲になることをして居るから、それが又最も己の爲になつて、最も贅澤を極めて居ると言はなければならぬのです。道德問題ぢやない、事實問題である。現に藝妓といふやうなものは、私は餘り關係しないからして精しいことは知らんけれども兎に角一流の藝妓とか何とかなると一寸指環を買ふのでも千圓とか五百圓といふ高價なものゝ中から撰取をして餘裕があるやうに見える。私は今茲にニツケルの時計しか持つて居らぬ。高尚な意味で云つたら藝妓よりも私の方が人の爲にする事が多くはないだらうかといふ疑も

一倍の仕事で済んだものが二倍三倍乃至四倍と段々速力を早めて逐付かなければならぬから、其の方だけに時間と根氣を費しがちであると同時に、お隣りの事や一軒置いたお隣りの事が皆目分らなくなつて仕舞ふのであります。斯ういふやうに人間が千筋も萬筋もある職業線の上のたゞ一線しか往來しないで済む様になり、又他の線へ移る餘裕がなくなるのはつまり吾人の社會的知識が狭く細く切り詰められるので、恰も自ら好んで不具になると同じ結果だから、大きく云へば現代の文明は完全な人間を日／＼片輪者に打崩しつゝ進むのだと評しても差支ないのであります。極の野蠻時代で人のお世話には全くならず、自分で身に纏ふものを捜し出し、自分で井戸を掘つて水を飲み、又自分で木の實か何かを拾つて食つて、不自由なく、不足なく、不足があるにしても苦しい顔もせず、我慢をして居れば、それこそ萬事人に待つ所なき點に於て、又生活上の知識を一切自分に備へたる點に於て完全な人間と云はなければなりません。所が今の社會では人のお世話にならないで、一人前に暮らして居るものは何所をどう尋ねたつて一人もない。此意味からして皆不完全なもの許である。のみならず自分の専門は、日に月に、年には無論のこと、たゞ狭く細くなつて行きさへすれば夫で済むのである。丁度針で掘抜井戸を作るとでも形容して然るべき有様になつて行くばかりです。何商賣を例に取つても説明は出来ませんが、此状態を最も能く證明して居るものは専門學者などだらうと思ひます。昔の學者は凡ての知識を自分一人で育

あるが、どうも藝妓ほど人の氣に入らない事も亦慥からしい。つまり藝妓は有徳な人だからあゝ云ふ贅澤が出来る、いくら學問があつても徳の無い人間、人に好かれない人間といふものは、ニツケルの時計ぐらゐ持つて我慢して居るより外仕方がないといふ結論に落ちて来る。だから私のいふ人の爲にするといふ意味は、一般の人の弱點嗜好に投ずると云ふ大きな意味で、小さい道徳——道徳は小さくありませぬが、先づ事實の一部分に過ぎないのだから小さいと云つても差支ないでせう。さう云ふ高尚ではあるが偏狹な意味で人の爲にするといふのではなく、天然の事實其ものを引きくるめて何でも蚊でも人に歓迎されるといふ意味の「爲にする」仕事を指したのであります。

そこで職業上に於る己のため人の爲と云ふ事は以上の様に御記憶を願つて置いて、話が又後戻りをする恐れがあるかも知れないが、前申した通り人文發達の順序として職業が大變割れて細くなる妙な結果を我々に與へるものだから其結果を一口御話をして、さうして先へ進みたいと思ひます。私の見る所によると職業の分化錯綜から我々の受ける影響は種々ありませうが、其内に見逃す事の出来ない一種妙な者があります。といふのは外でもないが開化の潮流が進めば進む程、又職業の性質が分れ、ば分れる程、我々は片輪な人間になつて仕舞ふといふ妙な現象が起るのであります。言ひ換へると自分の商賣が次第に専門的に傾いてくる上に、生存競争の爲に、人

て仕方がない、胡魔化されるのです。内情を御話すれば博士の研究の多くは針の先きで井戸を掘るやうな仕事をするので。深いことは深い。掘抜きだから深いことは深い、如何せん面積が非常に狭い。それを世間では凡ての方面に深い研究を積んだもの、全體の知識が萬遍なく行き渡つてゐると誤解して信用を置きすぎるのです。現に博士論文と云ふのを見ると存外細かな題目を捕へて、自分以外には興味もなければ知識もない様な事項を穿鑿してゐるのが大分あるらしく思はれます。所が世間に向つては唯醫學博士、文學博士、法學博士として通つてゐるから恰も總ての知識を有つて居るかの様に解釋される。あれは文部省が悪いのかも知れない。虎列刺病博士とか腸壁扶斯博士とか赤痢博士とかもつと判然と領分を明らかにした方が善くはないかと思ふ。肺病患者が赤痢の論文を出して博士になつた醫者の所へ行つたつて差支はないが、其人に博士たる名譽を與へたのは肺病とは没交渉の赤痢であつて見れば、單に博士の名で肺病を擔ぎ込んで勘違になるかも知れない。博士の事は其位にしてたゞ以上をかい撮んで云ふと、吾人は開化の潮流に押し流されて日に／＼不具になりつゝあるといふことだけは確かだせう。それを外の言葉でいふと自分一人では逆も生きて居られない人間になりつゝあるのである。自分の専門にして居ることに掛けては、不具的に非常に深いかも知れぬが、其の代り一般的の事物に就ては、大變に知識が缺乏した妙な變人ばかり出來つゝあるといふ意味です。

負つて立つた様に見えますが、今の學者は自分の研究以外には何も知らない私が前申した意味の不具が揃つてゐるのであります。私の様な者でも世間ではたまたま學者扱にして呉れますが、さうすると矢張り不具の一人であります。成程私などは不具に違ない、どうも些とも普通のことを知らない。區役所へ出す轉居届の書き方も分らなければ、地面を賣るにはどんな手續をしていゝかさへ分らない。綿は綿の木のどんな所をどうして拵へるかも知し得ない。玉子豆腐はどうして出來るか是亦不明である。食ふことは知つて居るが拵へる事は全く知らない。其他味淋にしる、醬油にしる、何にしる蚊にしる凡て知らないことだらけである。知識の上に於て非常な不具と云はなければなりません。けれども凡てを知らない代りに一ヶ所か二ヶ所人より知つて居ることがある。さうして生活の時間をたゞ其方面にばかり使つたものだから、完全な人間を益々遠ざかつて、實に突飛なものになり終つて仕舞ひました。私ばかりではない、かの博士とか何とか云ふものも同様であります。あなた方は博士と云ふと諸事萬端人間一切天地宇宙の事を皆知つて居るやうに思ふかも知れないが全く其反對で、實は不具の不具の最も不具な發達を遂げたものが博士になるのです。それだから私は博士を斷りました。併しあなた方は——手を叩いたつて駄目です。現に博士といふ名に胡魔化されて居るのだから駄目です。例へば明石なら明石に醫學博士が開業する、片方に醫學士があるとすると。さうすると醫學博士の方へ行くでせう。いくら手を叩いたつ

私は職業上己の爲とか人の爲とか云ふ言葉から出立して其先へ進む筈の所をツイわき道へそれて職業上の片輪といふ事を御話し、出したから、序に其片輪の所置について一言申上げて、又己の爲人の爲の本論に立ち歸りたい。順序の亂れるのは口に驅られる講演の常として御許しを願ひます。

そこで世の中では——ことに昔の道德觀や昔堅氣の親の意見や又は一般世間の信用などから云ひますと、あの人は家業に精を出す、感心だと云つて賞めそやします。所謂家業に精を出す感心な人といふのは取も直さず眞黒になつて働いて居る一般的の知識の缺乏した人間に過ぎないのだから面白い。露骨に云へば自ら進んで不具になるやうな人間を世の中では賞めて居るのです。それは兎に角として現今のやうに各自の職業が細く深くなつて知識や興味の面積が日に／＼狭められて行くならば、吾人は表面上社會的共同生活を營んでゐるとは申しながら、其實銘々孤立して山の中に立て籠つてゐると一般で、隣り合せて居を卜して居ながら心は天涯に懸け離れて暮して居るとでも評するより外に仕方がない有様に陥つて來ます。是では相互を了解する知識も同情も起りやうがなく、折角かたまつて生きて居ても内部の生活は寧ろバラ／＼で何の連鎖もない。丁度乾涸びた糲の様なもので一粒々々に孤立してゐるのだから根ツから面白くないでせう。人間の職業が専門的になつて又各々自分の専門に頭を突込んで少しでも外面を見渡す餘裕がなくなると

當面の事以外は何も分らなくなる。又分らせやうといふ興味も出て來にくい。夫で差支ないと云へば夫迄であるが、現に家業にはいくら精通しても又いくら勉強しても夫許ちやどこか不足な訴が内部から萌して來て何となく充分に人間的な心持が味へないのだから己を得ない。従つて此孤立支離の弊を何とかして矯めなければならなくなる。夫を矯める方法を御話するため態々此壇上に現はれたのではないから詳しい事は述べませんが、又述べるにした所で大體は既に諸君も御承知の事であるが、まあ物の序だから一言それに觸れて置ませう。既に個々介立の弊が相互の知識の缺乏と同情の稀薄から起つたとすれば、我々は自分の家業商賣に逐はれて日も亦足らぬ時間しか有たない身分であるにも拘はらず、其乏しい餘裕を割いて一般の人間を廣く了解し又之に同情し得る程度に互の滋味を醸す法を講じなければならぬ。夫には斯ういふ公會堂の様なものを作つて時々講演者などを聘して知識上の啓發をはかるのも便法でありますし、又さう知的の方面ばかりでは窮屈すぎるから、所謂社交機關を利用して、互の歡情を繋ぐのも良法であります。時としては方便の道具として酒や女を用ひても好い位のものでせう。實業家などが六づかしい相談をするのに却つて見當違の待合などで落合つて要領を得てゐるのも、全く酒色といふ人間の窮屈を融かし合ふ機械の具つた場所で、其影響の下に、角の取れた同情のある人間らしい心持で相互に所置が出来るからだらうと思ひます。現に事が纏ると云ふ實用上の言葉が人間として彼

約つひりを付けて此講演を結びたいと思ひます。

それで前申した己の爲にするとか人の爲にするとかいふ見地からして職業を観察すると、職業といふものは要するに人の爲にするものだといふ事に、どうしても根本義を置かなければなりません。人の爲にする結果が己の爲になるのだから、元はどうしても他人本位である。既に他人本位であるからには種類の選擇分量の多少凡て他を目安めやすにして働かなければならない。要するに取捨興廢の權威共に自己の手中にはない事になる。従つて自分が最上と思ふ製作を世間に勸めて世間は一向顧みなかつたり自分は心持が好くないので休みたくても世間は平日の如く要求を恣にしたり凡て己を曲げて人に従はなくては商賣にはならない。この自己を曲げるといふ事は成功には大切であるが心理的には甚だ厭なものである。就中最も厭なものは如何な好きな道でもある程度以上に強ひられて其性質が次第に嫌惡に變化する時にある。所が職業とか専門とかいふものは前申す通り自分の需用以上其方面に働いてさうして其自分に不要な部分を擧げて他の使用に供するのが目的であるから、自己を本位にして云へば當初から不必要でもあり、厭でもある事を強ひて遣るといふ意味である。よく人が商賣となると何でも厭になるものだといふ事は其厭になる理由は全く之が爲なのです。苟も道樂である間は自分に勝手な仕事を自分の適宜な分量でやるのだから面白いに違ないが、其道樂が職業と變化する刹那に今迄自己にあつた權威が突然他人の手に移

我打ち解けた非實用の快感状態から出立しなければならぬのも分りませう。斯う云ふと私が酒や女を無暗に推薦する様で一寸可笑しいが、私の申上げる主意はたとひ弊害の多い酒や女や待合などが交際の機關として上流の人に用ひられるのでも、人間は個々別々に孤立して互の融和同情を眼中に置かず、たゞ自家専門の職業にのみ腐心しては居られないものだといふ例に御話した位のものであります。本來を云ふと私はさう云ふ社交機關よりも、諸君が本業に費やす時間以外の餘裕を擧げて文學書を御讀みにならん事を希望するのであります。是は我が田へ水を引く様な議論にも見えますが、元來文學上の書物は専門的の述作ではない、多く一般の人間に共通な點に就て批評なり敘述なり試みた者であるから、職業の如何に拘はらず、階級の如何に拘らず赤裸々の人間を赤裸々に結び付けて、さうして凡ての他の墻壁を打破する者でありますから、吾人が人間として相互に結び付くためには最も立派で又最も弊の少ない機關だと思はれるのです。少くとも藝妓を上げて酒を飲んだと同等以上の効果がありさうに思はれるのであります。あなた方も斯ういふ公會堂へわざ／＼此の暑いのに集まつて、私のやうな者の言ふことを黙つて聴くやうな勇氣があるのだから、さう云ふ樂な時間を利用して少し御讀みになつたら如何だらうと申したいのです。職業が細くなり又忙がしくなる結果我々が不具になるが、夫はどうして矯正するかといふ問題はまづ此位にして、此講演の冒頭に述べた己の爲とか人の爲とかいふ議論に立ち歸つて其

るから快樂が忽ち苦痛になるのは已を得ない。打ち明けた御話が己の爲にすればこそ好なので人の爲にしなければならぬ義務を括り付けられれば何うしたつて面白くは行かないに極つてゐます。元來已を捨てるといふことは、道徳から云へば已を得ず不徳も犯さうし、知識から云へば己の程度を下げて無知な事も云はうし、人情から云へば己の義理を低くして阿漕な仕打もしやうし、趣味から云へば己の藝術眼を下げて下劣な好尚に投じやうし、十中八九の場合悪い方に傾き易いから困るのである。例へば新聞を拵へて見ても、あまり下品な事は書かない方が宜いと思ひながら、既に商賣であれば販賣の形勢から考へ營業の成立する位には俗衆の御機嫌を取らなければ立ち行かない。要するに職業と名のつく以上は趣味でも徳義でも知識でも凡て一般社會が本尊になつて自分は此本尊の鼻息を伺つて生活するが自然の理である。

たゞ茲にどうしても他人本位では成立たない職業があります。それは科學者哲學者もしくは藝術家の様なもので、是等はまあ特別の一階級とでも見做すより外に仕方がないので。哲學者とか科學者といふものは直接世間の實生活に關係の遠い方面をのみ研究してゐるのだから、世の中に氣に入らうとしたつて氣に入れる譯でもなし、世の中でも是等の人の態度如何で其研究を買つたり買はなかつたりする事も極めて少ないには違ないけれども、あゝ云ふ種類の人が物好きに實驗室へ入つて朝から晩まで仕事をしたり、又は書齋に閉ぢ籠つて深い考に沈んだりして萬事を等

閑に附してゐる有様を見ると、世の中にあれ程己の爲にして居るものはないだらうと思はずにはゐられない位です。それから藝術家もさうです。かうもしたらもつと評判が好くなるだらう、あもしたらまだ活計向の助けになるだらうと傍の者から見れば色々忠告のしたい所もあるが、本人は決してそんな作略はない、たゞ自分の好きな時に好きなものを描いたり作つたりする丈である。尤も當人が既に人間であつて相應に物質的嗜欲のあるのは無論だから多少世間と折合つて歩調を改める事がないでもないが、まあ大體から云ふと自我中心で、極く卑近の意味の道徳から云へば是れ程我儘のものはない、是れ程道樂なものはない位です。既に御話をした通り凡そ職業として成立する爲には何か人の爲にする、即ち世の嗜好に投ずると一般の御機嫌を取る所がなければならぬのだが、本來から云ふと道樂本位の科學者とか哲學者とか又藝術家とかいふものは其立場からして既に職業の性質を失つてゐると云はなければならぬ。實際今の世で彼等は名前には職業として存在するが實質の上では殆んど職業として認められない程割に合はない報酬を受けてゐるので此邊の消息はよく分るでせう。現に科學者哲學者杯は直接世間と取引しては食つて行けないから大抵は政府の保護の下に大學教授とか何とかいふ役になつてやつと露命をつないで居る。藝術家でも時に容れられず世から顧みられないで自然本位を押し通す人は随分慘澹たる境遇に沈淪してゐるものが多いのです。御承知の大雅堂でも今でこそ大した畫工であるが其當時毫も世間

向の畫をかゝなかつた爲に生涯眞葛が原の陋居に淋んで丸で乞食と同じ一生を送りました。佛蘭西のミレーも生きてゐる間は常に物質的の窮乏に苦しめられてゐました。又是は個人の例ではないが日本の昔に盛んであつた禪僧の修行杯と云ふものも極端な自然本位の道樂生活であります。彼等は見性のため究眞のため凡てを抛つて坐禪の工夫をします。默然と坐してゐる事が何で人の爲になりませう。善い意味にも悪い意味にも世間とは没交渉である點から見て彼等禪僧は立派な道樂ものであります。従つて彼等は其苦行難行に對して世間から何等の物質的報酬を得てゐません。麻の法衣を着て麥の飯を食つて飽迄道を求めてゐました。要するに原理は簡單で、物質的に人の爲にする分量が多ければ多い程物質的に己の爲になり、精神的に己の爲にすればする程物質的には己の不爲になるのであります。

以上申し上げた科學者哲學者もしくは藝術家の類が職業として優に存在し得るかは疑問として、是は自己本位でなければ到底成功しないことだけは明かな様であります。何故なれば是等が人の爲にすると己といふものは無くなつて仕舞ふからであります。ことに藝術家で己の無い藝術家は蟬の脱殻むすぶ同然で、殆ど役に立たない。自分に氣の乗つた作が出来なくてたゞ人に迎へられたい一心で遣る仕事には自己といふ精神が籠る筈がない。凡てが借り物になつて魂の宿る餘地がなくなる許です。私は藝術家と云ふ程のものでもないが、まあ文學上の述作をやつて居るから、矢張り

此種類に屬する人間と云つて差支ないでせう。しかも何か書いて生活費を取つて食つて居るのです。手短かに云へば文學を職業としてゐるのです。けれども私が文學を職業とするのは、人の爲にする即ち己を捨て、世間の御機嫌を取り得た結果として職業として居ると見るよりは、己の爲にする結果即ち自然なる藝術的心術の發現の結果が偶然人の爲になつて、人に氣に入つた丈の報酬が物質的に自分に反響して來たのだと見るのが本當だらうと思ひます。若し是が天から人の爲ばかりの職業であつて、根本的に己を枉げて始て存在し得る場合には、私は斷然文學を止めなければならぬかも知れぬ。幸ひにして私自身を本位にした趣味なり批判なりが、偶然にも諸君の氣に合つて、其氣に合つた人だけに讀まれ、氣に合つた人だけから少なくとも物質的の報酬、(或は感謝でも宜しい)を得つゝ今日迄押して來たのである。いくら考へても偶然の結果である。此偶然が壞れた日には何方本位にするかといふと、私は私を本位にしなれば作物が自分から見物にならない。私ばかりぢやない誰しも藝術家である以上はさう考へるでせう。従てかう云ふ場合には、世間が藝術家を自分に引付けるよりも自分が藝術家に食付いて行くより外に仕様がないのであります。食付いて行かなければそれまでといふ話である。藝術家とか學者とかいふものは、此點に於て我儘のものであるが、其の我儘な爲に彼等の道に於て成功する。他の言葉で云ふと、彼等にとつては道樂即ち本職なのである。彼等は自分の好きな時、自分の好きなものでなければ、

最後に職業と道樂の關係を説き、其末段に道樂的職業といふやうな一種の變體のある事を御吹聴に及んで私杯の職業がどの點迄職業でどの點迄が道樂であるかを諸君に大體理會せしめた積りであります。これで此講演を終ります。

— 四四、一一、一〇『朝日講演集』 —

書きもしなければ拵へもしない。至つて横着な道樂者であるが既に性質上道樂本位の職業をして居るのだから已むを得ないので。さういふ人をして己を捨てなければ立ち行かぬ様に強ひたり又は否應^{いやあう}なしに天然を枉げさせたりするのは、まづ其の人を殺すと同じ結果に陥るのです。私は新聞に關係がありますが、幸にして社主からしてモツと賣れ口の宜いやうな小説を書けとか、或はモツと澤山書かなくちや不可^{いか}んとか、さう云ふ外壓的の注意を受けたことは今日迄頓とありませぬ。社の方では私に私本位の下に述作する事を大體の上で許して呉れつゝある。其の代り月給も昇げて呉れないが、いくら月給を昇げて呉れても斯う云ふ取扱を變じて萬事營業本位丈で作物の性質や分量を指定されては夫こそ大いに困るのであります。私ばかりではない凡ての藝術家科學者哲學者はみなさうだらうと思ふ。彼等は一も二もなく道樂本位に生活する人間だからである。大變我儘のやうであるけれども、事實さうなのである。従つて恆産のない以上科學者でも哲學者でも政府の保護か個人の保護がなければまあ昔の禪僧位の生活を標準として暮さなければならぬ筈である。直接世間を相手にする藝術家に至つてはもし其述作なり製作がどこか社會の一部に反響を起して、其反響が物質的報酬となつて現はれて來ない以上は餓死するより外に仕方がない。己を枉げるといふ事と彼等の仕事とは全然妥協を許さない性質のものである。

私は職業の性質やら特色に就て首^{はな}に一言を費やし、開化の趨勢上其社會に及ぼす影響を述べ、

現代日本の開化

——明治四十四年八月和歌山に於て述——

甚だお暑いことで、斯う暑くては多人數お寄合ひになつて演説などお聴きになるのは定めしお苦しいだらうと思ひます。殊に承れば昨日も何か演説會があつたさうで、さう同じ催しが續いてはいくら中らない保證のあるものでも多少は流行過はやりすぎの氣味で、お聴きになるのも餘程御困難だらうと御察し申します。が演説をやる方の身になつて見てもさう樂ではありません。殊に只今牧君の紹介で漱石君の演説は迂餘曲折の妙があるとか何とかいふ廣告めいた贊辭を頂戴した後に出て同君の吹聴通りを遣らうとすると恰も迂餘曲折の妙を極める爲の藝當を御覽に入れる爲に登壇したやうなもので、苟も其妙を極めなければ降りることが出来ないやうな氣がして、いやが上に遣たりにぐせに陥つて仕舞ふ譯であります。實は此處へ出て參る前一寸先番の牧君に相談を掛けた事があるのです。是は内々ですが思ひ切つて打明けて御話し、て仕舞ひます。と云ふ程の祕密でもありませんが、全くの所今日の講演は長時間諸君に對して御話をする材料が不足のやうな氣

がしてならなかつたから、牧さんにあなたの方は少しは伸ばせますかと聞いたのです。すると牧君は自分の方は伸ばせば幾らでも伸びると氣丈夫な返事をして呉れたので、忽ち親船に乗つたやうな心持になつて、それぢやア少し伸ばして戴きたいと頼んで置きました。其の結果として冒頭だか序論だかに私の演説の短評を試みられたのはもと／＼私の注文から出た事で甚だ有難いには違ないけれども、其代り脈に遣り悪くなつて仕舞つた事も亦争はれない事實です。元來がさう云ふ情ない依頼を敢てする位ですから曲折どころではない、眞直まっすぐに行き當つてピクリと終しまひになるべき演説であります。なか／＼もつて抑揚頓挫波瀾曲折の妙を極めるだけの材料杯は薬にしたくも持合せて居りません。とさう言つた所で何も唯ボンヤリ演壇に登つた譯でもないのです、此處へ出て來る丈の用意は多少準備して參つたには違ないので、尤も私が此和歌山へ參るやうになつたのは當初からの計畫ではなかつたのですが、私の方で近畿地方を所望したので社の方では和歌山を其中うちへ割り振つて呉れたのです。御蔭で私もまだ見ない土地や名所杯を捜る便宜を得ましたのは好都合です。其序に演説をする——のではない演説の序に玉津島だの紀三井寺杯を見た譯でありますから此等の故跡や名勝に對しても空手からででは參れません。御話をする題目はちやんと東京表で極めて參りました。

其題目は「現代日本の開化」と云ふので、現代と云ふ字は下へ持つて來ても上へ持つて來ても

同じ事で、「現代日本の開化」でも「日本現代の開化」でも大して私の方では構ひません。「現代」と云ふ字があつて「日本」と云ふ字があつて「開化」と云ふ字があつて、其の間へ「の」の字が入つて居ると思へば夫丈の話です。何の雑作もなく唯だ現今の日本の開化と云ふ、斯う云ふ簡単なものです。其開化をどうするのだと聞かれば、實は私の手際ではどうも仕様がなないので、私はたゞ開化の説明をして後はあなた方の御高見に御任せする積であります。では開化を説明して何になる？と斯う御聞きになるかも知れないが、私は現代の日本の開化といふ事が諸君によく御分りになつて居るまいと思ふ。御分りになつて居なからうと思ふと云ふと失禮ですけれども、どうもこれが一般の日本人に能く呑み込めて居ない様に思ふ。私だつて夫程分つても居ないので、けれどもまづ諸君よりもそんな方面に餘計頭を使ふ餘裕のある境遇に居りますから、斯ういふ機會を利用して自分の思つた所丈をあなた方に聞いて頂かうといふのが主眼なのです。どうせあなた方も私も日本人で、現代に生れたもので、過去の人間でも未來の人間でも何でも無い上に現に開化の影響を受けて居るのだから、現代と日本と開化と云ふ三つの言葉は、どうしても諸君と私とに切つても切れない離すべからざる密接な關係があるのは分り切つた事ですが、夫にも拘らず、御互に現代の日本の開化に就て無頓着であつたり、又は餘りハッキリした理會を有つてゐなかつたならば、萬事に勝手が悪い譯だから、まあ互に研究もし、又分る丈は分らせて置く方が都合が

好からうと思ふのであります。それに就ては少し學究めきますが、日本とか現代とかいふ特別な形容詞に束縛されない一般の開化から出立して其性質を調べる必要があると考へます、御互ひに開化と云ふ言葉を使つて居つて、日に何遍も繰返して居るけれども、果して開化とはどんなものだと思つて聞いて聞き糺されて見ると、今迄互に了解し得たと許り考へて居た言葉の意味が存外違つて居たり或は以ての外に漠然と曖昧であつたりするのはよく有る事だから私は先づ開化の定義から極めて懸りたいのです。

尤も定義を下すに就ては餘程氣を付けないと飛んでもない事になる。之をむづかしく言ひますと、定義を下せば其定義の爲に定義を下されたものがピタリと糊細工の様に硬張つてしまふ。複雑な特性を簡單に纏める學者の手際と腦力とには敬服しながらも一方に於て其迂濶を惜まなければならぬ様な事が彼等の下した定義を見るとよくあります。其弊所を極分り易く一口に御話すれば生きたものを故と四角四面の棺の中へ入れて殊更に融通が利かない様にするからである。尤も幾何學杯で中心から圓周に到る距離が悉く等しいものを圓と云ふといふ様な定義はあれで差支ない、定義の便宜があつて弊害のない結構なものです。是は實世間に存在する圓いものを説明すると云はんより寧ろ理想的に頭の中にある圓といふものを斯く約束上取り極めた迄であるから古往今來變りつこないで何處迄も此定義一點張りて押して行かれるのです。其他四角だらうが

注意を要するといふのであります。つまり變化をするものを捉へて變化を許さぬかの如くピタリと定義を下す。巡查と云ふものは白い服を着てサーベルを下げて居るものだ杯と天から極められ九日には巡查も遣り切れないでせう。家へ歸つて浴衣も着換へる譯に行かなくなる。此の暑いのに剣ばかり下げて居なければ濟まないのは可哀想だ。騎兵とは馬に乗るものである。是も御尤には違ないが、幾ら騎兵だつて年が年中馬に乗りつゞけに乗つて居る譯にも行かないぢやありませんか。少しは下りたいでさア。斯う例を挙げれば際限がないから好加減に切り上げます。實は開化の定義を下す御約束をして喋舌つてゐた處が何時の間にか開化はそつち退けになつて六づかしい定義論に迷ひ込んで甚だ恐縮です。が此位注意をした上でさて開化とは何者だと纏めて見たら幾分か學者の陥り易い弊害を避け得られるし又其便宜をも受ける事が出来るだらうと思ふのです。で愈開化に出戻りを致しますが、開化と云ふものも、汽車とか蠅とか巡查とか騎兵とか云ふやうなものゝ如くに動いて居る。それで開化の一瞬間を取つてカメラにピタリと入れて、さうして是が開化だと提げて歩く譯には行きません。私は昨日和歌の浦を見物しましたが、あそこを見た人のうちで和歌の浦は大變浪の荒い所だと云ふ人がある。かと思ふと非常に静かな所だと云ふ人もある。どつちが宜いのか分らない。段々聞いて見ると、一方は浪の非常に荒い時に行き、一方は非常に静かな時に行つた違から話がかう表裏して來たのである。固より見た通なんだから兩方

三角だらうが幾何的に存在して居る限りは夫々の定義で一旦纏めたら決して動かす必要もないかも知れないが、不幸にして現實世の中にある圓とか四角とか三角とかいふもので過去現在未來を通じて動かないものは甚だ少ない。ことに夫自身に活動力を具へて生存するものには變化消長が何處迄も付け纏つて居る。今日の四角は明日の三角にならないとも限らないし、明日の三角が又いつ圓く崩れ出さないとも云へない。要するに幾何學の様に定義があつて其定義から物を拵へ出したのでなくつて、物があつて其物を説明する爲に定義を作るとなると勢ひ其物の變化を見越してその意味を含ましたものでなければ所謂杓子定規とかで一向氣の利かない定義になつて仕舞ひます。丁度汽車がゴーツと馳けて來る、其運動の一瞬間即ち運動の性質の最も現はれ悪い刹那の光景を寫眞に取つて、是が汽車だ／＼と云つて恰も汽車の凡てを一枚の裏に寫し得た如く吹聴すると一般である。成程何處から見ても汽車に違ありませんまい。けれども汽車に見逃してはならない運動といふものが此寫眞のうちには出てゐないのだから實際の汽車とは到底比較の出來ない位懸絶してゐると云はなければなりませんまい。御存じの琥珀と云ふものがあります。琥珀の中に時々蠅が入つたのがある。透かして見ると蠅に違ありませんが、要するに動きの取れない蠅であります。蠅でないとは言へぬでせうが活きた蠅とは云へますまい。學者の下す定義には此寫眞の汽車や琥珀の中の蠅に似て鮮かに見えるが死んでゐると評しなければならぬものがある。夫で

とも嘘ではない。が又兩方とも本當でもない。是に似寄りの定義は、あつても役に立たぬことはない。が、役に立つと同時に害を爲す事も明かなんだから、開化の定義と云ふものも、可成はさう云ふ不都合を含んでゐない様に致したいのが私の希望であります。が、さうするとボンヤリして来る。恨むらくはボンヤリして来る。けれどもボンヤリしても外のものゝ區別が出来ればそれで宜いでせう。さつき牧君の紹介があつた様に夏目君の講演は其文章の如く時とすると門口から玄關へ行く迄にうんざりする事があるさうで誠に御氣の毒の話だが、成程遣つて見ると其通り、

是で漸く玄關迄着きましたから思ひきつて本當の定義に移りませう。

開化は人間活力の發現の経路である。と私は斯う云ひたい。私許ぢやない、あなた方だつてさういふでせう。尤もさう云つた所で別に書物に書いてある譯でも何でもない、私がさう言ひたい迄の事であるが其代り珍らしくも何ともない。が是れ頗る漠然として居る。前口上を長々述べ立てた後で此位の定義を御吹聴に及んだ丈では餘り人を馬鹿にしてゐるやうですが、まあ其處から定めて掛らないと曖昧になるから、實は已を得ないので。それで人間の活力と云ふものが今申す通り時の流を沿うて發現しつゝ、開化を形造つて行くうちに私は根本的に性質の異つた二種類の活動を認めたい、否確かに認めるのであります。

其二通りのうち一つは積極的のもので、一つは消極的のものである。何か月並の様な講義をし

て済みませんが、人間活力の發現上積極的と云ふ言葉を用ひますと、勢力の消耗を意味する事になる。又もう一つの方は是とは反對に勢力の消耗を出来る丈防がうとする活動なり工夫なりだから前のに對して消極的と申したのであります。此二つの互ひに喰違つて反の合はないやうな活動が入り亂れたりコンガラカツたりして開化と云ふものが出来るのであります。是でもまだ抽象的で能くお分りにならないかも知れませんが、もう少し進めば私の意味は自ら明瞭になるだらうと信じます。元來人間の命とか生とか稱するものは解釋次第で色々な意味にもなり又六づかしくもなりますが要するに前申した如く活力の示現とか進行とか持続とか評するより外に致し方のない者である以上、此活力が外界の刺戟に對してどう反應するかといふ點を細かに觀察すればそれで吾人人類の生活状態も略了解が出来る様な譯で、其生活状態の多人數の集合して過去から今日に及んだものが所謂開化に外ならないのは今更申上げる迄もありますまい。諸君々の活力が外界の刺戟に反應する方法は刺戟の複雑である以上固より多趣多様千差萬別に違ないが、要するに刺戟の来るたびに吾が活力を成るべく制限節約して出来る丈使ふまいとする工夫と、又自ら進んで適意の刺戟を求め能ふ丈の活力を這裏に消耗して快を取る手段との二つに歸着して仕舞ふやう私は考へてゐるのであります。で前のを便宜のため活力節約の行動と名づけ後者をかりに活力消耗の趣向とでも名づけて置きませうが、此活力節約の行動はどんな場合に起るかと云へば現代の吾

吾が普通用ひる義務といふ言葉を冠して形容すべき性質の刺戟に對して起るのであります。從來の德育法及び現今とても教育上では好んで義務を果す敢爲邁往の氣象を獎勵する様ですが是は道徳上の話で道徳上しかなくてはならぬ若しくはしかする方が社會の幸福だと云ふ迄で、人間活力の示現を観察して其組織の経緯一つを司どる大事實から云へば何うしても今私が申し上げた様に解釋するより外仕方がないのであります。吾々もお互に義務は盡さなければならんものと始終思ひ、又義務を盡した後は大變心持が好いのであるが、深く其裏面に立ち入つて内省して見ると、願くは此義務の束縛を免かれて早く自由になりたい、人から強ひられて已を得ずする仕事は出来る丈分量を壓搾して手軽に済ましたいといふ根性が常に胸の中に付け纏つてゐる。其根性が取も直さず活力節約の工夫となつて開化なるものゝ一大原動力を構成するのであります。

斯く消極的に活力を節約しやうとする奮闘に對して一方では又積極的に活力を任意隨所に消耗しやうといふ精神が又開化の一半を組み立て居る。其發現の方法も亦世が進めば進む程複雑になるのは當然であるが、之を極約めてどんな方面に現はれるかと説明すれば先づ普通の言葉で道樂といふ名のつく刺戟に對し起るものだとして仕舞へば一番早分りであります。道樂と云へば誰も知つてゐる。釣魚つりうしをするとか玉を突くとか、碁を打つとか、又は鐵砲を擔いで獵に行くとか、いろ／＼のものがあつてませう。是等は説明するものはない悉く自から進んで強ひられざるに自

分の活力を消耗して嬉しがる方でありませう。尙進んでは此精神が文學にもなり科學にもなり又は哲學にもなるので、一寸見ると甚だ六づかしげなものも皆道樂の發現に過ぎないのであります。此二様の精神即ち義務の刺戟に對する反應としての消極的な活力節約と又道樂の刺戟に對する反應としての積極的な活力消耗とが互に並び進んで、コンガラカツて變化して行つて、此複雑極りなき開化と云ふものが出来るのだと私は考へてゐます。其結果は現に吾々が生息してゐる社會の實況を目撃すればすぐ分ります。活力節約の方から云へば出来るだけ労働を少なくして可成なるべくかな時間に多くの働きをしやう／＼と工夫する。其の工夫が積り積つて汽車汽船は勿論電信電話自動車大變なものになります、元を糺せば面倒を避けたい横着心の發達した便法に過ぎないでせう。此和歌山市から和歌の浦迄一寸使ひに行つて來いと言はれた時に、出来るなら誰しも御免蒙りたい。がどうしても行かなければならぬとすれば可成なるべく樂に行きたい、さうして早く歸りたい。出来る丈身體からだは使ひ度ない。其所で人力車も出来なければならぬ譯になります。其上に贅澤を云へば自轉車にするでせう。尙我儘を云ひ募れば是が電車にも變化し自動車又は飛行器にも化けなければならぬのは自然の數であります。是に反して電車や電話の設備があるにしても是非今日に向ふ迄歩いて行きたいと云ふ道樂心の増長する日も年に二度や三度は起らないと限りませぬ。好んで身體を使つて疲勞を求め、吾々が毎日やる散歩といふ贅澤も要するに此

自我本位に立脚するのは當然だから自分の好いた刺戟に精神なり身體なりを消費しやうとするのは致し方もない仕儀である。尤も好いた刺戟に反應して自由に活力を消耗すると云つたつて何も悪い事をするとは限らない。道樂だつて女を相手にする許が道樂ぢやない。好きな眞似をするとは開化の許す限りのあらゆる方面に互つての話であります。自分が畫がかきたいと思へば出来る畫ばかりかゝうとする。本が讀みたければ差支ない以上本ばかり讀まうとする。或は學問が好だと云つて、親の心も知らないで、書齋へ入つて青くなつて居る子息がある。傍から見れば何の事か分らない。親父が無理算段の學資を工面して卒業の上は月給でも取らせて早く隱居でもしたいと思つてゐるのに、子供の方では活計の方なんか丸で無頓着で、たゞ天地の眞理を發見したい杯と太平樂を並べて机に靠れて苦り切つてゐるのもある。親は生計の爲の修業と考へてゐるのに子供は道樂の爲の學問とのみ合點してゐる。斯う云ふ様な譯で道樂の活力は如何なる道德學者も杜絶する譯にいかない。現に其の發現は世の中にどんな形になつて、どんなに現れて居るか云ふことは、此競争劇甚の世に道樂などとして其存在の權利を承認しない程家業に勵精な人も少し注意され、ば肯定しない譯に行かなくなるでせう。私は昨晚和歌の浦へ泊りましたが、和歌の浦へ行つて見ると、さがり松だの權現様だの紀三井寺だのいろ／＼のものがありますが、其中に東洋第一海拔二百尺と書いたエレエーターが宿の裏から小高い石山の巔へ絶えず見物を上げ

活力消耗の部類に屬する積極的な命の取扱方の一部分なのであります。が此の道樂氣の増長した時に幸に行つて來いといふ命令が下れば丁度好いが、まあ大抵はさう旨くは行かない。云ひ付かつた時は多く歩きたくない時である。だから歩かないで用を足す工夫をしなければならぬ。となると勢ひ訪問が郵便になり、郵便が電報になり、其電報が又電話になる理窟です。詰る所は人間生存上の必要上何か仕事をしなければならぬのを、ならう事ならしないで用を足してさうして満足に生きてゐたいといふ我儘な了簡、と申しませうか又はさう／＼身を粉にしてまで働いて生きてゐるんぢや割に合はない、馬鹿にするにやねえといふ發憤の結果が怪物の様に辣腕な器械力と豹變したのだと見れば差支ないでせう。

此怪物の力で距離が縮まる、時間が縮まる、手数が省ける、凡て義務的の勞力が最少低額に切詰められた上に又切詰められて何處迄押して行くか分らないうちに、彼の反對の活力消耗と名づけて置いた道樂根性の方も亦自由我儘の出来る限りを盡して、是亦瞬時の絶間なく天然自然と發達しつゝ留め度もなく前進するのである。此道樂根性の發展も道德家に言はせると怪しからんとか言ひませう。が夫は徳義上の問題で事實上の問題にはなりません。事實の大局から云へば活力を吾好む所に消費するといふ此工夫精神は二六時中休みつこなく働いて、休みつこなく發展してゐます。元々社會があればこそ義務的の行動を餘儀なくされる人間も放り出して置けば何處迄も

たり下げたりしてゐるのを見ました。實は私も動物園の熊の様にあの鐵の格子の檻の中に入つて山の上へ上げられた一人であります。があれは生活上別段必要のある場所にある譯でもなければ又夫程大切な器械でもない、まあ物數奇である。唯上つたり下つたりする丈である。疑もなく道樂心の發現で、好奇心兼廣告欲も手傳つてゐるかも知れないが、まあ活計向とは關係の少ないものです。これは一例ですが開化が進むにつれて斯う云ふ贅澤なもの、數が殖えて來るのは誰でも認識しない譯に行かないでせう。加之此贅澤が日に増し細かくなる。大きなもの、中に輪が幾つも出來て漏斗よぼとみた様に段々深くなる。と同時に今迄氣の付かなかつた方面へ段々發展して範圍が年々廣くなる。

要するに只今申し上げた二つの入り亂れたる経路、即ち出來るだけ努力を節約したいと云ふ願望から出て來る種々の發明とか器械力とか云ふ方面と、出來るだけ氣儘に努力を費したいと云ふ娛樂の方面、是が經となり緯となり千變萬化錯綜して現今の様に混亂した開化と云ふ不可思議な現象が出來るのであります。

そこでさう云ふものを開化とすると、茲に一種妙なパラドックスとでも云ひませうか、一寸聞くと可笑しいが、實は誰しも認めなければならぬ現象が起ります。元來何故人間が開化の流れに沿うて、以上二種の活力を發現しつゝ今日に及んだかと云へば生れながらさう云ふ傾向を有つ

て居ると答へるより外に仕方がない。之を逆に申せば吾人の今日あるは全く此の本來の傾向あるがために外ならぬのであります。猶進んで云ふと元の儘で懷手をしてゐては生存上どうしても遣り切れぬから、夫れから夫れへと順々に押され、つて斯く發展を遂げたと言はなければならぬのです。して見れば古來何千年の努力と歲月を擧げて漸くの事現代の位置迄進んで來たのであるからして、苟くも此二種類の活力が上代から今に至る長い時間に工夫し得た結果として昔よりも生活が樂になつてゐなければならぬ筈であります。けれども實際は何うか？打明けて申せば御互の生活は甚だ苦しい。昔の人に對して一步も譲らざる苦痛の下に生活してゐるのだと云ふ自覺が御互にある。否開化が進めば進む程競争が益劇しくなつて生活は愈困難になるやうな氣がする。成程以上二種の活力の猛烈な奮闘で開化は贏ち得たに相違ない。然し此開化は一般に生活の程度が高くなつたといふ意味で、生存の苦痛が比較的柔げられたといふ譯ではありません。丁度小学校の生徒が學問の競争で苦しいのと、大學の學生が學問の競争で苦しいのと、其の程度は違ふが、比例に至つては同じことである如く、昔の人間と今の人間がどの位幸福の程度に於て違つて居るかと云へば——或は不幸の程度に於て違つて居るかと云へば——活力消耗活力節約の兩工夫に於て大差はあるかも知れないが、生存競争から生ずる不安や努力に至つては決して昔より樂になつてゐない。否昔より却つて苦しくなつてゐるかも知れない。昔は死ぬか生きるかの爲に争つたも

本來であります。積極的活力の發現の方から見ても此波動は同じことで、早い話が今までは敷島か何か吹かして我慢して居つたのに、隣りの男が旨さうに埃及煙草を喫んで居ると矢つ張りそつちが喫みたくなる。又喫んで見れば其の方が旨いに違ない。仕舞には敷島などを吹かすものは人間の數へ入らないやうな氣がして、どうしても埃及へ喫み移らなければならぬと云ふ競争が起つて来る。通俗の言葉で云へば人間が贅澤になる。道學者は倫理的の立場から始終奢侈を戒しめてゐる。結構には違ないが自然の大勢に反した訓戒であるから何時でも駄目に終るといふ事は昔から今日迄人間がどの位贅澤になつたか考へて見れば分る話である。斯く積極消極兩方面の競争が激しくなるのが開化の趨勢だとすれば、吾々は長い時日のうちに種々様々の工夫を凝し智慧を絞つて漸く今日迄發展して來たやうなもの、生活の吾人の内生に與へる心理的苦痛から論ずれば今も五十年前も又は百年前も、苦しさ加減の程度は別に變りはないかも知れないと思ふのです。それだからして此位努力を節減する器械が整つた今日でも、又活力を自由に使ひ得る娛樂の途が備つた今日でも生存の苦痛は存外切なもので或は非常といふ形容詞を冠しても然るべき程度かも知れない。是程努力を節減出来る時代に生れても其忝けなさが頭に應へなかつたり、是程娛樂の種類や範圍が擴大されても全く其有難味が分らなかつたりする以上は苦痛の上に非常といふ字を附加しても好いかも知れません。是が開化の産んだ一大パラドックスだと私は考へるのであり

のである。夫丈の努力を敢てしなければ死んで仕舞ふ。已むを得ないからやる。加之道樂の念は兎に角道樂の途はまだ開けて居なかつたから、斯うしたい、あゝしたいと云ふ方角も程度も至つて微弱なもので、たまに足を伸したり手を休めたりして、満足してゐた位のものだらうと思はれる。今日は死ぬか生きるかの問題は半分超越してゐる。それが變化して寧ろ生きるか生きるかと云ふ競争になつて仕舞つたのであります。生きるか生きるかと云ふのは可笑しうございますが、Aの状態で生きるかBの状態で生きるかの問題に腐心しなければならぬといふ意味であります。活力節減の方で例を引いてお話をしますと、人力車を挽いて渡世にするか、又は自動車のハンドルを握つて暮すかの競争になつたのであります。どつちを家業にしたつて命に別條はないに極つてゐるが、どつちへ行つても努力は同じだとは云はれません。人力車を挽く方が汗が餘程多分に出るでせう。自動車の御者になつてお客を乗せれば——尤も自動車を有つ位ならお客を乗せる必要もないが——短い時間で長い所が走れる。糞力はちつとも出さないで済む。活力節約の結果樂に仕事が出来ると。されば自動車のない昔はいざ知らず、苟くも發明される以上人力車は自動車に負けなければならぬ。負ければ追付かなければならぬ。と云ふ譯で、少しでも努力を節減し得て優勢なるものが地平線上に現はれて茲に一つの波瀾を誘ふと、丁度一種の低氣壓と同じ現象が開化の中に起つて、各部の比例がどれ平均が回復される迄は動搖して已められないのが人間の

ます。

これから日本の開化に移るのですが、果して一般的の開化がそんなものであるならば、日本の開化も開化の一種だからそれで宜からうぢやないか。此講演は濟んで仕舞ふ譯であります。が其處に一種特別な事情があつて、日本の開化はさういかない。何故さうは行かないか。夫れを説明するのが今日の講演の主眼である。と申すと玄關を上つて漸く茶の間あたりへ來た位の氣がして驚くでせう。然しさう長くはありません、奥行は存外短かい講演です。やつてる方だつて長いのは疲れますから出来る丈努力節約の法則に従つて早く切り上げる積ですから、もう少し辛抱して聽いて下さい。

それで現代の日本の開化は前に述べた一般の開化と何處が違ふかと云ふのが問題です。若し一言にして此問題を決しやうとするならば私はかう斷じたい、西洋の開化（即ち一般の開化）は内發的であつて、日本の現代の開化は外發的である。こゝに内發的と云ふのは内から自然に出て發展すると云ふ意味で丁度花が開くやうにおのづから蕾が破れて花瓣が外に向ふのを云ひ、又外發的とは外からおつかぶさつた他の力で己むを得ず一種の形式を取るのを指した積なのです。もう一口説明しますと、西洋の開化は行雲流水の如く自然に働いてゐるが、御維新後外國と交渉を付けた以後の日本の開化は大分勝手が違ひます。勿論何處の國だつて隣づき合がある以上は其影響

を受けるのが勿論の事だから吾日本と雖も昔からさう超然として只自分丈の活力で發展した譯ではない。ある時は三韓又或時は支那といふ風に大分外國の文化にかぶれた時代もあるでせうが、長い月日を前後ぶつ通しに計算して大體の上から一瞥して見るとまあ比較的内發的の開化で進んで來たと云へませう。少なくとも鎖港排外の空氣で二百年も麻酔した揚句突然西洋文化の刺戟に跳ね上つた位強烈な影響は有史以來まだ受けてゐなかつたと云ふのが適當でせう。日本の開化はあの時から急劇に曲折し始めたのであります。又曲折しなければならぬ程の衝動を受けたのであります。之を前の言葉で表現しますと、今迄内發的に展開して來たのが、急に自己本位の能力を失つて外から無理押しに押されて否應なしに其云ふ通りにしなければ立ち行かないといふ有様になつたのであります。夫が一時ではない。四五十年前に一押し押されたなりじつと持ち應へてゐるなんて樂な刺戟ではない。時々には押し刻々に押されて今日に至つた許りでなく向後何年の間か、又は恐らく永久に今日の如く押されて行かなければ日本が日本として存在出來ないのだから外發的といふより外に仕方がない。其理由は無論明白な話で、前詳しく申上げた開化の定義に立戻つて述べるならば、吾々が四五十年前始めて打つかつた、又今でも接觸を避ける譯に行かないかの西洋の開化といふものは我々よりも数十倍努力節約の機關を有する開化で、又我々よりも数十倍娛樂道樂の方面に積極的に活力を使用し得る方法を具備した開化である。粗末な説明では

ない、只西洋の學者が書物に書いた通りを尤と思ふから紹介するだけではありませんが、凡て一分間の意識にせよ三十秒間の意識にせよ其内容が明瞭に心に映する點から云へば、のべつ同程度の強さを有して時間の経過に頓着なく恰も一つ所にこびり付いた様に固定したものではない。必ず動く。動くにつれて明かな點と暗い點が出来る。其高低を線で示せば平たい直線では無理なので、矢張り幾分か勾配の付いた弧線即ち弓形の曲線で示さなければならなくなる。こんなに説明すると却つて込み入つて六づかしくなるかも知れませんが、學者は分つた事を分りにくく言ふもので、素人は分らない事を分つた様に呑込んだ顔をするものだから非難は五分々々である。今云つた弧線とか曲線とかいふ事をもそつと碎いてお話をすると、物を一寸見るのにも、見て是が何であるかと云ふことがハッキリ分るには或る時間を要するので、即ち意識が下の方から一定の時間を経て頂點へ上つて来てハッキリして、あゝ是だと思ふ時がくる。それを猶見詰めて居ると今度は視覚が鈍くなつて多少ぼんやりし始めるのだから一旦上の方へ向いた意識の方向が又下を向いて暗くなり懸ける。是は實驗して御覽になると分る。實驗と云つても機械杯は要らない。頭の中がさうなつて居るのだから只試しさえすれば氣が付くのです。本を讀むにしてもAと云ふ言葉とBと云ふ言葉と夫からCといふ言葉が順々に並んで居れば此三つの言葉を順々に理解して行くのが當り前だからAが明かに頭に映る時はBはまだ意識に上らない。Bが意識の舞臺に上り始める時

あるが、詰り我々が内發的に展開して十の複雑の程度に開化を過ぎつけた折も折、圖らざる天の一方から急に二十三十の複雑の程度に進んだ開化が現はれて俄然として我等に打つて懸つたのである。此壓迫によつて吾人は已を得ず不自然な發展を餘儀なくされるのであるから、今の日本の開化は地道にのそり／＼と歩くのでなくつて、ヤツと氣合を懸けてはびよい／＼と飛んで行くのである。開化のあらゆる階段を順々に踏んで通る餘裕を有たないから、出来る丈大きな針でぼつぼつ縫つて過ぎるのである。足の地面に觸れる所は十尺を通過するうちに僅か一尺位なもので、他の九尺は通らないのと一般である。私の外發的といふ意味は是で略御了解になつたらうと思ひます。

さう云ふ外發的の開化が心理的にどんな影響を吾人に與ふかと云ふと一寸變なものになります。心理學の講筵でもないのに六づかしい事を申上げるのも如何と存じますが、必要の箇所を極簡易に述べて再び本題に戻る積でありますから、暫く御辛抱を願ひます。我々の心は絶間なく動いて居る。あなた方は今私の講演を聴いておいでになる、私は今あなた方を前に置いて何か言つて居る、雙方共に斯う云ふ自覺がある。それに御互の心は動いてゐる。働いてゐる。これを意識と云ふのであります。此意識の一部分、時に積れば一分間位の所を絶間なく動いてゐる大きな意識から切り取つて調べて見ると矢張り動いてゐる。其動き方は別に私が發明した譯でも何でも

たる意識があり、又一年には一年を纏めるに足る意識があつて、夫から夫へと順次に消長してゐるものと私は断定するのであります。吾々も過去を顧みて見ると中學時代とか大學時代とか皆特別の名のつく時代で其時代々々の意識が纏つて居ります。日本人總體の集合意識は過去四五年前には日露戦争の意識文になり切つて居りました。其後日英同盟の意識で占領された時代もありました。斯く推論の結果心理學者の解剖を擴張して集合の意識や又長時間の意識の上に應用して考へて見ますと、人間活力の發展の経路たる開化といふものの動くラインも亦波動を描いて弧線を幾個も幾個も繋ぎ合せて進んで行くと云はなければなりません。無論描かれる波の数は無限無數で、其一波々々の長短も高低も千差萬別でありませうが、矢張り甲の波が乙の波を呼出し、乙の波が又丙の波を誘ひ出して順次に推移しなければならぬ。一言にして云へば開化の推移はどうしても内發的でなければ嘘だと申上げたいのであります。一寸した話が私は今此處で演説をして居る。すると夫を御聞きになる貴方がたの方から云へば初めの十分間位は私が何を主眼に云ふか能く分らない、二十分目位になつて漸く筋道が付いて、三十分目位には漸く油がのつて少しは一寸面白くなり、四十分目には又ぼんやりし出し、五十分目には退屈を催し、一時間目には欠伸が出る。とさう私の想像通り行か行かないか分りませんが、もしさうだとするならば、私が無理に此處で二時間も三時間も喋舌つては、あなた方の心理作用に反して我を張ると同じ事で決して成功は

にはもうAの方は薄ぼんやりして段々識域の方に近づいてくる。BからCへ移るときは是と同じ所作を繰返すに過ぎないのだから、いくら例を長くしても同じ事でありませぬ。是は極めて短時間の意識を學者が解剖して吾々に示したものでありますが、此解剖は個人の一時間の意識のみならず、一般社會の集合意識にも、夫から又一日一月もしくは一年乃至十年の間の意識にも應用の利く解剖で、其特色は多人數になつたつて、長時間に互つたつて、一向變りはない事と私は信じてゐるのであります。例へて見ればあなた方といふ多人數の團體が今此處で私の講演を聞いておいでになる。聽いて居ない方もあるかも知れないが、まア聽いて居るとする。さうすると其個人でない集合體のあなた方の意識の上には今私の講演の内容が明かに入ると同時に、此講演に來る前あなた方が経験された事、即ち途中で雨が降り出して着物が濡れたとか、又蒸し暑くて途中が難儀であつたとかいふ意識は講演の方が心を奪ふにつれて、段々不明瞭不確實になつてくる。又此講演が終つて場外に出て涼しい風に吹かれてもすれば、あゝ好い心持だといふ意識に心を專領されて仕舞つて講演の方はビツタリ忘れて仕舞ふ。私から云へば全く有難くない話だが事實だから已を得ないのである。私の講演を行住坐臥共に覚えていらつしやいと言つても、心理作用に反した注文なら誰も承知する者はありません。是と同じ様にあなた方と云ふ矢張り一箇の團體の意識の内容を検して見ると假令一ヶ月に互らうが一年に互らうが一ヶ月には一ヶ月を括るべき柄乎

出来ない。何故かと云へば此講演が其場合あなた方の自然に逆つた外發的のものになるからであります。いくら咽喉を絞り聲を噎らして怒鳴つて見たつて貴方がたはもう私の講演の要求の度を經過したのだから不可いません。あなた方は講演よりも茶菓子が食ひたくなつたり酒が飲みたくなつたり氷水が欲しくなつたりする。其方が内發的なのだから自然の推移で無理のない所なのである。

是丈説明して置いて現代日本の開化に後戻をしたら大抵大丈夫でせう。日本の開化は自然の波動を描いて甲の波が乙の波を生み乙の波が丙の波を押し出すやうに内發的に進んでゐるかと思ふのが當面の問題なのですが残念ながらさう行つて居ないので困るのです。行つて居ないと云ふのは、先程も申した通り活力節約活力消耗の二大方面に於て丁度複雑の程度二十を有して居つた所へ、俄然外部の壓迫で三十代迄飛び付かなければならなくなつたのですから、恰も天狗にさらはれた男の様に無我夢中で飛び付いて行くのです。其経路は殆んど自覺してゐない位のもので、元々開化が甲の波から乙の波へ移るのは既に甲は飽いて居た、まれないから内部欲求の必要上ずるりと新しい一波を開展するので甲の波の好所も悪所も酸いも甘いも嘗め盡した上に漸く一生面を開いたと云つて宜しい。従つて從來經驗し盡した甲の波には衣を脱いだ蛇と同様未練もなければ残り惜しい心持もしない。のみならず新たに移つた乙の波に揉まれながら毫も借り着をして

世間體を繕つてゐるといふ感が起らない。所が日本の現代の開化を支配してゐる波は西洋の潮流で其波を渡る日本人は西洋人でないのだから、新しい波が寄せる度に自分が其中で食客みよくらをして氣兼ねしてゐる様な氣持になる。新しい波は兎に角、今しがた漸くの思で脱却した舊い波の特質やら真相やらも辨へるひまのないうちにもう棄てなければならなくなつて仕舞つた。食膳に向つて皿の数を味ひ盡す所どころが元來どんな御馳走が出たかハッキリと眼に映じない前にもう膳を引いて新らしいのを並べられたと同じ事でありませう。斯う云ふ開化の影響を受ける國民はどこかに空虚の感がなければなりません。又どこかに不満と不安の念を懐かなければなりません。夫を恰も此開化が内發的でもあるかの如き顔をして得意でゐる人のあるのは宜しくない。それは餘程ハイカラです、宜しくない。虚偽でもある。輕薄でもある。自分はまだ煙草を喫つても碌に味さへ分らない子供の癖に、煙草を喫つてさも旨さうな風をしたら生意氣でせう。夫を敢てしなければ立ち行かない日本人は随分悲酸な國民と云はなければならぬ。開化の名は下せないかも知れないが、西洋人と日本人の社交を見ても一寸氣が付くでせう。西洋人と交際をする以上、日本本位ではどうしても旨く行きませぬ。交際しなくとも宜いと云へば夫迄であるが、情けないかな交際しなければ居られないのが日本の現状でありませう。而して強いものと交際すれば、どうしても己を棄て、先方の習慣に従はなければならなくなる。我々があの人は肉刺フヤリの持ち様も知らないと

か、小刀の持ち様も心得ないとか何とか云つて、他を批評して得意なのは、つまりは何でもない、たゞ西洋人が我々より強いからである。我々の方が強ければ彼方に此方の眞似をさせて主客の地位を易へるのは容易の事である。がさう行かないから此方で先方の眞似をする。しかも自然天然に發展して來た風俗を急に變へる譯にいかぬから、たゞ器械的に西洋の禮式杯を覺えるより外に仕方がない。自然と内に醗酵して醸された禮式でないから取つてつけた様で甚だ見苦しい。是は開化ぢやない、開化の一端とも云へない程の些細な事であるが、さう云ふ些細な事に至るまで、我々の遺つてゐる事は内發的でない、外發的である。是を一言にして云へば現代日本の開化は皮相上滑りの開化であると云ふ事に歸着するのである。無論一から十まで何から何までとは言はない。複雑な問題に對してさう過激の言葉は慎まなければ悪いが我々の開化の一部分、或は大部分はいくら已惚れて見ても上滑りと評するより致し方がない。併しそれが悪いからお止しなさいと云ふのではない。事實已むを得ない、涙を吞んで上滑りに滑つて行かなければならないと云ふのです。

それでは子供が背に負はれて大人と一所に歩くやうな眞似をやめて、じみちに發展の順序を盡して進む事はどうしても出来まいかといふ相談が出るかも知れない。さういふ御相談が出れば私は無い事もないと御答をする。が西洋で百年かゝつて漸く今日に發展した開化を日本人が十年に

年期をつゞめて、しかも空虚の譏を免かれるやうに、誰が見ても内發的であると認める様な推移をやらうとすれば是亦由々しき結果に陥るのであります。百年の經驗を十年で上滑りもせず遣りとげやうとするならば年限が十分に縮まる丈わが活力は十倍に増さなければならぬのは算術の初歩を心得たものさへ容易く首肯する所である。是は學問を例に御話をするのが一番早分りである。西洋の新しい説などを生嚼りにして法螺を吹くのは論外として、本當に自分が研究を積んで甲の説から乙の説に移り又乙から丙に進んで、毫も流行を追ふの陋態なく、又ことさらに新奇を街ふの虚榮心なく、全く自然の順序階級を内發的に經て、しかも彼等西洋人が百年も掛つて漸く到着し得た分化の極端に、我々が維新後四五十年の教育の力で達したと假定する。體力腦力共に吾等よりも旺盛な西洋人が百年の歳月を費したものを、如何に先驅の困難を勘定に入れないにした所で僅か其半に足らぬ歳月で明々地に通過したとしたならば吾人は此驚くべき知識の收穫を誇り得ると同時に、一敗また起つ能はざるの神經衰弱に罹つて、氣息奄々として今や路傍に呻吟しつゝあるは必然の結果として正に起るべき現象でありませう。現に少し落ち付いて考へて見ると、大學の教授を十年間一生懸命にやつたら、大抵の者は神經衰弱に罹りがちぢやないでせうか。ピン／＼して居るのは、皆嘘の學者だと申しては語弊があるが、まあ何方かと云へば神經衰弱に罹る方が當り前の様に思はれます。學者を例に引いたのは單に分り易い爲で、理窟は開化の

どの方面へも應用が出来る積です。

既に開化と云ふものが如何に進歩しても、案外其開化の賜として吾々の受くる安心の度は微弱なもので、競争其他からいら／＼しなければならぬ心配を勘定に入れると、吾人の幸福は野蠻時代とさう變りはなさうである事は前御話した通りである上に、今言つた現代日本が置かれたる特殊の状況に因つて吾々の開化が機械的に變化を餘儀なくされる爲にたゞ上皮を滑つて行き、又滑るまいと思つて踏張る爲に神経衰弱になるとすれば、どうも日本人は氣の毒と言はんか憐れと言はんか、誠に言語道斷の窮狀に陥つたものであります。私の結論は夫丈に過ぎない。あゝなさいとか、斯うしなければならぬとか云ふのではない。どうすることも出来ない、實に困つたと嘆息する丈で極めて悲觀的の結論であります。こんな結論には却つて到着しない方が幸であつたのでせう。眞と云ふものは、知らない中は知りたいけれども、知つてからは却つてア、知らない方が宜かつたと思ふ事が時々あります。モーパサンの小説に、或男が内縁の妻に厭氣がさした所から、置手紙か何かして、妻を置き去りにした儘友人の家へ行つて隠れて居たといふ話があります。すると女の方では大變怒つてとう／＼男の所在を捜し當て、怒鳴り込みましたので男は手切金を出して手を切る談判を始めると、女は其金を床の上に叩きつけて、こんなものが欲しいので來たのではない、若し本當にあなたが私を捨てる氣ならば私は死んで仕舞ふ、そこにある(三階

か四階の)窓から飛下りて死んで仕舞ふと言つた。男は平氣な顔を装つてどうぞと云はぬ許りに女を窓の方へ誘ふ所作をした。すると女はいきなり馳けて行つて窓から飛下りた。死にはしなかつたが生れも付かぬ不具になつて仕舞ひました。男も是程女の赤心が眼の前へ證據立てられる以上、普通の輕薄な賣女同様の觀をなして、女の貞節を今迄疑つてゐたのを後悔したものと見えて、再び故の夫婦に立ち歸つて、病妻の看護に身を委ねたといふのがモーパサンの小説の筋ですが、男の疑も好い加減な程度で留めて置けば是程の大事には至らなかつたかも知れないが、さうすれば彼の懷疑は一生徹底的に解ける日は來なかつたでせう。又此所迄押して見れば女の眞心が明かになるにはなるが、取返しの付かない残酷な結果に陥つた後から回顧して見れば、矢張り眞實懸價のない實相は分らなくても好いから、女を片輪にさせずに置きたかつたであります。日本の現代開化の眞相も此話と同様で、分らないうちこそ研究もして見たいが、斯う露骨に其性質が分つて見ると却つて分らない昔の方が幸福であるといふ氣にもなりません。兎に角私の解剖した事が本當の所だとすれば我々は日本の將來といふものに就てどうしても悲觀したくなるのであります。外國人に對して乃公の國には富士山があると云ふやうな馬鹿は今日は餘り云はない様だが、戦争以後一等國になつたんだといふ高慢な聲は隨所に聞くやうである。中々氣樂な見方をすれば出来るものだと思ひます。ではどうして此急場を切り抜けるかと質問されても、前申した通り私には

名案も何もない。只出来るだけ神経衰弱に罹らない程度に於て、内發的に變化して行くが好からうといふやうな體裁の好いことを言ふより外に仕方がない。苦い眞實を臆面なく諸君の前にさらけ出して、幸福な諸君にたとひ一時間たりとも不快の念を興へたのは重々御詫を申し上げますが、又私の述べ來つた所も亦相當の論據と應分の思索の結果から出た生眞面目の意見であると云ふ點にも御同情になつて悪い所は大目に見て頂きたいのであります。

——四四、一一、一〇『朝日講演集』——

中味と形式

——明治四十四年八月堺に於て述——

中味と形式

私は此地方に居るものではありません、東京の方に平生住つて居ります。今度大阪の社の方で講演會を諸所で開きますに就て、助勢をしろといふ命令——だか通知だか依頼だか兎に角催しに参加しなければならぬ様な相談を受けました。それでわざ／＼出て参りました。尤もこの堺だけで御話をしてすぐ東京表へ立ち歸るといふ譯でもないで、現に明石の方へ行きましたり、和歌山の方へ参りましたり、明日は又大阪でやる手順になつて居ります。無論話すことさへあれば、何處へ行つて何を遣つても差支ない筈ですが、暑中の際さう／＼身體も續きませぬから、好い加減の所で斷りたいと思つて居ります。併しこの堺は當初からの約束では是非何か講話をすべき筈になつて居りましたから私の方も夫は覺悟の上で参りました。従つてしつかりした御話らしい御話をしなければならぬ譯であります、どうもさう旨く行かないから甚だ御氣の毒です。唯今は高原君が樺太旅行談ついたり海豹島などの話をされましたが實地の見聞談で誠に有益でもあり、

且面白く聽いて居りました。私のは諸君に興味又は利益を興へると云ふ點に於て、逆も高原君ほどに参りませぬ。高原君は御覽の通りフロックコートを着て居りましたが、私は此通り背廣で御免蒙る様な譯で、御話の面白さも亦此服裝の相違位懸隔して居るかも知れませんが、先づ其邊の所と思つて辛抱してお聽きを願ひます。高原君は頻りに聽衆諸君に向つて厭になつたら遠慮なく途中で御歸りなさいと云はれた様ですが私は厭になつても是非聽いて居て戴きたいので、其代り高原君ほど長くは遣りません。此暑いのにさう長く遣つては何だか腦貧血でも起しさうで危険ですから出来るだけ縮めてさつさと片付けますから、其の間は歸らずに、暑くても我慢をして、終つた時に拍手喝采をして、さうして目出たく閉會をして下さい。

私は先年堺へ來たことがあります。是は餘程前私はまだ書生時代の事で、明治二十何年になりますか、何でも餘程久しい事のやうに記憶して居ります。實を言ふと今登つた高原君、あれは私が高等學校で教へてゐた時分の御弟子であります。あゝ云ふ立派なお弟子を持つて居る位でありますから、私も餘程年を取りました。其私はまだ若い時の事ですからまあ昔といつても宜しう御座いませう。今考へると殆ど其時に見た堺の記憶と云ふものはありませんが、何でも妙國寺と云ふお寺へ行つて蘇鐵を探したやうに覺えて居ります。それから其御寺の傍に小刀や庖丁を賣る店があつて記念のため一寸した刃物を其所で求めたやうにも覺えてゐます。夫から海岸へ行つたら

大きな料理店があつたやうにも記憶してゐます。其料理店の名はたしか一力とか云ひました。凡てがぼんやりして思ひ出すと丸で夢のやうであります。其夢のやうな堺へ今日圖らずも來て再び昔の町を車に揺られながら通つて見ると非常に廣い様な心持がする。停車場から此會場迄の道程も大分ある。斯う申しては失禮であるが昔見た時は極くケチな所であつたかのやうにしか、頭に映じないのであります。夫で車の上で感服したやうな驚いた様な顔をして、きよろ／＼見廻して來ると所々の辻々に講演の看板と云ひますか、廣告と云ひますか、夏目漱石君などと云ふやうな名前が墨黒々と書いて壁に貼り付けてある。何だか雲右衛門か何かが興行のため乗り込んだやうである。社の方から云へばあの方が宜いのでせうが、夏目漱石氏から云へばあゝ曝しものになるのはあまり難くない。猶車の上で觀察すると往來の幅が甚だ狭い。が夫は問題ではない、私の妙に感じたのは其細い往來がヒツソリして非常に靜かに晝寐でもしてゐるやうに見えた事でありませぬ。尤も夏の眞午だからあまり人が戶外に出る必要のない時間だつたのでせう、私が此所に着いたのは丁度十二時少し過でありました。二階へ上つて長い廊下のはづれに見える會場の入口から中の方を見渡すと、少し人の頭が黒く見えた位で、市内がヒツソリして居る如く聽衆も亦ヒツソリして居る。是は幸ひだ——とは思ひませぬ、又困つたと迄も思ひませぬ。けれどもまあ不入りだらうと考へながら控席へ入つて休息してゐると、何時の間にやらこんなに人が集つて來た。

此講堂に斯く迄詰め懸けられた人数の景況から推すと堺と云ふ所は決して吝な所ではない、偉い所に違ひない。市中があれ程ヒツソリして居るに拘らず、時間が来さへすれば是程多数の聴衆がお集まりになるのは偉い、餘程講演趣味の發達した所だらうと思はれる。私も折角東京からわざわざ出て来たものでありますから、成らうことならば講演趣味の最も發達した堺のやうな所で、一度でも講演をすれば誠に心持が好い。だから諸君も其の志を諒として、終ひまで靜肅にお聴きにならないことを希望します。此位にして此所に張り出した「中味と形式」と云ふ題にでも移りま

すかな。

第一、題からして餘り面白さうには見えません。中味は無論詰らなさうです。私は學會の演説は時々依頼を受けてやる事がありますが、斯う云ふ公衆、即ち種々の職業を有つた方がお集まりになつた席では餘り御話をした経験がありません。又頼みにも来ません。頼まれても大抵は断ります。と申すのは種々の職業を有つて居られる方々の總てに興味のあるやうなことは、私の研究の範圍、或は興味の範圍からして迎も力に及ばないといふ掛念があるからです。で成るべくは避けて居りますが、已むを得ず今日のやうな場合には、出来るだけ一般の人に興味のある爲に、社會問題と云ふやうなものを選びます。けれども其社會の見方とか或は人間の觀察の仕方とかが又自然私の今日までやつた學問やら研究に煩はされて何うも好きな方許へ傾き易いのは免かれ難い

所でありますから、職業の如何、興味の如何に依つては、誠に面白くない駄辯に始つて下らない饒舌に終ることだらうと思ふのです。のみならず是から遣る中味と形式といふ問題が今申した通り餘り乾燥して光澤氣の乏しいみだしなので殊更懸念をいたします。が言譯は此位で澤山でせうからそろ／＼先へ進ませう。

私は家に子供が澤山居ります。女が五人に男が二人、めめて七人、夫で一番上の子供が十三ですから赤ん坊に至る迄ズツと順よく竝んでまあ體裁よく揃つて居ります。夫は何うでも宜しいが斯様に子供が多うございますから、時々色々の請求を受けます。跳ねる馬を買つて呉れとか動く電車を買つて呉れとか色々強請られるうちに、活動寫眞へ連れて行けと云ふ注文が折々出ます。元來私は活動寫眞と云ふものを餘り好きません。どうも芝居の眞似などをしたり變な聲色を使つたりして脈氣のさすものです。其上何ぞといふと擲つたり蹴飛ばしたり慘酷な寫眞を入れるので子供の教育上甚だ宜しくないから可成遣り度くないのですが、子供の方では頻りに行きたがるので尤も活動寫眞と云つたつて必ず女が出て来て妙な科をするとは極つてゐない、中には馬鹿氣で滑稽なもの澤山ありますから子供の見たがるのも無理ではないかも知れません。で三度に一度は頑固な私もつい連れ出される事があります。監督者と云ひますか、何と云ひますか、先づ案内者或はお傳とでも云ふ格なんぞでせう。暑い所へ入つて鼻の頭へ汗の玉を並べて我慢をして動かす

多くは挨拶に窮する問題である。要するに複雑な内容を纏め得る程度以上に纏めた簡略な形式にして見せろと通られるのだから困ります。尤も近來は小學校などでも生徒に問題を出して日本の現代の人物中で誰が一番偉いか杯と聞く先生がある。此間私が或る地方へ行つたらある新聞でさう云ふ問題を出して小學生徒から答案の投書を募つて居ました。其中で自分の御父さんが一番偉いといふ答を寄こしたのがあると聞いて甚だ面白く感じました。自分の親父が天下一の人物だなどは至極好い見で結構です。夫は餘事であるが、兎に角先生や新聞杯からして、日本に唯つた一人偉い人があつて、其の人は甲にも乙にも丙にも凌駕して居るから中々見ろといふ様な數學的問題を出す世の中だから子供から質問が出るのも無理はない。併し困ります。楠正成と豊臣秀吉と何方が偉いと云ふが、見方で色々な結論も出来るし、さう白でなければ黒といった風に手早く相場をつける譯にも行かないし、要するに複雑な智識があればある程面喰ふ様になります。斯んな例を御話するのは唯馬鹿らしいから御笑草に御聞きに入れる迄の事だと御思ひになるかも知れませんが、實はさうではない。斯う批評して見ると成程子供は幼稚で氣の毒なものだとか取れませんが、其幼稚で氣の毒の事を大人たる我々が敢てしてゐるのだから甚だ情ない次第で、私は大人として子供は斯の如くたわいなものだといふ證據に自分の娘や何かを例に引いたのではなく、却て大人も亦此例に洩れぬ迂愚なものだといふ事を證明したいと思つて一寸分り易い小

に居る事があります。すると子供からよく質問を受けて弱るのです。尤も滑稽物や何かで帽子を飛ばして町内中逐かけて行くと云つた様な仕草は、只其儘の可笑味で子供だつて見てゐさへすれば分りますから質問の出る譯もありませんが、人情物、芝居がかつた續き物になると時々聞かれます。其間は甚だ簡單で唯何方が善人で何方が悪人かと云ふ丈なんです。私から云へば何方も人間にはなつて居ない、善人にも悪人にもなつて居らない。よしなつてゐたつて、幼稚にしる筋は子供の頭より込入つてゐるからさう一口に判断を下してやる譯には行かない。夫でどうも迷見つかされる事が度々出て來るのです。大人から云へば、只見てゐて事件の進行と筋の運び方さへ腑に落ちれば夫で済むのですけれども、悲しいかな子供には夫程一部始終を呑み込む頭がない。と云つてたゞ茫然と幕に映る人物の影が頻りに活動するのを眺めてゐる譯にも行かない。どうかして此込み入つた畫の配合や人間の立ち廻りを驚抓みに引つくるめて其特色を最も簡明な形式で頭へ入れたいに就ては已に幼稚な頭の中に幾分でも髣髴出来る倫理上の二大性質——善か悪かを取り極めて此の錯雜した光景を締め括りたい希望から斯ういふ質問を掛けるものと思はれます。活動寫眞はまだ宜い。所がお伽噺や歴史の本などを見て、昔の英雄などに就いて矢張り同様に簡単な質問を掛けられる事がある。太閤様と正成と何方が偉いとか、ワシントンとナポレオンと何方が強いとか、常陸山と辨慶と相撲を取つたら何方が勝つとか、中には返答に困らないのもあるが、

兒を例に用ひたのであります。凡て政治家なり文學者なり或は實業家なりを比較する場合に誰より誰の方が偉いとか優つてゐるとか云つて、一概に上下の區別を立てやうとするのは大抵の場合に於て其道に暗い素人のやる事でありませう。専門の智識が豊かによく事情が精しく分つてゐると、さう手短かに纏めた批評を頭の中に貯へて安心する必要もなく、又批評をしやうとすれば複雑な關係が頭に明瞭に出てくるから中々「甲より乙が偉い」といふ簡潔な形式によつて判断が浮んで來ないのであります。幼稚な智識を有つた者、没分曉漢或は門外漢になると知らぬ事を知らないで済して居るのが至當であり、又本人も其積で平氣で居るのでせうが、何うも處世上の便宜からさう無頓着で居にくくなる場合があるのと、一つは物數奇にせよ問題の要點丈は胸に疊み込んで置く方が心丈夫なので、兎角最後の判断のみを要求したがりませう。諸君最後の判断と云へば善惡とか優劣とかさう範疇は澤山ないのですが無理にも此尺度に合ふ様に何んな複雑なものでも委細御構なく切り約められるものと假定してかゝるのであります。中味は込入つて居て眼がちら／＼する丈だから責めて締括つた總勘定丈知りたいたと云ふなら、まだ穩當な點もあるが、何んな動物を見ても要するに是は牛かい馬かいと牛馬一點張りて凡て四つ足を品隔されては大分無理が出来る。門外漢といふものは此無理に氣が付かない、又氣が付いても構はない。どんな無理な判断でも與へてくれさへすれば安心する。だからお上でも高等官一等を拵へて見たり、二等を拵へて見

たり、或は學士、博士を拵へて見たりして門外漢に對して便宜を與へ、一種の締括りある二字か三字の記號を本來の區別と心得て満足する連中に安慰を與へてゐる。以上を一口にして云へば物の内容を知り盡した人間、中味の内に生息してゐる人間は夫程形式に拘泥しないし、又無理な形式を喜ばない傾があるが、門外漢になると中味が分らなくつても兎に角形式丈は知りたがる、さうして其形式が如何に其物を現すに不適當であつても何でも構はずに一種の智識として尊重すると云ふ事になるのであります。

是は複雑の事を簡略の例で御話をするのでありますから、其積りでお聴きを願ひますが、茲に一つの平面があつて、それに他の平面が交叉して居るとすると、此二つの平面の關係は何で示すかといふと、申す迄もなく其両面の喰違つた角度である。何方が高いのでもない何方が低いのでもない。三十度の角度を爲して居るとか、六十度の角度を爲して居るとか云へば極めて明瞭で夫より以外に説明する事も質問する事も何にもないのであります。夫を此二面が何時でも偶然平らに竝行でもしてゐるかの如き了見で、全體どつちが高いのですと聞かなければ承知が出來ないのは痛み入ります。人間と人間、事件と事件が衝突したり、捲き合つたり、ぐる／＼回轉したりする時其優劣上下が明かに分るやうな性質程度で、其成行が比較さへ出來れば宜い譯だが、惜しい哉この比較をするだけの材料、比較をするだけの頭、纏めるだけの根氣がない爲に、即ち門外漢

であるが爲に、どうしても角度を知ることが出来ない爲に、上下とか優劣とか持ち合せの定規で間に合せたくなるのは今申す通り門外漢の通弊であります。私が見る所では豈獨り門外漢のみならんやで、専門の學者も亦さう威張れた義理でもないやうな概括をして平氣で居るのだから驚かれるのです。

學者と云ふものは、色々の事實を集めて法則を作つたり概括を致します。或は何主義とか號して其主義を一纏めに致します。是は科學にあつても哲學にあつても必要の事であり、又便宜な事で誰しも夫に異存のある筈は御座いませぬ。例へば進化論とか、勢力保存とか云ふと其言葉自身が必要である許りでなく、實際の事實の上に於て役に立つてゐます。けれども悪くすると前申した子供や門外漢と同じ様に、内容に餘り合はない形式を拵へて唯表面上の纏りで満足してゐる事が往々ある様に思ひます。此間私は或學者の書いた本を讀みました。夫はオイケンと云つて、近頃獨逸で、有名な學者の著したものであります。尤も澤山の著述のうちで極く短かい一冊を讀んだ丈であります。兎に角其人の説の中に斯う云ふ事が書いてありました。現代の人は頻りに自由とか開放と云ふ様な事を主張する。同時に秩序とか組織とか云ふものを要求して居る。一方では束縛を解いて自由にして貰はなければ堪らないと云つて居ながら、一方では(例へば資本家と云ふ様なものが)秩序とか組織を立てなければ事業が發展しないと騒いで居る。が、此二つの

要求を較べると明かに矛盾である。——此所迄は宜しいのです。然しオイケンはこの矛盾は何方に片付けなければならず、又片付けらるべきものであるかの如き語氣で論じてゐた様に記憶してゐますが——即ちさう云ふ様に相反する事を同時に唱へて居つては矛盾だから、モツと一纏めにして、意味のある生活を人がやつて行かなければならぬと云ふ様な事を言ふのです。ですが貴方はまあどうお考へになりますか。オイケンの云ふ通りで宜いと御思ひですか、果して此矛盾が一纏めになるものとお思ひになりますか。又明かに矛盾して居ると云ふお考へでありますか。貴方にこんな質問を掛けたつて詰らない、又掛ける必要もありません。が私は何う考へてもオイケンの説は無理だと思ふのです。何故無理だと言ひますと、資本家とか或は政府とか、或は教育者とか云ふものが、總て多數の人間を相手にしてさうして、何か事を手早く運び、手際よく片付けやうと云ふ爲には、どうしたつて統一と云ふ事と、組織と云ふ事と、秩序と云ふ事を眞向に振翳さなければ出来ない話である。例へば事業家が事業をする。其の爲に人夫を百人雇ふ。職工を千人雇ふ。さうして彼等の間に規律と云ふものが無かつたならば、——彼等のうちには今日は頭が痛いから休むといふものも出来やうし、朝の七時からは厭だから己は午後から出ると我儘を云ふものも出来やうし、或は今日は少し早く切り上げて寄席へ行くとか、或は今日は朝出掛に酒を飲むんだとか各々勝手な事を、ばら／＼に行動されては折角一箇月で出来る事業も一年掛るか